東京・横浜を歩く

VOL. 1

三　浦　良

2014 年 11 月 22 日

目　次

開設のごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

（東京編）

1　夏目坂～親の愛を知らずに育った漱石　（早稲田）　・・・・・・・・・・・5
2「猫」の家　（千駄木）　・・・・・・・・・・・8
3　漱石山房　（早稲田）・・・・・・・・・・・・11
4「三四郎」～明治のストレイシープたち　（本郷）・・・・・・・・・・・・・ 14
5　関口大洗堰　（関口）・・・・・・・・・・・・・18
6　関口芭蕉庵　（関口）　・・・・・・・・・・20
7　花柳界の面影が香り立つ神楽坂　（神楽坂）・・・・・・・・・・・・23
8　人や貨物が行き交った神田川　（お茶ノ水）・・・・・・・・・・26
9　江戸の物流基地　（日本橋）・・・・・・・・・・・29
10　伝馬町牢屋敷　（日本橋伝馬町）　・・・・・・・・31

11　小塚原刑場跡　（南千住）　・・・・・・・・・・・33
12　千住回向院　（南千住）　・・・・・・・・・・・35
13　コツ通り　（南千住）　・・・・・・・・・・・37
14　千住大橋　（南千住）　・・・・・・・・・・・39
15　新吉原　（千束）・・・・・・・・・・・・・41
16　オールドタウンからニュータウン
へ変わる浅草　（浅草）・・・・・・・・・・・・・43
17　歌舞伎が弾左衛門支配から
抜け出した事件　（浅草）　・・・・・・・・・・45
18　13代目浅草弾左衛門小太郎　（浅草）・・・・・・・・・・・・49
19　浄閑寺　（三ノ輪）　・・・・・・・・・・53
20　元禄の祖民の暮らしが匂う街　（柳橋）・・・・・・・・・・・・・55

21　松尾芭蕉　（清澄）・・・・・・・・・・・・　58
22「幕末太陽伝」の品川宿　（品川）・・・・・・・・・・・・・62

23　鈴が森刑場跡　（南大井）・・・・・・・・・・ 65
24　芥川龍之介の「本所両国」を歩く　（両国）・・・・・・・・・・・・67
25　玉の井　（東向島）・・・・・・・・・・・72
26　向島百花園　（東向島）・・・・・・・・・・ 75
27　向島の桜　（向島）・・・・・・・・・・・ 78
28　伝研　（芝大門）・・・・・・・・・・・80
29　忠臣蔵　（高輪）・・・・・・・・・・・82
30　近藤勇終焉の地　（板橋）・・・・・・・・・・・86

（横浜編）

横 1　「天国と地獄」の舞台　（浅間台ほか）・・・・・・・・89
横 2　鶴見騒擾事件　（鶴見潮田）・・・・・・・・94
横 3　花月園遊園地　（花月園）・・・・・・・・・ 99
横 4　海芝浦駅　（末広町）・・・・・・・・・104
横 5　神奈川台場　（神奈川）・・・・・・・・・107
横 6　コットンハーバー　（神奈川）・・・・・・・・・110
横 7　横浜ゲーテ座　（山手）・・・・・・・・・・115
横 8　「ふるあめりかに袖はぬらさじ」　（横浜公園）・・・・・・・・119
横 9　富貴楼お倉　（尾上町）・・・・・・・・121
横 10　山手公園　（元町）・・・・・・・・・・124

写真について

本文作成日と写真撮影時の表示が異なる場合があります、記事の正確性を期すために、本文の校正の都度、新しい写真に変更することがあるためです。

開設のご挨拶

この論稿は、2013 年 1 月 27 日～2014 年 7 月までブログに掲載した小論をまとめて冊子にしたものである。

このブログは、私の街歩きの記録である。
3 年ほど前、現職をリタイアした或る日、思い立って「東海道ウオーク」を始めた。足かけ 2 年半もかかったが、日本橋から三条大橋まで完歩した。その後、中山道や「奥の細道」も歩いてみようかと思って資料収集したが、連れのサンチョの足の具合と折り合いがつかず棚上げになった。その間も、土日祝日には、地元や都内のあちこちをチョロチョロ歩いていた。連れは私の街歩きを「チョロマツする」と呼んでいた。

チョロマツする時、私は一つのこだわりを持ちながら歩いた。そのこだわりは、江戸や明治の匂いがするところを歩くことだった。だから、このブログは、現代の東京・横浜を江戸や明治時代の匂いを嗅ぎながら歩いた記録である。ここには背後で江戸や明治の臭いがしないような場所は登場しない。私がここぞと思う場所しか登場しないので、これは東京や横浜の観光ガイドでもない。

都市や街は本来個性的なはずである。南千住の「小塚原刑場跡」は、その場へ立つだけで、じわっとその長い過去が私たちの眼前に浮かんでくる。三ノ輪の浄閑寺もそうだった。しかし、大部分の街がそうではなかった。長い変遷を経てすっかり変わってしまった街が多い。例えば、鶴見の花月園遊園地は、戦後、競輪場に変わり、それもまた今では廃止されている。そういう所については、先人たちの記録や昔の資料を利用させていただいている。

題名にもかかわらず、このブログに読者が探している場所が出てくるとは限らない。しかし部分的でも登場する場所に関してならきっと血が通うガイドが出来ると自負している。

2014 年 11 月 22 日

1　夏目坂～親の愛を知らずに育った漱石

地下鉄早稲田駅前交差点に小倉屋酒店がある。このあたりは今では早稲田町だが、昔は牛込馬場下と呼ばれていた。小倉屋酒店は、漱石が子供の頃からここにあったと書かれているように漱石の「硝子戸の中」にも登場する酒屋である。それだけでなく、この酒屋の起源は漱石の時代よりもずっと古い江戸の元禄時代までさかのぼる。元禄時の「忠臣蔵」の討入義士の一人だった堀部安兵衛がまだ若い浪人で中山安兵衛と言っていた頃、高田馬場で 18 人を相手に叔父の仇討の支援をした。安兵衛は、仇討支援に出かけるに当たり、この小倉屋で酒をあおってから出かけたというのである。安兵衛にはさらに余談があって、仇討の場へ着くと、見物の娘さんから赤い扱き帯（しごきおび）をプレゼントされ、それをタスキにして無事仇討ちを成し遂げた。後日、帯をくれた娘の父に気に入られて、婿入りして堀部姓に変わった。だから、安兵衛は生涯で 2 度仇討ちに参加した男だったことになる。
さて、その小倉屋酒店から夏目坂を上りかけると、すぐ左に「夏目漱石生誕の地」の碑が立っている。

早稲田の小倉屋酒店。直進すると漱石が大学の先生を辞めてから没するまで暮らした漱石山房がある。右に曲がるとすぐ漱石生家跡の碑がある夏目坂の上りになる。夏目坂は漱石の実父直克が名主の権限で自ら命名した。

馬場下は漱石が生まれた場所である。彼は両親が年をとってから生まれた子だったので、生後すぐ里子に出されたり、養子に出された。養子先の両親が離婚して 10 歳で生家に戻るが、大学に入るとすぐ下宿をするといってこの家を出ていく。以降、帝大の先生を辞めて作家になるまで、ここへ来ることはなかった。漱石はどうにもこの生家によい印象を持てなかった。早稲田へ引越して散歩で実家の前へ立った時に、漱石は次のように言う。

> **「・・・私は茫然として佇立した。なぜ私の家だけが過去の残骸のごとくに存在しているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩れてしまえばいいのにと思った」（「硝子戸の中」（漱石全集第 8 巻、P468）**

自立心を持った人が故郷を捨てる時というのは、ステップアップして居場所が確保できた時か逆にドロップアウトして戻場所を失った時か、のいずれかと考えられる。漱石は、早稲田へ戻ってきて、捨てた故郷に代わる新しい居場所をやっと確保できたと考えたのだろうか。

> 「私の旧宅は今住んでいるところから 4,5 町奥の馬場下という町にあった。・・馬場下というのは高田馬場の下にあるという意味だから、江戸絵図で見ても朱引内か外かわからない辺鄙な隅の方にあったに違いないのである。それでも蔵造の家が狭い町内に 3,4 軒はあったろう。坂を上がると右側に見える近江屋伝兵衛という薬種屋などはそのひとつだった。坂を下りきったところに間口の広い小倉屋という酒屋もあった。・・・堀部安兵衛が高田馬場で敵を討つときにここへ立ち寄って枡酒を飲んでいったという履歴にある家柄であった。」（硝子戸の中 19）

朱引きというのは江戸時代の江戸御府内を示す。江戸城を中心にして、その四方を品川（大木戸）、四谷（大木戸）、板橋、千住、本所、深川以内の地とし、地図にその境界線を朱で書いたので朱引内と呼んだ。だから、江戸時代に朱引きの境目にあった「馬場下」というのは相当に辺鄙な場所だった。

夏目金之助は慶応 3 年 2 月 9 日（旧暦 1 月 5 日）生まれで、父直克 50 歳、母千枝 41 歳で 5 男 3 女の末っ子だった。父直克は年老いた時に生まれたこの子を嫌い、生後間もなく里子へ出した。一旦戻るが、2 歳の時に再び、塩原昌之助の養子に出される。10 歳で養父母が離婚したため生家へ引き取られる。以降は生家の一員として過ごすが、22 歳で一高を卒業するまで養子先の塩原姓を名乗され続けた。しかも、その復籍の手続き不備で、「道草」にある通り、後に養父からお金をせびられることになった。このように、漱石は両親の愛情に恵まれない幼年期を過ごした。

冒頭の「硝子戸の中」の抜粋で、旧宅と言うのが漱石の生家である。漱石の生家は代々江戸牛込馬場下の町名主だった。名主は町人だが、お触れの伝達、人別帳の管理、紛争の仲介などを行って行政の末端を担当したので、苗字帯刀するなど武士に準じた待遇を受けた。金之助の父・直克も幕末までは羽振りもよく、「馬場下の夏目様」と呼ばれて、自分の家の前の坂を「夏目坂」としたり、町名を井桁に菊の家紋にちなんで「喜久井町」に変えたりした、と「硝子戸の中」で書かれている。しかし維新後は、儲け話に乗せられて保証人になったがその話がつぶれて夏目家の財産もほとんど失った。

父と子の間であった会話を鏡子夫人が「漱石の思い出 5」で紹介している。

「お前学問をするっていったい何をやるんだ」
「文学をやります」
「なに、軍学をやる」

直克は漱石にとっては、常識はずれ、わからず屋でケチな人だったようだ。金之助の幼少期が両親の愛情に乏しかったために、彼は生家の者に軽蔑や反感をもっていた。それだけでなく、時代が大きく変わりつつあったときに、自分が属する家庭がなくて一人っきりで放り出されたような心細さを日々抱いていた。この体験はそれまで普通の日本人が経験することがなく、近代に特有な自立した個人として漱石を生み出すもとになったのだろう、と江藤淳は漱石論で述べるほどだった。

（2013 年 1 月 27 日）

2　「猫」の家

「吾輩は猫である」を改めて読み直して、漱石が明治の近代化について「異議申し立て」をしているという思いを強く感じるようになった。そこで私は、漱石が何についてどのような異議申し立てをしているのかを検討した小論を書いた。「明治の近代化に異議を申し立てる「猫」～「吾輩は猫である」を読む」（2012 年 12 月 9 日）である。

漱石が英国留学で精神病にかかった話は有名である。その原因には 2 つの有力な説があって、一つは英語研究絶望説である。東大を英語研究に関してトップの成績で卒業し、英語に関して相当な自信家だった漱石は、留学して英国人を見返してやるつもりだった。しかし、イギリスで改めて勉強を始めたら、異なる文化圏で育った日本人が到底英国人と対等な英語研究などできないことを肌で理解し、国費留学している自分が何の文化貢献もできそうにないと考えて絶望したと考えるもの。第二には貧乏生活説。留学生活はいつも資金が不足がちだった。購入する本が多かったことに一因があるのだが、暮らしは貧乏生活だった。さらに日本との連絡は鏡子夫人が窓口だったが、その夫人がやることなすことが遅く、頼んだことと違うことをやってしまう。異国に一人放り出されてしまったと強い孤独感を感じたと考えるもの、である。

南北線の「東大前」で下車。上天気だ。漱石が住んだ「猫」の家から団子坂を通って谷中銀座を経て日暮里駅まで歩いた。ここは散歩好きの漱石が好んで歩いたルートでもある。

「猫」の家跡。塀の上の猫は彫刻である。。実際は黒猫だったが、とてもよく出来ている。。奥の建物は郁文館高校。

2 年間のロンドン留学から帰国した漱石は、直後は鏡子夫人の実家の中根重一氏宅へ仮住まいする。本来は留学前にいた熊本の五校へ戻ることが条件だったが、漱石は熊本へ戻るのを嫌がり、その旨を上申していた。その結果、勤務先は一高教師に決まった。そこで千駄木の家へ引越した。ロンドン時代から続いていた漱石の神経衰弱はこの家で最悪な状況になった。しかし、この家で「猫」を書いて好評になると、その神経衰弱も少しずつ回復しだした。

「道草」は、健三が遠いところから帰ってきて駒込の奥に所帯をもったのは、東京を出てから何年目になるだろう、寂しいと書き出されている。
遠いところから帰ったというのは、漱石自身の気持ちが、松山や熊本だけでなく、ロンドンまで回り道をして東京へ帰ってきたことを暗示している。回り道の間は、自分に執着して自己追求するというこれまでの唯我独尊のような生き方をしてきた。しかし、帰って来たからには、これからは人との交際や自分を取り巻く他人たちとの間で生じる社会生活を大事にする生き方へ代わることになる。
だから、回り道が終わって帰ってきたという言葉は、人と人が交際する社会へ帰ってきたという宣言で、ここには漱石の新たな覚悟が示されているように思われる。

実際の漱石の様子は以下の通りだった。
ロンドン滞在中に、鏡子夫人に頭の具合が悪い、この分だと一生治らないかもしれないという手紙を送る。また、文部省には留学中毎年実績報告書を提出するが、その年は白紙の報告書を提出したという。そのうち同じ英文学研究で留学中の人が漱石を訪問すると、毎日部屋へ閉じこもって暗闇の中で悲観している、漱石発狂か、と文部省へ報告した。

ロンドンへ行くまでの漱石は、英文学者としてイギリス人と対等に競争し、日本の国威を世界に発揚させたいと考えていた。実際に英国で勉強を始めると英文学者として本場の研究家と渡り合うことはできないことがだんだんわかってきた。その結果、彼は無力さを味わい、人生の目標を失い、英文学研究で国に貢献することが出来ない、何のために生きているか分からない状況へ追い込まれた。孤独の中で東京の鏡子夫人と手紙をするが、返事が来ない。家族からも切り離される。孤独で傷ついた内面を抱えてロンドンを彷徨った、と江藤淳は分析した。

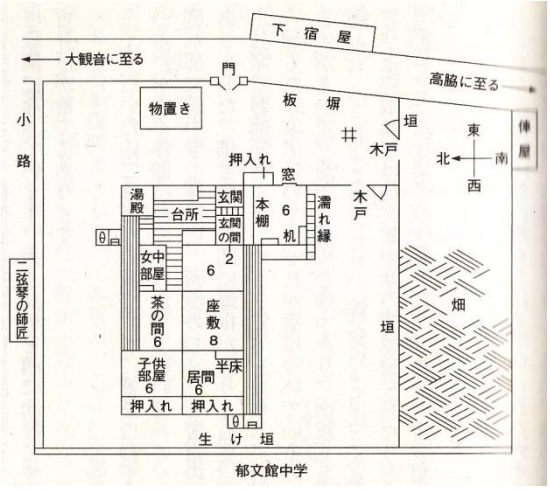
日本へ帰ってきてもノイローゼは治らない。実際に帰国後の方が、漱石のノイローゼはひどい症状を呈した。帰国した年の梅雨時から悪化し、物を投げつけ、怒鳴り散らす。小刀を渡す。鏡子夫人が 3 子目の妊娠で悪阻がひどく、数か月間別居もした。

こうした状態は翌 37 年 4，5 月頃から小康状態になった。「吾輩は猫である」はその年の 12 月頃から書くが、その寸前の頃である。その年の 6，7 月頃どこからともなく生まれて間もない子猫が家にきて、初めは鏡子夫人が猫嫌いだったこともあって何度も追い出されるが、妙になれなれしい。ある日漱石がこの猫はどうした、そんなに入ってくるならおいてやったらいいじゃないか、ということで夏目家の飼い猫になった。家へ出入りする按摩のお婆さんが、その猫を見て、奥様この猫は全身足の爪まで黒くて、珍しい福猫で、飼っておいたら家が繁盛する、という。それを聞いてうれしくなり、家族中でかわいがるようになった。

これが「吾輩は猫である」の主人公である。鏡子夫人は、当時漱石は、特別に小説を書くという気もなかったが、長い間書きたくてたまらない気持をこらえていたものが、一旦書き出したら一気呵成に小説になっていったようだった、という。猫以外でも、坊ちゃんなど長いものでも 5 日か 1 週間、ふつうは一晩か二晩で書いてしまったという。

また、猫は最初は短い予定だったが、ホトトギスで発表すると好評でみんなが面白いといってほめるし、あとを見たいという読者の注文、虚子の薦めで、あの長編になったという。さらに、表題も最初本人は「猫伝」にでもしようかと迷っていたが、虚子が書き出しの一句を採ってこれでよかろうといって決まったものという。

当時住んでいた千駄木の家は、家主の斉藤先生が仙台へ転勤して留守だったものを借りた。大変広い地所の家で、母屋に畑が隣接し、ここで多くの野菜も作ったという。玄関横の 6 畳間が漱石の書斎で、道を通る書生におい探偵君と呼びかけた窓もある。また、野球ボールを始終畑へ投げ入れた郁文館中学の運動場、夫婦喧嘩ばかりしていた車屋、二弦琴のお師匠さんの家も実際にあったものだった。（夏目鏡子「漱石の思い出」ＰＰ151～160）


下宿屋
大観音に至る
高脇に至る
門
物置き
板塀
小路
井
木戸
垣
東
北
南
西
伸屋
押入れ
窓
湯殿
台所
玄関
玄関の間
本棚
6
机
濡れ縁
木戸
中屋
女部
6
2
茶の間
6
座敷
8
畑
垣
二弦琴の師匠
子供部屋
6
居間
6
平床
押入れ
押入れ
生け垣
郁文館中学

（2013 年 1 月 27 日）

3 漱石山房

早稲田駅前交差点から東へ行くと、漱石公園がある。存命中は「漱石山房」と呼ばれた漱石終焉の地である。その夏目邸はS20年5月の空襲で全焼した。その跡地の半分に都営住宅が建ち、残りが公園になっている。公園の入り口に漱石の胸像がある。

漱石山房跡の漱石像。漱石は日本を代表する文豪だが、実際にはずいぶん小柄な人だった。彼は慶応3年生まれなので、明治1年が1歳という具合に明治の年数が彼の年齢を示した。漱石はM40年に大学を退職して文筆活動に入り、T5年に没したので、作家活動は僅か10年間だった、その間に彼は8冊の小説を書いたので、漱石は相当多産な作家だった。

M40年3月末に帝大を退職し、4月に朝日新聞へ入社した。入社と言っても新聞社へ勤務したのでなく、作家生活へ専念することになったのである。鏡子夫人の「思い出」では、ちょうど最初の長編小説『虞美人草』を書き上げた時で、学校へ行く必要もなくなり、高い家賃を払い続けるのもしゃくだった、本郷にいる理由もないので引越した、といっている。転居先が早稲田で、しかも生家のすぐ近くだったというのは、とても意味がありそうだ。

漱石は、幼少期に親から受けた愛情が乏しかったので、生家のものに対して軽蔑や反感すら抱いていた。そのためだろうか、大学卒業後、彼は西へ西へと行って東京から遠ざかった。彼はまず松山へ行き、次いで熊本へ行って、挙句の果てにロンドンまで行った。その間に、勉学を積んで、漱石は明治時代の日本を代表する英文学研究の寵児に成長した。

しかし、西へ向かっている間に、同時に精神も痛めてしまった。東京へ戻ると、強度の神経衰弱に悩まされた。留学後は 4 年間派遣元の熊本で教職につくという文部省の条件を拒否し、強引に委東京在住を貫いて、帝大教師になった。その間、一向に不安定な精神は改善しない。

ところがある日、家に紛れ込んできた黒猫を主人公にして、偶然書いた「吾輩は猫である」の第一編がが予想外に好評で、当初は一、二編程度と思っていたものが十一編まで膨らんだ。しかも、書くことが楽しくてしようがない。こんなものならいくらでも書けるぞと何度も思う。それだけでなく、だんだん神経衰弱の方も症状が改善しだした。あとから考えてみると、病気の原因は、英文学研究で英国人の上を行くような成果が生み出せないという強いストレスだったようで、教職から離れれば離れるほど病状が改善した。

漱石は「立身出世」に高い価値があった明治時代において、「英語」「留学」「学歴」という立身出世のためのカードを全部持っていた。その彼が、ロンドンで自分の力では英文学研究の分野で世界貢献ができないことを知り、自分に絶望し、精神までも痛めてしまう。帰国後にそこから立ち上がるために彼が行った選択は、持っていた立身出世のカードを全部捨ててしまうことだった。漱石山荘へ来た時の漱石は、退路を断って、作家生活に賭けた気持ちで一杯だった。

実際にも、この「漱石山房」で、驚くほどのスピードで、次々と作品を発表した。

M40 年 6 月 23 日～10 月 29 日	**「虞美人草」を朝日新聞へ連載**
M41 年 9 月 1 日～12 月 29 日	**「三四郎」を朝日新聞へ連載**
M42 年 6 月 27 日～10 月 14 日	**「それから」を朝日新聞へ連載**
M43 年 3 月 1 日～6 月 12 日	**「門」を朝日新聞へ連載**
M45 年 1 月 1 日～4 月 29 日	**「彼岸過ぎまで」を朝日新聞へ連載**
M45 年 12 月 6 日～T2 年 11 月 5 日	**「行人」を朝日新聞へ連載(病気で一時中断)**
T4 年 1 月 13 日～2 月 23 日	**「硝子戸の中」を朝日新聞へ連載**
T5 年 5 月 26 日～	**「明暗」を朝日埜ので、新聞へ連載(絶筆)**
T5 年 12 月 9 日	**胃潰瘍で死去**

漱石は慶応3年生まれだったので、明治元年＝1歳という具合に、明治の年数がそのまま年齢になっている。　作家生活はM40年がスタートだったので、40歳から50歳で死去する迄の10年間に過ぎない。その間に8篇の小説を書いた。これ以前には「猫」と「坊っちゃん」があるが、そのいずれもが異なった作風で、一つとして同じような小説は書かなかった。それほど文学を大事に思いながら、一作一作において自分を賭けていたのだ。

私には、早々に家を捨てた漱石が世界を一周して生まれた土地へ舞い戻ったように見える。だから、ここが気に入った場所だったように思えるが、本人は決してそうではなかった。鏡子夫人は「思い出」で、350坪の土地だったが、子供たちが成長すると狭く感じられるようになった。また裏に貧民長屋があって、ケンカや叫び声がよく起きる。垣根を壊して焚付けにしてしまうこともあった。だからあまり気持ちがいい家ではなかった。何度の引越しの話も出たが、ずるずると居続けた、という。漱石にはここが終の棲家になった。しかし、あまり気持ちがいい家ではなかったので、自分が買って、所有する家にはしなかった。彼は生涯借家暮らしをしていたのだ。生家のすぐそばへ戻ってきたにもかかわらず、母の胎内に戻るような安楽感を得られなかったのかもしれない。近代人の孤独を味わってしまった漱石には、心を開いて帰属できる場所などどこにもなかったといってもいい。　(2013年2月5日(火))

復元された漱石山房。漱石公園に置かれているが、安っぽい上に周囲のマンション群とミスマッチな代物になっている。

4「三四郎」～明治のストレイシープたち

最近の東京歩きは、「夏目漱石の東京を歩く」と呼んでもいいほど漱石漬けになっている。。一度目が早稲田界隈で、夏目坂、漱石公園を歩いた。二度目は市谷小学校や神楽坂を歩いた。三度目は三四郎池、千駄木、団子坂を歩いた。そのほかに内藤新宿や浅草三間町も行ってみたが、街の様子が変わり、場所や施設の特定ができなかった。今回は三四郎池と団子坂の話をする。

三四郎池。本名は旧加賀藩邸の育徳園心字池だが、漱石の「三四郎」がここを舞台にして評判を呼んだので、主人公の三四郎の名前から「三四郎池」と呼ばれるようになったという。

漱石の「三四郎」は、明治40年ころ、田舎(熊本)を出て東京の大学で勉強する青年の話で、大学とその周辺を舞台にして、先生、先輩、同僚、若い女たちと出会う学生生活が描かれている。

上京する列車で一緒になった若い女性と名古屋で同宿することになる。何もできずに一夜が明ける。駅で別れるときに、「度胸がない人」と言われてしまう。その後名古屋から同乗した髭の広田先生と知り合う。その広田先生が言う、日露戦争に勝って一等国になったといっても、国中がひっ迫し、不景気で経済も先行きが危うい。反比例するように、軍人が大きな態度を取り始めている。こんな状態が続けば日本は滅びるね、と。そして、熊本より東京は広い、東京より日本は広い、日本より(世界は)広い。だからもっと見識を広げないとだめだ、ともいう。

この列車の中の光景は、星雲の士を抱いて近代人の仲間入りをしようとする青年が、古臭い田舎を出て、変わりつつある世相や新しい考え方を平然と話す学者などに出会って、ドギマギする様子が描かれる。

三四郎が大学へ通い始め、従兄の野々宮さんに挨拶へ行った帰りに、三四郎池へ立ち寄ると、そこで初めて美禰子に合う。

> 「ふと目を上げると、左手の丘の上に女が立っている。女のすぐ下が池で、向こう側が高い崖の木立で、その後ろが派手な赤レンガのゴチック風の建築である。・・・三四郎のしゃがんでいる低い陰から見ると、丘の上は大変明るい。女の一人はまぶしいと見えて団扇を額のところへかざしている。…『これはなんでしょう』『これは椎』。女が三四郎の前を通り過ぎる時に白い花を落とす・・・」（第2章、PP32-33）。

この光景を画家の原口さんが描き、「三四郎」の結末で完成し、「森の女」の絵になる。美禰子に三四郎は大いに振り回される。その舞台が団子坂である。団子坂は「三四郎」に二度登場する。
最初は、秋晴れのある日三四郎が散歩へ出て団子坂へ来る。団子坂上で広田先生と与次郎の二人連れに出会う。この広田先生に美禰子を紹介される。
二度目が美禰子との初デートである。広田先生やよし子らと一緒に菊人形見物に来たところ、途中で離れて美禰子と三四郎が二人きりになる。迷子の気分になる。その時、美禰子が「迷子をストレイシープという」といいながら美禰子自身がストレイシープのようなものだという。まもなく美禰子から迷える二匹の仔羊が書かれた絵ハガキが届く。三四郎は二匹のうちの一匹が自分であると知り、嬉しくなって美禰子に淡い恋心を抱くようになる。

団子坂上

幕末から明治末にかけて、菊人形の芝居小屋が並んだ。散歩好きの漱石は何度もここへ来た。しかしやがて両国国技館で電気仕掛けの菊人形が登場するようになるとここは衰え、関東大震災で完全に廃止された。森鴎外が住んだ観潮楼(現区立鴎外記念本郷図書館)が隣接している。 鴎外はこの 2 階から東京湾の品川の海の白波がよく見えたことから「観潮楼」と呼んだ。

三四郎は上京後心が次第に故郷から離れていく。かといって東京の世界になじんだわけでなく、自分の居場所がわからない。周囲には、熊本の世界、広田先生のインテリの世界、与次郎の軽薄だがキラキラ光る新しい若者の世界、知的で自由に生きる美禰子らの若い女性の世界、轢死した女性たちの世界など幾つもの場所がある。しかし三四郎はどれにもなじむことができず、「矛盾だ」と言ってうろうろ動き回るストレイシープである。

他方、経済的に余裕がある美禰子は、自分を「お貰いをしない乞食」と呼ぶ知的な女性。三四郎に好意を寄せながら自身の結婚問題に揺れる。結局よし子の交際相手だった男と結婚することになるが、一見奔放に見えるが、結局因襲から脱しきれない旧弊な明治時代を生きる女性の生き方を選択していく。そのため、すべてが「かりそめの恋」に終始し、自分自身に満足できないストレイシープである。

ここでは男女間で互いに相手を思う心の不安定さが述べられているが、ことは恋愛感情だけでなく、当時の日本の針路自体が帝国主義路線をいくのか軍国主義路線を行くのかと議論百出で、一体どこへ行くのか日本と言われた時代だった。多分、三四郎と美禰子だけでなく、明治時代を生きたほとんどの人々がストレイシープ状態だったに違いない。

夕焼けだんだん

谷中商店街は、日暮里駅から千駄木駅へ向かう途中にある商店街。昔はどこにでもあるような小さな町だったが、平成８年ＮＨＫ連続ドラマ「ひまわり」の舞台になって以来、活性化策が功を奏して賑わいがある商店街になった。

（2013 年 2 月 5 日（火））

5 関口大洗堰（せきぐちおおあらいせき）

約 40 年前、私がまだ大学生になったばかりの頃、文京区大塚にあった某県の学生寮に住んでいた。その寮は音羽通りの講談社の向い側にあった。自分の学校へ行くには、茗荷谷駅から東京駅へ出て田町まで行った。しかし土日や授業がない日には、向かいの目白台を超えて早稲田へよく出かけた。関口台公園を抜けてカテドラル大聖堂の横を過ぎて目白通りへ出る。右折して椿山荘を過ぎたところに胸突き坂があって、以前に総理大臣をした男の実家だという大きな屋敷を見ながら坂を下りきると神田川がある。当時はフォーク全盛期で「神田川」をそのまま題名にした歌も流行っていたので、貧乏学生の下宿屋が並ぶ川という印象が強い所だった。その坂が川を渡る角の左側に「関口芭蕉庵」がある。当時は、芭蕉といえば深川と思い込んでいたのでなんでこんなところにあるんだろうかと思っただけで、その先を追及しなかった。ずっと後になって学生寮の同窓会があった時に、その話が出て、実はあの芭蕉さんは確かに「俳聖」と呼ばれた俳句の世界の神様だが、それは彼が 40 歳以降の話。実は若い頃は実業家肌のところがあって、しかもかなりやり手だった。その事例が神田上水の浚渫事業だよと、教える人がいてびっくりした。

神田上水の「白堀取水口」。ここから後楽園の水戸屋敷まで掘割で上水が流された。

神田川は、井の頭池（三鷹市）を水源にして東京を東に流れ、途中で善福寺川や妙法寺川と合流し、隅田川へ注ぐ川である。しかし我々には、全部が神田川でなく、上流部が江戸の上水道だった「神田上水」で、下流部が江戸の水上交通路だった「神田川」という方がなじみが深い。

徳川家康は、江戸入府に当たって、井戸水による上水確保の限界を予想して神田川からの上水確保を進めた。その時期ははっきりしない点もあるが、後楽園の水戸藩邸へその上水が引かれたのが寛永 6 年（1629 年）というので、寛永年間（1624 年～1644 年）の早い頃だろうと推定されている。

井の頭から開渠（堀）で流れてきた水は、この目白台下の「関口大洗堰」で一旦滞留させて、水量を調整したうえで、二つの流れに分けられた。一つの流れが左岸側に新たに開削した「白堀」で、水戸屋敷（小石川後楽園）まで流した。これが江戸の上水となった。もう一つの流れがそのまま流されて神田川となった。
上水が水戸屋敷を出た後は、神田川を水道橋（実際には懸樋（かけひ）で、その位置も今の水道橋よりも下流側だった）で渡り、次いで樋や桝を使って神田や日本橋方面の武家地や町人地へ給水し、竹や石で造られた水道管へ流されて、上水井戸へ溜められて、それを桶でくみ上げて使われた。余水はお茶の水で再び神田川へ戻された。
関口大洗堰は水を滞留させて分流するために作られた大きな石の構造物である。「江戸名所絵図」では、水が大滝となって激しく下り落ちる様子が描かれており、江戸の名所の一つだった。神田上水では昔から沿道の住民に定期的な草取りや浚渫が義務付けていた。しかし、この関口から水戸屋敷までの「白堀」だけは、給水を受ける神田や日本橋の利用者（町内会）に定期的な浚渫を義務づけていた。神田上水がまかなえた人口は約 15 万人で、さらに江戸に人口が増えたため、承応 2 年（1653 年）頃から、多摩川の水を江戸へ引き込むために「玉川上水」が整備されるようになった。しかしそれで神田上水の役目が終わったわけではなかった。「玉川上水」は四谷大木戸へ到着すると、神田上水で供給できなかった江戸の南部方面を中心に給水した。神田上水がその役目を終えるのは、明治 34 年（1901 年）である。だからこの神田上水は約 270 年もの間江戸の人々に毎日水を配っていたことになる。江戸という大都市は、人が歩くための道路、膨大な物流を支えた河川や水路などに加えて、都市水道の整備によって支えられている。ヨーロッパの都市ですらその当時は十分なインフラがなくて大都市になっていなかった。この神田上水と関口大洗堰、そして樋や桝による水供給はおそらく他に例がなかったものと思われる。

（2013 年 2 月 12 日（火））

6 関口芭蕉庵

関口大洗堰の約4百ｍ上流、胸突坂の入口に「関口芭蕉庵」がある。説明板には、松尾芭蕉が1677年から4年間ほど神田川改修工事に参画するためにここに住んだとある。言うまでもなく、「俳聖」と崇められたあの松尾芭蕉である。

「一所不在」といって、「旅の詩人」のような暮らし方をした人と思っていた。しかし、改めてその伝記を読むと「旅の詩人」のような生活をしたのは「野ざらし紀行」へ出発した41歳から51歳で没するまでの晩年の10年間で、それ以前の40年間は空白のようだという。俳句の神様と呼ばれた人なので、門人や後世の学者らが彼を美化するあまり、その生い立ちや青年時代のことにたくさんの虚構が作られて、研究が深まらなかったのだろう。
いかに天才があり偉大な人でも、初めはごく普通の子供だったろうし、血気盛んな青年時代だってあっただろうと思う。松尾芭蕉が不明な部分をもつ偉人ということ自体が大いに興味を引くが、田中善信氏の研究によれば、芭蕉は聖人と俗人の二つの顔を持った人だったという（「芭蕉の二つの顔」講談社学術文庫、2008年）。そこで、田中氏の推理小説のような語り口で展開される上記図書に沿って芭蕉の秘密に迫ってみることにする。

関口芭蕉庵の庭。あちこちの足元に芭蕉が詠んだ俳句を書いた札が立っていた。

芭蕉は、正保元年（1644 年）、伊賀上野の農民・与左衛門の 6 人兄弟の 3 番目の二男である。芭蕉が 13 歳ころ父が死亡したため、伊賀を支配していた藤堂藩の藤堂新七郎良精（よしきよ）へ武家奉公し、その子の良忠（俳号は蝉吟ぜんぎん）の雑用をして仕えた。

しかし、奉公人の一人にすぎなかった芭蕉は、この時、蝉吟の相手をしながら俳句勉強をし、また雑用を通して経理や帳簿付け、物書きを学んだ。蝉吟は芭蕉を寵愛し、俳句作りを一緒に学び、京都の季吟のもとへ何度か芭蕉を派遣して作品の添削や指導を受けていたが、寛文 6 年（1666 年）、蝉吟は 25 歳で没した。芭蕉は 23 歳。そのまま藤堂家の奉公人を続けた。

6 年後の寛文 12 年（1672 年）俳諧集「貝おほひ」を書き上げると、単身江戸へ出た。彼は今は亡き蝉吟の京都の師匠だった季吟の紹介で、同じく季吟の弟子の卜石（ぼくせき）の実父である日本橋本船町の名主・小沢太郎兵衛を頼った。初めは小沢家へ下宿しながら帳簿付けなどの手伝いをしたが、次第に名主業務が多忙になってくると、隣町の日本橋小田原町へ住まいを移し、算盤や書き物が得意だった芭蕉は名主の仕事を代行する仕事をするようになった（後に「町代」と呼ばれた業務である）。

名主代行の仕事をしていたある日、神田上水の白堀部分（関口～小石川の間）の浚渫作業の話が舞い込む。もともと白堀は毎年底浚いによる清掃が必要で、その水道利用者が人足を出して「直浚い」をしてきた。しかしその浚渫作業は、当日は仕事を休む必要があったし、何と言っても肉体労働がきつくて利用者には負担だった。そのため多くの人たちはお金で代理人を雇った。商人たちから話を聞いた芭蕉は自分がその仕事を請け負うことを考えた。もちろん請負はまだ非公認である。田中氏はずっとのちのデータを使って試算した。各町から浚渫費用として 6 百貫（150 両）集まる。約 3 千人の人足を使用する工事である。そのために数百人の人足が必要になる。これをある年に非公認のまま芭蕉が請け負ってやり遂げた。その結果も良好で、街の信頼も得た。その結果、延宝 5 年（1677 年）から延宝 8 年（1680 年）までの 4 年間にわたって、今度からは公認されて、芭蕉は神田上水の浚渫作業を請け負うようになった。芭蕉以前に請負はなかったので、芭蕉が考案したものだ。

関口芭蕉庵はこの神田川浚渫作業のための芭蕉の住まいだった。前年の延宝 4 年、芭蕉は一時帰国し、甥の桃印を江戸へ連れてきた。桃印は両親を早くに亡くした孤児で、いずれは芭蕉が引き取るつもりだった。江戸へ来て生活が安定しだして、同時に多忙になった。その時に手足になってくれる桃印を呼んだのである。29 歳で単身江戸へ出て 5 年ほどで芭蕉は一度に 150 両ものお金を動かすようになった。またその頃、俳諧の世界でも進歩があ

り、延宝 6 年に「万句興行」を成功させて、桃青門下の存在を広めて、江戸俳壇でも確固たる地位を固めつつあった。

こうした一連の事態は、芭蕉が相当な「やり手」で、処世術に長けた人だった事を示しているだろう。「関口芭蕉庵」はその芭蕉の俗人ぶりを象徴するものではないだろうか。しかし、順風満帆に見えた芭蕉が、延宝 8 年（1680 年）冬、突然、日本橋小田原町から深川へ移住する。37 歳である。この移住で芭蕉の門人 20 名のうち 13 名もの人たちが門下から離れてしまった。それだけでなく、名主代行や神田川浚渫事業もやめて収入の道が途絶えさせるものだった。それでも深川移住は実行された。それは芭蕉が苦悩し、思いつめた末の行動だったのだろう。それなら芭蕉を襲った苦悩とはなんだったか。これにはまた驚くようなお話があった。しかし今は最早紙数も尽きたので、別途、後の「深川」の項で詳しく述べることにする。　　（2013 年 2 月 12 日（火））

胸突き坂

7　花柳界の面影が香りたつ神楽坂

神楽坂を歩いた。毘沙門天を祀る善国寺を「へそ」にもつコンパクトで統一感がある街である。そして都内では珍しく、いつも街を売り出そうとして何らかのイベントや仕掛けを見せてくれる元気な街である。狭い石畳みの路地が迷路のように曲がりくねって、しっとりとした昔の花柳界の面影をいつも漂わせているところがとても魅力的である。

かくれんぼ横丁。神楽坂を代表する石畳の路地。5，6 尺の道幅だが、黒板塀にさりげなく置かれた行灯が似合う。

花街とはもともとは芸妓屋、遊女屋が集まっている区域を指したが、今では芸妓遊びのできる店が集まっている街を指すようになった。東京では浅草、浜町、新橋、赤坂、向島、神楽坂が有名である（東京 6 花街）。

花街の原点は人形町にあった吉原である。1617 年に江戸幕府は、女歌舞伎、女舞、女浄瑠璃などで女芸人が公衆の前に立つ事を禁じた。それに合わせて市中の遊女屋を一か所へ集めて、吉原遊郭を人形町につくった。これにより遊女たちは、幕府公認の吉原へ行くか岡場所(非合法の遊郭)で踊子になるしかなくなった。しかし、明暦 3 年(1657 年)の「振袖火事」を機に、幕府による都市改造が進み、吉原も浅草へ移転した。この時浅草へ行くのを嫌がった芸者の多くが深川へ移り、江戸中期には木場の旦那衆の支援で深川芸者(辰巳芸者)として一世を風靡した。その後、深川芸者の間に色と芸を兼ねる女郎芸者が増えてきて、元禄頃には舟運の要衝になった柳橋へ多くの芸者も移った。彼女たちは柳橋芸者と呼ばれて、日本橋の老舗の旦那衆が支援した。幕末になると、汐留川の両岸を中心に廃屋になった大名屋敷跡に住み着いた金春芸者（こんぱるげいしゃ）が台頭した。初めは勤王志士たちが支持し明治維新後には官庁街に出入りする政官界の人々がよく利用するようになり、新橋芸者となって栄えた。

明治 5 年に芸娼妓解放令による人身売買禁止、年期奉公禁止、借金棒引きで、芸者も自由の身になった。引き続き芸者になるは、県知事へ届出て営業許可証(鑑札)をうけて毎月 3 円の鑑札料を払うことになった。こうして東京には、新橋(銀座 8 丁目)、赤坂(溜池)、神楽坂、芳町(浜町)、向島(向島 5 丁目)、浅草(猿若町、山谷堀)の 6 花街が今日まで続くことになった。

その中で神楽坂は少し他の花街とは違っていた。
まず神楽坂の誕生が他の花街よりもずいぶん遅かった。武家屋敷が多かった神楽坂は芸者のスポンサーになる旦那衆が少なく、実際に賑わいだしたのは昭和になってからだった。特に、大正 12 年の関東大震災の被害が軽微だったことが幸いした。多くの企業が神楽坂へ移転、それに伴い多の花街から焼け出された芸者衆も引っ越してきて、一時は都内最大の花街になったのである。

次に台地という地形上の制約。神楽坂は飯田橋から上る台地の上にあり早稲田でまた下り坂になる。尾根道の左右はいずれの側も下り坂である。狭いエリアに商店が高密度に立地したため街には無数の路地が作られた。この路地に沿って各店が木製庇、欄干、格子、黒塀などの花街建築の外観を整えたために、独特の街並み景観が形成された。

今日では花街の長期低落傾向は続いていて、神楽坂も例外ではない。しかしながら、神楽坂では女性を中心にした若者の多さに驚かされる。彼女たちは沿道の店をひやかしながら本通りを行ったり来たりしている。交通量が多いので、「逆転式一方通行」というそうだが、午前と午後で車の一方通行の向きを逆転させる珍しい交通対策をとるほどである。彼女たちは本通りに飽きると、次に路地へ入る。本多横丁、かくれんぼ横丁、兵庫横丁、検番横丁などの路地散策とそこに隠れるようにしてたたずむ個性的な料亭の食事やティータイムが魅力的で楽しいのである。

高度経済成長期のサラリーマン戦士たちはこの街からずいぶん減ってしまったが、代わりに元気いっぱいの若い女性たちがこの街へやってくるようになっているのだ。その結果、神楽坂には往時の花街の佇まいが残されたまま、大勢の若者が行き交うことで、栄えた時もきっとそうだったろうと思われる花街の残り香が漂っているようだ。これが他の花街と神楽坂が一番違う所なのだろう。

街の中央を走る神楽坂通り。近くに日仏学院やフランスの企業が多く立地しているため、この町にはフランス料理店が多くあり、街を訪れるフランス人も多いと聞いた。

（2013 年 2 月 13 日（水））

8　人や貨物が行き交った神田川

街づくりの人ばかりでなく観光関係の人たちの間でも、ちょっと前から流行っていることがある。都市の川を見直そう、川から街を見直してみよう、という運動だ。
私も昔、あるイベントにかかわった仲間で「大名倶楽部」という会を作って、横浜の大岡川の桜並木を船で上りながらお花見する遊びを続けてきた。釣船を借りて、船上でバーベキューをしてお花見をするのである。川からの目線で街を見ると、歩いている時に見過ごしているものがいかに多いかと驚かされて、街の新しい顔が見えてくるようだった。
川を楽しむ遊びが復活して楽しみがまた増えた。神田川では近年街づくりプランナーたちだけでなく、ごく普通の人たちにも新しい観光資源の一つとして川遊びがよく行われるようになってきた、と聞いた。

＊　　＊　　＊

夏目漱石の「硝子戸の中」で子供のころを振り返る中で、ある日姉たちが芝居見物に行くという話が出てくる。

一行は自宅から神田川の揚場（物や人の上げ下ろしをした船着場）へ行き、予約してあった屋形船に乗る。船は御茶ノ水を過ぎて柳橋まで行って、大川（隅田川）へ出る。その後大川を遡って今戸橋まで行った。今戸の有明楼へ横付けした後、芝居茶屋まで歩く。小屋へ入ると、高土間へ案内されて酒を飲みながら芝居を見る。幕間には、役者付きの案内人が楽屋へ遊びに来てくれと迎えに来て、ひいきの役者の部屋へ行って、扇子に絵をかいてもらって席へ戻る。芝居がはねると来た道をひき返すのだが、朝暗いうちに家を出て、帰るのは深夜 0 時頃になる。夜半から夜半までかかって芝居見物をしたという。

漱石の家は早稲田馬場下町である。当時は天保の改革で市中に散在していた芝居小屋など興行ものは全部浅草聖天町の一角の猿若町へ集めたので、芝居を見るには猿若町へ行くしかなかった。夏目家の娘たち一行は、自宅から筑土八幡神社近くの神田川にあった物揚場まで歩き、そこから神田川を下った。水道橋、御茶ノ水、万世橋、浅草橋、柳橋を通って、隅田川へ出る。隅田川では川をさかのぼって蔵前橋、駒形橋、吾妻橋、言問橋を通って山谷掘へ出る。山谷掘りの最初の橋が今戸橋である。ここで一行は下船して猿若町へ行ったことになる。

漱石自身は、落ち目の町名主だった実家の人たちがそんなに派手な暮らしぶりをした時代があったのかという意味で話題にしたのだが、私には浅草猿若町の芝居見物のために神田川や隅田川を屋形船で行き来し、夜中に家を出て夜中に戻るという遊び方に関心を呼ぶ。

御茶ノ水橋から見た神田川

湯島から神田の間の神田駿河台辺りを「お茶ノ水」と呼ぶが、役所の地名に「御茶ノ水」は登場しない。近くのお寺の泉の湧水を将軍のお茶用の水にしたことがその名の由来という。正面の橋は聖橋で、S2 年関東大震災の復興事業で建設された。そのネーミングは、公募で湯島聖堂とニコライ堂という日本と西洋の二つの聖堂を結ぶ橋ということで命名されたという。

しかもその遊びの往復に神田川を使ったというのだから、川が普通の市民の日常生活の中でかなり自由に使われていたのだろう。

徳川幕府は、江戸の北部で降った雨水が平川や石神井川を伝わって南の市街地へ流れ込んで洪水になるのを防ぐために、中小の川の水を一度神田川へ落として、その神田川を江戸を東西に横断するように線形を改修し、堀を深くして、隅田川へ流れ込むように変えた。もともと神田川は自然河川だったが、改修が重ねられた。その結果、神田川が江戸の町の東西軸で、隅田川が南北軸となった。

こうして神田川は、大都市江戸でいくつかの機能を果たす川になった。第一に街を洪水から守る機能。中小河川から入る雨水を集めて隅田川へ流すことで、昔からの中小河川や堀にとってみればバイパスとして活用された。第二に交通機能。漱石の家族は川を交通路として活用したが、江戸の人々にとっては川が物流網になっていた。人の移動に船を使っただけでなく、上方から届く貨物は船で持ち込まれ、船で配送された。第三に給水機能。この神田川は独自の機能として、長い間にわたり上流の関口大洗堰（せきぐちおおあらいせき）まで江戸の人々の飲料水を運んできていた。関口で取水された上水は、後楽園までは白堀、そこから石や木製の樋で各地へ給水された。

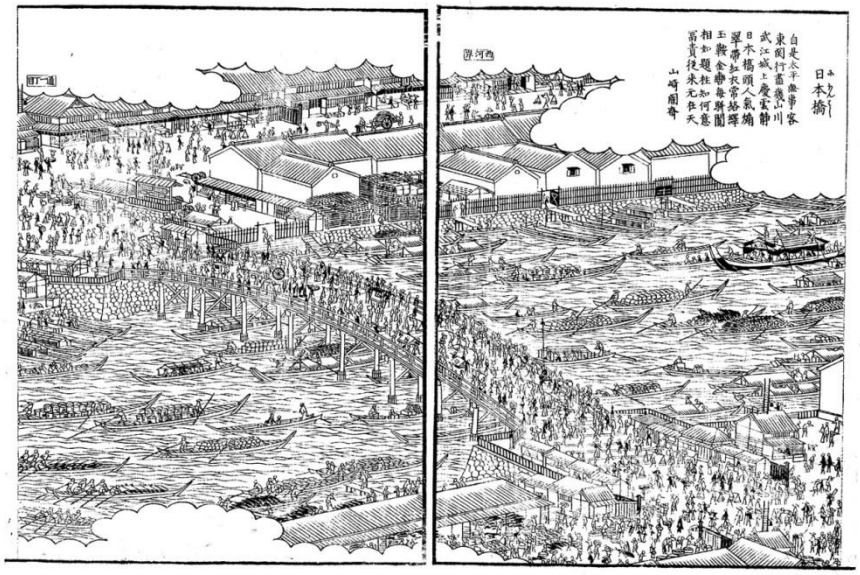
現代では道路がその役割を担っているが、昔は都市の川がたくさんの機能を持っていたことが神田川を見るとよく判る。　　（2013 年 2 月 14 日（木））

神田上水懸樋（かけひ）橋跡の石碑（水道橋）

関口大洗堰で取水された水道は、小石川の水戸屋敷を経て、水道橋で神田川を越した。上水は懸樋（かけひ）で神田川を超し、その先は地面の下に埋められた木の樋によって流された。

9 日本橋　～ 江戸の最初の物流基地

日本橋の下を流れる川は「日本橋川」である。日本橋川は、東京の都心を東西に流れる神田川の支流で、水道橋駅のそばの小石川橋から分岐して九段下、一ツ橋、神田橋、呉服橋を通って日本橋へ出て、江戸橋、萱場橋、豊海橋で隅田川へ合流する。その多くの区間が今は首都高池袋線や都心環状線の高架下なので、一見すると「どぶ川」のようだ。
しかし、江戸に幕府が開かれると、日本橋川は物揚場に加えて魚市場も開かれて、江戸随一の河岸になって賑わった。明治時代以降もその賑わいは続き、関東大震災後に築地に魚市場が移転するまで、江戸の台所だった。そこで、物流基地としての日本橋を見ることにする。



日本橋（江戸名所図会）

この図は 1800 年頃の日本橋の様子である。日本橋川をたくさんの川船が、米、みそ、酒などを積んで航行している。上側の護岸の建物は蔵屋敷（倉庫）である。蔵屋敷は川側に出入口があって、桟橋で荷物の搬出入をした。川船の貨物は主に上方（大阪）から千石船で運ばれた品物である。江戸湾へ回航した千石船は、隅田川河口の江戸湊で川船に荷を積み替えて、河岸へ運んだ。

江戸時代には三百石以上の船を「千石船」と呼んだ。千石船は米 1,000 石（約 150 t ）の荷物が積める船である。樽廻船、菱垣廻船は、江戸時代の千石船の中で新鋭帆船だった。今風に言えば、千石船の積載能力は 150t、排水量 200 t 位で、馬一頭で 90～100kg の貨物を運ぶので、一艘の船で馬 1,500 頭分の貨物を運ぶことになる。特に重宝がられたのが灘の酒の樽詰めで、2,000～3,000 樽を積んで、4～5 日で江戸へ届いたという。海運利用により重い貨物の輸送力は段違いに向上した。

江戸に集まる貨物の種類や量が増えると、日本橋川の日本橋や隅田川の蔵前だけでなく周辺の水路や運河でも荷扱いが始まった。次第に、米の蔵前、魚の日本橋、野菜の神田、木

材の木場、酒の新川というように品目別に集積地も決められるようになった。河岸は町人用の船着場だが、武家用には専用の物揚場があった。よく聞く「お蔵」は幕府や大名が集めた年貢米の倉庫で、「蔵屋敷」は幕府や大名の倉庫兼住宅である。

幕府は、はじめに摂津（大阪）の佃村から連れてきた 30 名の漁師に白魚をお城へ献上する条件で江戸湾の漁業権を与えて佃島へ住まわせた。次第に江戸城で消費する魚の量が増えてきて、少数の漁師では献上品が不足するようになった。そこで、もっと多くの漁師に漁業権を与え、許可された魚問屋に魚の集荷と販売ができるようにした。これにより江戸湾の各地から魚が集まるようになり、魚問屋はそこから献上品をお城へ納入し、残りを魚河岸で販売するようになった。こうして次第に、魚河岸は余った魚を売る場所でなく、庶民に魚を安定的に供給する場所へ変わり、魚市場を中核にして商業施設へ変貌していった。日本橋魚河岸は、荷揚場として物流機能を持ちながら、繁華街として商業機能を持つ街になった。さらに江戸が都市膨張を遂げると、物流機能は日本橋から築地、深川、八丁掘りへ広がり、商業機能も神田、上野、京橋、銀座へ拡大した。お城の需要のために幕府の肝いりでつくられた日本橋魚河岸は、次第に江戸の庶民の台所となり、その日本橋の繁栄は、関東大震災による復旧で魚河岸が築地に移るまで続いた。

これらのことから、江戸の物流は、江戸湾に入ってくる貨物を川を利用して日本橋へ集め、次いでそこから運河を利用して内陸の街へ流通させた。貨物の種類や量が増大すると、さらに内陸に新しい物揚場や市場をつくって流通を拡大していったことが判る。

（2013 年 2 月 20 日（水））

10　伝馬町牢屋敷

日比谷線・小伝馬町駅を出ると江戸通りへ出る。地下を総武線が走る道路の一本裏側に「十思公園（じっしこうえん）」や大安楽寺がある。ここがあの伝馬町牢屋敷跡である。もとは 2 千 6 百坪の広い敷地だったが、今では十思公園、十思小学校跡、大安楽寺などに分割された。

刑場跡の碑（大安楽寺）

赤くくっきり書かれた文字がおどろおどろしい。この後ろに「延命地蔵」がある。その台座に、山岡鉄舟が描いたとされる碑文がある。「為囚死群霊離苦得脱」で、刑死した者たちの霊が苦しみを離れ、解脱を得てほしい、という意味だろうか。大安楽寺は M15 年に当時の財界の大物だった大倉喜八郎と安田善次郎が寄進して作られた。そのため「大」と「安」が寺の名将につけられたと聞いた。

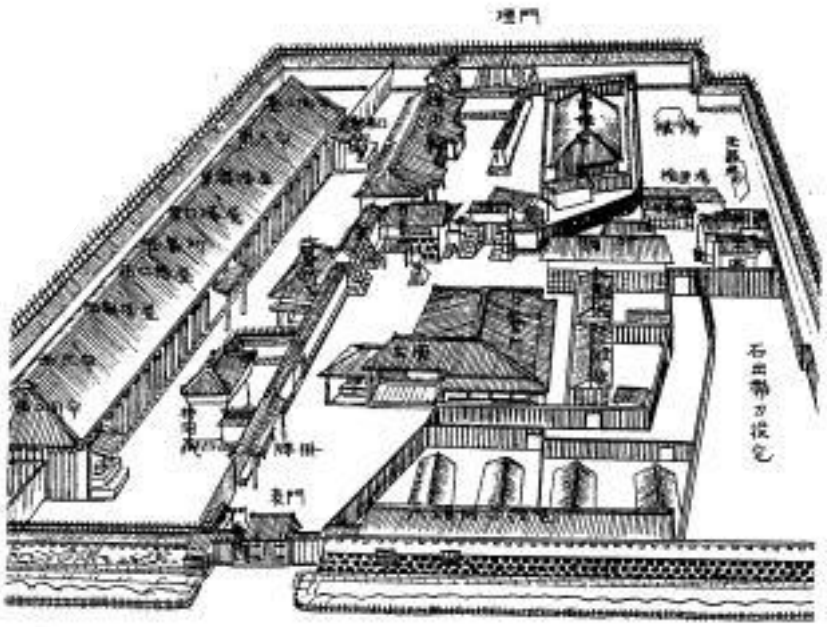
下図は、牢屋敷の全景図。表門から右側は穿鑿（せんさく）所と牢屋奉行、石出帯刀の屋敷や牢屋同心の長屋など牢役人たちの居住区域。穿鑿所は奉行所から与力、同心たちが出張して罪人達の取り調べを行った。右側は高い塀で区切られた囚人達の居住区域である獄舎。牢は大牢、二間牢、揚屋、奥揚屋、揚座敷の５種類が東西にあり、それぞれ「西大牢」「東大牢」などと呼ばれていた。

小伝馬町の牢屋敷では、囚人の身分に応じて牢獄が区別された。お目見え以上の幕臣が揚げ屋敷、それ以下の幕臣が揚屋、町民用に大牢と二間牢があった。女性は身分の別なしに西の揚屋へ収監された。その奥にお仕置き場があった。あの延命地蔵が建っている場所である。囚人の総数は約 300～400 名。この牢屋敷の責任者は代々世襲の石出帯刀である。後に囚人増加により、西牢に無宿者や百姓を収容する牢も設けられた。

この牢屋敷は、有罪判決を受けた犯罪者を収監する刑務所ではない。むしろ小菅の東京拘置所に近い施設で、判決を受ける前の被疑者を収容する場所だった。被疑者は収監されると、町奉行の取り調べを受けて、斬首、獄門、遠島などの判決を受ける。長くても半年くらいの間に判決が出され、死罪、獄門、遠島、あるいはもっと軽い刑で娑婆に戻られるかが決まった。もともと禁固刑や懲役などはなかったので、死罪の判決が出るとここのお仕

置き場で処刑された。獄門の場合も一部はここで首が落されてその後に鈴ヶ森か小塚原で晒し首にされた。それ以外の刑の場合はここから生きて出所することになった。だから鈴ヶ森や小塚原の処刑は火あぶりなどの獄門や磔の刑で、多くの見物人に見せつけるための公開処刑に限られた。大牢に入れられた町民たちは、大部屋にすし詰め状態で、衛生状態も悪く、牢名主の下でリンチが横行し、収監中に死亡する人が後を絶たなかった。

安政の大獄の時には、幕府が厳しい追及をしたため、多くの勤王志士がここで処刑された。その一人、吉田松陰もここで斬首された。その場面が塩見鮮一郎「浅草弾左衛門第 2 部」（批評社、1986 年）で描かれている。最後まで毅然とした態度で、処刑場へ行き、辞世の句を読んだ。彼を処刑したのは第 7 代山田浅右衛門で（この人も世襲だった）、処刑後に俵に首と遺体を詰められて千住回向院へ運ばれ、首切地蔵の前へ置かれた。埋葬が禁じられていたので、首と遺体はむき出しのまま地面に置かれた、という。



牢屋敷の見取図

2013 年 2 月 20 日（水））

11　小塚原（こづかっぱら）刑場跡

地下鉄日比谷線でずっと北へ上ると、終点の北千住の一つ前に「南千住駅」がある。ここでは地下鉄も地上へ出て、駅も橋上駅になる。私が知っている南千住は「ドヤ街の山谷」の最寄駅という程度で、奥州街道の千住宿の入口だったことを忘れていた。

首切地蔵（延命地蔵）

高さ 3.6m（一丈二尺）のお地蔵様である。刑死者を弔うために建てられた。もともとは貨物線の南側にあったが、線路の拡張工事で今の位置へ移転させられた。地蔵の名前は怖いが、地蔵自体は穏やかな顔をしている。2011 年 3 月 11 日の東日本大地震で左腕が落ちて、石もずれてしまった。倒壊の危険があるというので部材をバラバラにして地上に仮置きしたうえで復旧した。その復旧費に 6 百万円かかったが、半分を苦補助金、残りの半分を募金で賄ったという。一時的だったとはいえ、手足がバラバラに地面に置かれたという話を聞いて、思わず昔の刑死者をダブルイメージした。

江戸時代のお仕置き場（刑場）は、東海道に面した品川の鈴ヶ森とここ日光街道に面した千住の小塚原（こづかっぱら）の二か所にあった。

小塚原刑場は間口 60 間（108m）、奥行き 30 間余で、延命寺の敷地。明治 14 年まで、磔、獄門などの刑がここで執行された。延命寺に入るとすぐ高さ 8 尺の座身の首切地蔵（延命地蔵）と呼ばれる石地蔵がいる。

日比谷線南千住駅のすぐ南にある。もともとは広大な敷地だっただろうが、今は常磐線と日比谷線、貨物線で分割された細長い三角形の狭い敷地である。1651 年（慶安 4 年）から 1881 年（明治 14 年）に廃止されるまでの 230 年間に約 20 万人が処刑されたという。

首切り地蔵のすぐ後ろを高架の常磐線がキーキーいいながら走る。その音は刑場を電車が押しつぶしているようで、ここで亡くなった 20 万人が狭い延命寺の中でひしめき合いながら泣いているように聞こえる。

首切り地蔵の足元には小さな地蔵様が並んでいる。このお地蔵様の表情はとても柔和。帽子と前掛けが人のぬくもりを感じさせてくれてホッとする。

（2013 年 5 月 12 日）

12　千住回向院

千住回向院は小塚原処刑場のある延命寺に隣接している。もともとは延命寺もなくて、一帯は全部、小塚原のお仕置き場で処刑された人々を供養した回向院の敷地だった。昭和 57 年に千住回向院から分離独立して延命寺が開山したため、昔の処刑場に二つの寺ができた。
千住回向院へ行って「吉展ちゃん地蔵」があったので驚いた。

＊　　＊　　＊

回向院は白いコンクリのお寺で、首切地蔵がいる延命寺に比べてあまりおどろおどろしさを感じさせない。境内には鼠小僧、高橋お伝らのお墓もあるが、幕末の志士たちのお墓が多い。吉田松陰をはじめ、安政の大獄、桜田門外の変の関係者の碑が多いのである。そういえば本所回向院にも鼠小僧の碑があると聞いた。回向院自身が本所が元でこの千住回向院はその支店というので、どちらにあってもいいということなんだろうか。

回向院に入って驚いたのは、入口に「吉展ちゃんの供養塔」があることだ。吉展（ よしのぶ ）ちゃん？すっかり忘れていた。Ｓ38 年（1963 年）3 月 31 日に台東区入谷南公園（入谷）で近所の 4 歳の吉展ちゃんが誘拐され、身代金 50 万円も奪われた。実際には事件直後子供は殺害されて、すぐそばの円通寺（南千住）に遺棄された。犯人（小原保）は脅迫電話や身代金受け渡しでたくさんの証拠を残したが、決め手を欠いたため、何度かの事情聴取やウソ発見器を受けても逃げ延びた。犯人も吉展ちゃんの行方も判らないまま長い時間が経った。しかし、ある日、別件逮捕されていた小原が犯人とわかり、2 年 3 月後に逮捕された。事件後、遺体があった円通寺とすぐそばの回向院の 2 か所に吉展ちゃん地蔵が建立されて供養したという。

逮捕後に犯人はその動機の一つとして映画「天国と地獄」がきっかけだったと述べた。あの映画はまさに誘拐を扱ったもので、黒沢監督が誘拐こそ犯罪中の犯罪でその犯人は極刑にしても足りないと主張した映画である。そうした誘拐犯罪撲滅の制作意図とは正反対に、誘拐犯罪の材料にされたのだから、よけい腹立たしい。

ところで、回向院がこうした刑死者を積極的に弔ってきた理由について、長い間手に刺さったとげのようにひっかかっていた。そのことが大相撲の歴史を探している時に判明した。1657 年（明暦 3 年)、「明暦の大火」と呼ばれる大火事による大惨事が発生した。当時の江戸の町の三分の二を焼き尽くし、焼死者も 10.8 万人に及んだ。時の将軍家綱は、これを機に再発防止に取り組み、江戸の町の大改造に着手した。

今の都市計画とほぼ同じで、主要道路の拡幅や火除地整備、神田川拡幅、両国橋架橋、江戸城内の御三家を城の周辺に移転、周辺にあった旗本屋敷をさらに外側へ移転させた。同時に街中にあった寺社はさらにその郊外へ移転させた。これにより江戸の市街地は格段に広がり、その後の江戸の発展の基礎となった。

復興の陣頭指揮をした保科正之は、老中でなく将軍後見職だったが、まず米の炊き出しなどの被災者救援、食料や木材の物価安定対策にいち早く取り組んだ人物である。よく知られるように、彼は、諸大名に義務付けられていた参勤交代を一時中断し、江戸にいた大名も早々に帰国させて、米価安定を図ろうとしたほどだった。その正之が、人心安定のために、大火による死者を葬るために本所に回向院を立てて弔うことにした。これ以降、回向院は火事だけでなく地震、水害、刑死者その他無縁仏も弔う万人塚をもつお寺となり、刑場に付属するお寺もその万人塚つながりから回向院が担当することになった。回向院はもともと幕府主導で建立されたお寺だった。この境内で 1781 年（天明元年）以降、勧進相撲が始まった。もともと相撲は深川の富岡八幡宮が発祥だが、年々評判が高くなり、集客も相当見込めるようになると、交通至便で相当規模の敷地が確保できるなどの事情から本所回向院の境内で開催されることになった。このように時の幕府から広大な敷地、相撲収益なども保証されてきたと思われる。

吉展地蔵

誘拐事件の犠牲になった吉展ちゃんの遺体は、少し離れた円通寺のお墓で発見された。しかし、吉展ちゃん一家が千住回向院の檀家だった縁で、供養の地蔵尊が境内に建立されたという。

（2013 年 5 月 12 日）

13 コツ通り

千住の街を歩いた。昔の千住宿は今の北千住辺りを指しているが、千住宿は日光街道第一番目の宿場だった。日光街道はここでは奥州街道と重複している。その奥州街道というのは、日本橋から今の国道 6 号線（水戸街道）で浅草へ出て、言問橋西交差点で吉野通りに入り、南千住交差点で国道 4 号線に合流する街道である。合流して北上すると、千住大橋があって北千住に入る。奥州街道が南千住駅から日光街道に合流するまでの約 500m 区間を「コツ通り」という。

コツ通り商店街は今やシャッター街である。ドトールやマックなどの有名なチェーン店もなく、個人商店が細々と営業している。だから都内によくある有名チェーン店が立ち並ぶ没個性的な商店街とは真逆な街並みになっている。

小塚原（こづかっぱら）刑場前の常磐線ガード下から北へ向かって日光街道までの約 500m 区間の道を「コツ通り」という。まだ貨物線や常磐線が通る以前の地図を見ると（江戸時代からそうだったのだが）、奥州街道が浅草を出て日光街道と合流して千住大橋に至る。その奥州街道が日光街道と合流するまでの一区間で、往来が激しかったところだった。確かに小塚原刑場そのものが処刑された犯罪者を「さらし」といって、わざわざ通行人に見せるために行き来が多い街道沿いに作られたのだから、実際にも賑わっていた。

「コツ通り」がコツ＝骨を連想させて、名前があまりに露骨に刑場の名残を指している気がしたので、通りの中ほどの蕎麦屋で、通名の由来を尋ねると、地名の小塚原（こつかっぱら）の「こつ」をとって「コツ通り」と呼ばれたと聞いた。少しほっとした。しかし。落語では、古今亭志ん朝が刑場でたくさんの人が処刑された場所だったから「骨（コツ）通り」だったと平気で言っている。

「コツ通り」商店街は、昔から下町の商店街でドヤ街の山谷への入り口でもあったのでとてもにぎわった。しかし、南千住駅の東口が再開発されて大型商業施設が作られると、人の流れも東口へごっそりもっていかれて、今やコツ通りは火が消えた商店街になっている。ドヤ街も今やすっかり寂れてしまい、その入口だった「コツ通り」もまたすっかり寂れてしまった。この風景が多様性を受け入れない現代という時代の底の薄さを象徴しているようだ。

（2013 年 5 月 13 日）

千住回向院。1651 年に開場した小塚原刑場の刑死者を弔うため 1667 年本所回向院の別院として建てられた。吉田松陰た幕末の志士や毒婦高橋お伝の碑がある。また、杉田玄白、前野良沢らが刑死者を腑分け（解剖）した場所でもある。常磐線拡幅でてらが南北に二分され、線路の北側が回向院、南側が独立して延命寺になった。

14　千住大橋

快晴である。日比谷線が南千住駅を出るとすぐ隅田川を渡る。川を越すと終点の北千住駅に着く。ここはターミナル駅らしく、地下鉄が日比谷線と千代田線、地上電車が JR 常磐線と東武伊勢崎線、つくばエクスプレス線が交差している。この町は隅田川と荒川に挟まれた町で、北千住の先は東武電車になるが、次の駅は荒川を越した先にある小菅になる。北千住駅西口を出て、アーケード街を行くとすぐ南北に走る「宿場町通り」にでる。この通りこそが昔からの日光街道である（ここでは奥州街道も同じ路線）。駅前通りを左折して南千住方面へ向かう。昔の街道で、店の人たちも頑張っているようで、人通りも多い。日光街道を北から江戸へ入るような位置関係で歩いているので、この先に千住大橋がある。

千住大橋

この橋は S2 年製で、関東大震災の復興事業で作られた。今は下り専用の道で、上りは隣接する新橋（S48 年製）である。この橋には昔都電の 21 系統（北千住～上野駅前）が走っていたが、S43 年廃止された。

徳川幕府は江戸防衛のために、諸国から江戸に入る道を極端に制限した。東海道を歩いた時にもそうだったが、川を自由に渡らせなかった。その原型が南側の多摩川と北側の隅田

川にある。多摩川には当初六郷大橋が作られたたが、洪水でしばしば流されたため、1688年以降は橋がなくなり、「六郷の渡し」に頼るほかなかった。明治7年になるまで橋はなかった。
隅田川の千住大橋もまた、　奥州街道、水戸街道、佐倉街道の全部をこの橋一本で隅田川を越させた。1657年の明暦の大火で膨大な犠牲者が出て江戸城本丸まで焼け落ちて、両国橋が架橋されるまで、隅田川には千住大橋一つしかなかった。

千住は北へ向かう街道の起点で、日光街道第一番目の宿場である。だから松尾芭蕉が「奥の細道」の大旅行へ出発する時も、深川から舟でこの千住まで来てここから出発した。

「千住という所にて船を上がれば、前途三千里の思い胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙そそぐ。
『行く春や鳥啼き魚の目に涙』・・・」（おくの細道）

しかし、千住にはもう一つの顔がある。
「やっちゃ場」である。今でこそ数ある地方市場の一つになっているが、昔は幕府の御用市場として神田、駒込と並ぶ規模を誇った。その起源は、1594年、徳川家康がまだ幕府を創設する前、秀吉から関八州を与えられて入府して間もなく、千住大橋を架橋した時から始まる。もちろん隅田川に初めてかつ唯一の橋だった。千住大橋ができると物資の集散も急増し、1640年代に魚や野菜を中心に商う千住市場が開設された。以降昭和になるまで青果市場の中心地として長い間栄えた。

だから街道の沿道の家々に「屋号」の表札がある。東海道ウオークで見た「屋号」である。青物問屋＝大喜、伊勢屋、板橋屋、果物専門問屋＝水宗、たび屋＝吉田、乾物商＝野村、投師＝佐野屋、車茶屋、川魚問屋＝鮒平、佃煮＝鮒金などである。さすがに隅田川を抱えた市場らしく、青果だけでなく魚類も扱った市場だった。なおここに出てくる「投師」というのは漁師のことではなくて、ここで仕入れた品物を他の市場へ転売する人を指している。千住には特にこうした人が多かったらしい。

（2013年5月13日）

15　新吉原

江戸を代表した遊郭の吉原（新吉原）へ行くには、日比谷線三ノ輪駅から日本堤（土手通り）を約 15 分ほど下る。昔は柳橋から舟に乗って隅田川を上り今戸橋で下船して日本堤を歩くのがメインだったから、逆方向から吉原へ向かっていることになる。今では日本堤に沿った山谷堀は堀でなく帯状の「山谷堀公園」に変わっている。

「吉原大門」（よしわらおおもん）の交差点が吉原の入り口である。交差点の横に「見返り柳」がある。遊郭で味わった楽しい思い出と女性に未練一杯な男どもがその思いを振り切った場所というジョークからつけられたネーミングである。この交差点を右折すると、S 字カーブの道になる。遊郭が街道から直接見えないようにしつらえた道で、交番を過ぎると「吉原大門」の門柱があって吉原へ入る。

＊　　＊　　＊

吉原はお歯黒どぶに囲まれた別世界だった。中央の大通りの「仲ノ町」は一年中客が絶えない賑わった道で、引手茶屋（仲介する茶屋）が軒を並べていた。大通りから左右に伸びる三本の路地にたくさんの遊女屋があった。もともと吉原は、人形町にあったが（元吉原という）、江戸の町が拡大したため明暦の大火を機に、ここ千住の葦がたくさん生えていた沼地へ明暦 3 年に移転した（ここを新吉原という）。その時幕府が示した移転条件は、敷地 5 割増し、昼夜営業可（元は昼のみ）、移転補償費 1 万 5 百両（1.9 万両説もある）という破格なものだったという。

現代の吉原は大ソープランド地帯である。大門（おおもん）も門でなく 2 本のポールに変わり、お歯黒どぶは埋め立てられ、仲ノ町の大通りも普通の道を変わらないので、急にはここが昔、吉原遊郭だったとは判らない。

樋口一葉「たけくらべ」は、吉原に隣接する竜泉に住む、淡い恋心を抱く美登利と信如（のぶゆき）の二人の子供が成長する様子を書いた小説である。将来は美登利は遊女、信如は僧侶になると決まっている。酉の市で賑わう街で美登利は初潮を迎え吉原で働く日が近づく。子供の信如にはどうすることもできず二人が別れるという話だ。文学界ではこの初潮説に対して　吉原デュー説もあって議論が絶えないという。しかし今の我々にはむしろ子供が大人になるということが、僧侶になるとか遊女になることに決まっていた話に驚く。

そして、不合理な話で、そんな運命の人生しか生きられなかった二人が可哀そうと思うのだ。それにしても、吉原に来るとどうしてこうも気が重くなり憂鬱な心持にさせられるのだろうか。

（2013 年 5 月 13 日）

吉原観音像（吉原弁財天）

吉原遊郭を造成する際に周囲に点在していた池が残されて、その池畔に弁天祠が作られた。T12 年の関東大震災で多くの遊女がこの池へ逃れてきて、490 人がここで溺死した。その遊女たちの供養のために、T15 年弁天祠の前に観音像が建立された。なお、池は S34 年に吉原電話局ビル建設で埋め立てられた。

16 オールドタウンからニュータウンへ変わる浅草

数年ぶりに浅草へ行った。
2012 年にスカイツリーが開業して人の流れが変わり、浅草は来街者が減っただろうと思っていたが、むしろ前よりも増えていた。欧米系だけでなくアジア系の外国人が増えた。日本人も田舎から出てきたと思われる高齢者がむやみに多い。中国系の一人と話をすると、新しい施設を見た帰りに古い日本の施設も訪れたという。どうもスカイツリーによる相乗効果のようだ。オールドタウンとしての浅草と言えば大衆芸能の街だが、今の浅草は大衆芸能の街ではない。だから観光客の多くは仲見世や周辺の店をのぞいてみやげ物を買い、昔から名の知られた食べ物屋で食事して帰っていく。
浅草から大衆芸能が消えた話は、まだ開高健が若くて元気だったころに書いた「日本人の遊び場」（光文社文庫、2007 年）にくわしい。開高がこのルポルタージュを書いた 1963 年（S38 年）ころすでにオールドタウンの浅草はなくなりつつあった。当時、木馬館で女芸人豆子さんが演じる安来節が最後に残った大衆芸能で、それを見た開高が、自分もその一人だが安来節がわからない人間が増えてきて、この豆子さんや詰めかけている年寄りが死んでしまったら、最後の大衆芸能も消えてしまうだろう、私には何ともさびしく無残に思えてならないと結んでいた。実際にもその後木馬館は大衆演劇専門館になって残っているものの、そこで演じられる芸能に昔の面影はもうない。

浅草は長い間大衆芸能の中心地だった。
江戸時代中期以降、京都や大阪で盛んだった見世物小屋が浅草で広まった。初めは露店で芸をして客から投げ銭をとる大道芸が盛んだったが、次第に常設の見世物小屋へ変わった。その後も奥山の見世物小屋と大道芸は興隆し、浅草の芸能の伝統となって明治初期まで続いた。浅草観音を参詣して奥山で見世物や大道芸を見ることが江戸見物になった。奥山というのは浅草寺西側一帯を指し、大道芸や見世物小屋が並ぶ繁華街だった。

明治になると、浅草寺全体が公園に指定され、7 区に分けて整備された。そのとき 6 番目の地区に、奥山にあった見世物小屋は全部移転した。だから 6 区は初めから興行街として造られた街だった。「六区」が有名になったのは、明治後期から大正時代にかけて電気館、木馬館などの映画館が林立し、賑わったからである。

昭和になって軍国主義が叫ばれると一時期沈滞した。しかし戦後、浅草は急速に復活した。特にＳ30 年代に映画が最盛期を迎えると、浅草はまず映画で大勢の集客をした。次いで映画だけでなく、演劇、寄席、ストリップなどの様々な文化発信を行うようになった。しかし、40 年代以降は、ＴＶの登場や日比谷、新宿、渋谷、池袋の発展で、身近な場所で映画や演芸がみられるようになり、浅草の劇場の閉館が相次ぎ、急速に寂れた街になった。

大勝館	Ｓ46 年閉館、	電気館	Ｓ51 年閉館、
国際劇場	S57 年浅草ビューホテルへ	松竹演芸場	Ｓ61 年ＲＯＸへ、
富士館	Ｓ62 年閉館、		

リードで掲げた開高健のルポルタージュ「日本人の遊び場」では、高度経済成長が始まってまさに廃れようとしていた最後の木馬館を書いている。この本では 木馬館以外に、ボウリング場、食いだおれ、パチンコ、ヘルスセンター、ナイター釣堀、ナイター映画など 13 施設が登場する。「ボウリング場」の項で開高は、破壊本能を解放させて、徹底的にアメリカに押しまくられて昔からの日本はことごとく殺菌されてしまったと表現した。浅草木馬館の項では、舞台の芸人と他の観客を喜ばすためだけに七五調の長い野次を作り、一度限りの野次を飛ばすことに喜びを感じる観客を描いている。浅草が廃れていくことや日本の古い文化が滅びていくはとても寂しい事だが、それ自体はやむを得ないことだ。しかし、大きく変動する世界を象徴するボウリング場や木馬館でみた人々は、だからと言って変わることを嘆いている人たちではなかった。変わる世界の渦中にあっても、人の遊び方や楽しみ方には思いがけない知恵や意思や微笑があって単純でないことを教えてくれている。そういうことができる人が遊び上手なんだよと開高が言っているように思われる。

（2013 年 5 月 15 日）

17　歌舞伎が弾左衛門の支配から抜け出た事件

塩見鮮一郎「浅草弾左衛門全三巻」（批評社）を読んだ。にぎやかな江戸の街で、幕府の裏方で治安を維持し、華やかな江戸文化を支えてきた被差別民を支配したのが「浅草弾左衛門」である。塩見氏は「浅草弾左衛門」を二つの面から描いている。第一の側面は弾左衛門という制度として描いた。彼は町奉行の支配下で警備、処刑、牢番などの御用をするのが本来業務だった。街の風紀を糾す、汚れを取り除いて清めるという意味があった。これは第三者から見れば明らかに制度として存在した職名だった。第二の側面は最後の弾左衛門となった第 13 代目弾左衛門・小太郎の波乱に満ちた生涯を描いたことである。小太郎は幕末に自身の身分引き上げを勝ち取ったが、その後明治 4 年、廃藩置県の直後に「解放令」で被差別身分そのものを廃止させた功績がある。今回は第一の「制度としての弾左衛門」が、もともとその支配下に置いていた歌舞伎が弾左衛門支配から抜け出していった様子を見てみることにする。

仲見世通りのお正月飾り

浅草仲見世を歩くと、頭上に 2013 年は巳年ということで干支にちなんだ飾りがあった。先の方には干支には関係ないが年末年始の恒例で登場する独楽の絵もあった。

浅草の繁栄は、蔵前に幕府の米蔵が設置されて「札差（株仲間）」が登場した時から始まる。
元和 6 年（1620 年）隅田川の浅草寄りの一部を埋め立てて 36 万坪の土地造成をし、そこに 67 棟の米蔵を建てた（浅草御蔵）。ここには全国の幕府直轄領から集められた米が保管された。ここを蔵前の米蔵と呼んで、「札差」が旗本や大名の代理で米の受取と売り捌き事務を行った。「札差」は米の受取と売り捌きの両方で旗本、大名から手数料をとった。さらに、「札差」は手数料分として手にした米を街の小売商へ売って利益をあげた。だから「札差」は武家と町民の両方からもうけを得た。さらに「札差」は儲けたおカネを武士に高利で貸し付ける金融もしたので、大富豪になる者も現れた。札差は蔵前に店を構えていたので、浅草周辺は武士や商人が集中する場所になった。さらに、明暦 3 年（1657 年）の明暦の大火後、吉原遊郭が山谷へ移転し、浅草に芸能関係の施設や人々も集中した。それは、浅草が札差を中心にお金が集まる場所だったことに加えて、芸能関係の人々が集められて住んだ場所だったためである。

札差は、安永、天明の頃（1772～1789 年）には「十八 大通」（じゅうはちだいつう。大通は趣味や遊びにたけた人のことで、当時 18 人の札差が大通として有名だったことをいう）と呼ばれて、歌舞伎「助六」の花川戸助六や髭の意休のような突飛な衣装で街を闊歩した。彼らは芝居小屋や吉原で豪遊し、粋を競う「通人」（つうじん）だった。のちの天保 12 年（1841 年）に始まった天保改革では、江戸市中に散在していた歌舞伎三座（中村座、市村座、河原崎座）、操り人形の薩摩座、結城座などを浅草猿若町（現在の浅草六丁目一帯）に集めたので、ここが芝居町になった。

昔の芸能は河原で生まれ河原で育つことが多かったことから、芸や体を見せてお金を取る芸人を「河原者」と呼び、その興行は「浅草弾左衛門」の支配下に置かれていた。各種の興行では入場料の十分の一を長吏へ納める「十分一櫓銭」や長吏の無料入場が認められていた。時代が進むにつれて長吏たち自身が興行をうつことも多くなった。江戸でも幕府の許可で興行する四座以外の芸能の興行は弾左衛門の支配を受けていた。

その事例を二つ見てみよう。これは歌舞伎が「浅草弾左衛門」の支配から解放される話で、ことほど左様に弾左衛門の支配はきつく長かったことを意味している。なおこの事例は塩見鮮一郎氏「弾左衛門とその時代」（河出文庫、2008 年）と同「浅草弾左衛門三部作」（批評社、1985～1987 年）に多くを依拠している事をあらかじめ申し上げておく。

宝永 5 年（1708 年）、富士山の宝永火山爆発の翌年だが、京都のカラクリ人形師・小林新助が、房州で操り芝居をした。弾左衛門の手代・革買い治兵衛が無断興行の苦情を申し入

れたが無視したため、次の開催予定場所へ押し寄せて小屋を潰してしまった。怒りが収まらない小林は、江戸へ戻ってから訴訟を起こした。はじめのうちは奉行所も、旅芝居は弾左衛門の支配をうけるとして和解案を提示したが、小林は拒否した。

〇自分は京、大坂で修業を積んだからくり人形師という役者である、
〇役者は旅芝居で稽古して大阪、江戸の芝居へ出る、江戸4座と旅芝居を分ける理由は　ない。
〇歌舞伎や浄瑠璃は「出雲 阿国 」（いずものおくに）が80年前に作ったもの。弾左衛門は　4百年前の鎌倉時代から支配下においたというが、歌舞伎や旅芝居が昔から弾左衛門　の支配下にあったという証拠はない　、と主張した。

結局、奉行所は新助の主張を認めて、革買い治兵衛を島流し、勾 胸（ごう むね）を除く役者は櫓銭を払わなくてもよいと判決した。この裁判を聞いて2代目市川団十郎は喜び、裁判経過を「勝 扇 木（かちおおぎ）」という本にまとめて家宝にした。その5年後の正徳3年（1713年）、2代目市川団十郎は山村座で「助六 所縁江戸 桜 」（すけろくゆかりのえどさくら）を上演した（当初は「花館愛護桜」と呼んだ）。

塩野氏はこの助六の芝居を「勝扇子事件」で歌舞伎役者が弾左衛門の支配から脱した団十郎が勝利宣言した芝居と見ている。花川戸助六に姿を変えた曽我五郎が盗まれた源氏の宝刀「友切丸」を探して吉原へ通い、三浦屋の傾城・揚巻と恋仲になる。その揚巻に髭の意休が言い寄る。髭の意休はいつも大勢の子分を連れてやってくる。彼が宝刀・友切丸をもっていると知り、助六は髭の意休を切り殺して刀を奪い返す、というあらすじである。この髭の意休のモデルが4代目弾左衛門・集誓であると指摘するのである。助六が髭の意休の頭に下駄を載せてケンカを売るシーンがある。助六が意休を乞食の閻魔と呼び、畜生扱いする。門兵衛に頭からうどんをかけるシーンも被差別民に対する差別とみている。この「助六」興行で、2代目団十郎と山村座座主・山村長太夫は、弾左衛門とその手代を被差別民として徹底的にからかい、自らの勝利宣言をしているとみるのである。

これを機に、弾左衛門は歌舞伎に対する支配関係を失うことになった。しかし、これで歌舞伎役者の地位が本当に上ったわけではなかった。翌年の正徳4年（1714年）、「絵島生島事件」で、山村座が取り潰されて、再び歌舞伎に対する幕府の弾圧が強化されたからである。幕府の目から見れば、歌舞伎の地位向上騒動は、あたかも被差別民の中での内輪もめに過ぎないように見えたのかもしれない。

「絵島生島事件」は次のような事件である。
大奥の年寄役・絵島が、お仕えする月光院（将軍家継の生母）の名代で前の将軍家宣の墓参りに芝の増上寺へ行く。その帰りに山村座で生島新五郎の歌舞伎を見て、舞台がはねた後、生島を呼んで茶屋で宴会を開く。夢中になり、江島は大奥の門限に遅れて、江戸城の大奥へ入る扉（七つ口）の前で立ち往生する。入れろ入れないで押し問答をしたために、そのことが江戸城全体に知れ渡る事件になった。

当時大奥では、今の将軍の生母・月光院と前の将軍の正室・天英院の二つの勢力が対立していて、天英院と老中秋元喬知らは、勢力挽回のチャンスとみて、事件を徹底的に調べた。その結果、絵島は死罪、生島は三宅島へ遠島、山村座は閉鎖。各地にあった芝居小屋はすべて浅草猿若町へ移転となった。なお絵島は月光院の嘆願があり、高遠藩お預けになった。
　この事件は絵島が門限に遅れたことがきっかけだったが、絵島の歌舞伎役者とのスキャンダルによる大奥の綱紀粛正、さらに幼少で病弱な将軍・家継の後継者争い、また当時庶民の間で急速に流行していた芝居や風俗に対する幕府の厳しい規制の始まりの側面も持っていた。この事件以降、大奥では天英院の勢力が強くなり、翌年家継が死去すると、天英院が強く推した紀伊の徳川吉宗が次の将軍になった。吉宗は大奥の人数を半減する改革を行った。数年後には（享保 7 年 1722 年）には事件の処罰者に恩赦を行って、絵島以外全員赦免された。

大奥や大名の間にもファンになる者がいるほど、歌舞伎は大衆芸能として幅広い人気を博し、「勝扇子訴訟」の勝利を機に浅草弾左衛門の支配から独立を果たすことが出来た。しかし、「絵島生島事件」以降、芝居小屋を簡素にし、桟敷は二階三階を作らず一階のみとし、豪華な衣装は慎み、演劇は日没までに終えること、劇場近くに座敷のようなものを備えた茶店を作らないこと、芝居小屋を猿若町へ集めるなど、再び歌舞伎に対する厳しい監視が始まった。

猿若町へ三座を集めたというのは、歌舞伎がまだ被差別集団の頭領弾左衛門が住むすぐ近くに置いて監視されることを意味した。役者は町中を歩くときには笠をかぶる規制もあった。弾左衛門に対する関係は、表向きでは歌舞伎に一定の前進が見られたものの、実際にはあちこちで十分の一櫓銭の慣習が続いたし、被差別民の無銭入場の慣習もまた存続しており、歌舞伎に対するこうした厳しい規制は歌舞伎がまだ被差別の立場に置かれ続けた。

（2013 年 5 月 15 日）

18　13 代目弾左衛門小太郎

「弾左衛門」というのは制度としての名称であると同時に人名である。明治維新で「解放令」が出て、被差別民という制度がなくなったので弾左衛門という制度もまたその日に消えた。13 代目弾左衛門小太郎が最後の弾左衛門だった。制度としての弾左衛門がなくなる直前の幕末の弾左衛門小太郎を見ておくのが本稿の趣旨である。
しかしながら、M4 年の「解放令」で制度としての被差別民は廃止されたが、その日以降も被差別事象は日本中で発生している。制度を支える精神があるとすれば、人が人を差別する精神は残されたままだった。貧乏人が他の貧乏人を見てお前は貧乏人だというかのように、生まれや仕事、居住地、先祖や親をみて、仲間を別の仲間連中が差別する事件は少しも減らない。

＊　　＊　　＊

13 代目弾左衛門小太郎は、天保 11 年（1840 年）に町奉行から養子家督相続を許可されてスタートした。天保 13 年（1842 年）には老中水野忠邦は「天保の改革」を断行して、異国船打払い令（1825 年）の廃止、株仲間解散、奢侈禁止、風俗取締りなどを行った。そのころには各地に外国船がやってくるようになり、弘化元年（1844 年）には唯一国交を開いていたオランダから開国勧告されたこともあった。外圧で屋台骨を揺られた幕府が崩壊に向けて歩みだしていた時期である。その時期に小太郎がとった戦略は、揺らぎだした幕府へ一層の協力支援を高めることで権力の懐へ入り差別事象を少しでも緩和解消してゆこうというものだった。

新町銃撃隊
慶応 2 年（1866 年）幕府の長州征伐に関八州の長吏 5 百名が参加し、勘定奉行馬場五郎の指揮で大阪へ向かった。部隊が大坂について間もなく大阪で徳川家茂が病死したため、江戸へ戻った。この経験から小太郎は長吏の軍事訓練と銃の確保が必要と考えた。そこで、勘定奉行馬場を通じて銃 100 挺を借り受けて、新町銃撃隊を組織した。その指導者に陸軍所の角蔵左衛門があたり、練習場は浅草田原町の的場に内定した。しかし、慶応 4 年 1 月、鳥羽伏見で負けた幕府軍が江戸へ戻ってきたため、この銃撃隊計画は中止になった。

新撰組への協力
典医・松本良順と近藤勇の交際はわずか５年弱だったが、その中身は深かった。元治元年（1864 年）近藤が突然、松本に外国の事情を知りたいと訪ねて、松本が懇切に説明したことから始まる（松本良順「蘭疇自伝（らんちゅうじでん）」）。

お正月の浅草仲見世通り

仲見世通りでは年末年始には毎年通りをお目出度いデコレーションで飾る。頭上にコマや干支にちなんだ飾り物、梅の花を飾って賑わいを増す。夜になって店のシャッターが下りるとシャッターに描かれた「浅草絵巻」と名付けられた絵を見ることができる。最初は平成元年に描かれたが老朽化したため、平成 18 年位リニューアルされたもので、浅草の歴史と伝統行事が描かれている。

その典医・松本の仲介で、弾左衛門も近藤と知り合う。

慶応 4 年（1868 年）2 月、鳥羽伏見で勝利した官軍は京都から東海道、東山道(中山道)、北陸道の 3 方向から江戸へ進軍した。新撰組の近藤は甲府で官軍と戦うために「甲府鎮撫隊」を立ち上げた。弾左衛門もその鎮撫隊へ協力することになったが、そこへ集まった新撰組は 20 名足らずで、他に浪人や長吏 40～50 名を加えても僅かな戦力だった。鎮撫隊は 3 月 1 日江戸を出発したが、行く先々で宴会を繰り返し、勝沼へ入ったのは 3 月 4 日だった。時はすでに遅く、甲府はすでに官軍が支配しており、鎮撫隊はほとんど交戦せず逃げ

帰った。近藤は一旦松本の医学所へ逃げるが、3 月 14 日五兵衛新田（西綾瀬）へ逃げた。3 月 15 日には江戸城無血開城になり、江戸は官軍の手に落ちた。そこで近藤は 4 月 1 日に流山へ逃げるがここで 4 月 3 日に逮捕され、4 月 25 日に板橋宿の馬捨て場で斬首された。

身分引上げ

慶応 3 年（1867 年）2 月前年の家茂の臨終を看取った典医・松本良順が江戸へ戻り、西洋医学所（下谷和泉橋）を開いていた。そこへ今戸の町医者（富士三哲）も勉強に行っていたところ、松本が彼を通じて接触してきた。松本は、小太郎に対して薩長の誘いに乗らないようにとくぎを刺す一方で、周司（12 代目弾左衛門周司を指す。）の病気治療をや身分引上げなどへの協力を申し出た。その松本のおかげで、慶応 4 年（1868 年）1 月 13 日
小太郎は「平民身分」になった。13 代目弾左衛門小太郎は「平民」になって「弾直樹」に改名した。

これを機に、小太郎は次々と身分引き上げ攻勢をする。

1 月 16 日　新町の手代 65 名の身分引上げ願い
→2 月上旬実現
1 月 27 日　長吏全員の身分引上げ願い
→2 年後の M3 年（1870 年）8 月 28 日、賤称廃止令（解放令）が布告された。

浅草弾左衛門という制度は徳川幕府の時代とぴったり重なっている。弾左衛門は、武具や馬具に必要な革製品を供給することを条件に斃牛馬処理の独占権を幕府から与えられていた。幕府側では、この弾左衛門を武具や馬具の供給だけにとどめないで、もっと積極的に利用した。幕府は弾左衛門を斃牛馬を扱う仏教上のケガレた賤民と位置付けて、対等な人格とせずに人が嫌がる仕事をさせることで利用したのである。

そのことから次のことが明らかになる。

① 弾左衛門は、革や武具を独占することで幕府の一角に地位を確保し、支配機構の一部を担った。
②弾左衛門がその地位を長期にわたって継続できたのは、灯芯の専売権の利益と芸能関係者からの収奪によって得た莫大な収益とそれをバックにした強い経済力だった。
③徳川中期以降、最初に盲人組織が弾左衛門支配から離脱した、次いで歌舞伎役者も離脱した。非人組織の車善七も江戸時代には何度も離脱を画策した。何故か。彼らが櫓銭（興行税）を払いたくないだけでなく、弾左衛門の庇護を受けずとも自立して自分たちだけでやっていける力を得てきたからだった。

13 代目弾左衛門小太郎は、一旦は幕府崩壊と一緒に引退も考えたが、被差別民が人権を回復できれば新しい時代にも十分生きていかれるだろう、そのためには軍靴製造（皮靴製造）を経済基盤にしなければならないとも考えていた。だから、小太郎は何度も「身分引上げ」を幕府に要請した。小太郎も軍靴製造が続けられれば長吏もこれからは政府の保護なしで自立してやっていけるだろうと思っていたからだ。

だから明治 4 年に「解放令」が出されたとき、弾左衛門という制度は今後不要ということにした。これからは保護なしで行けと宣言されたことを受け入れたのだ。

しかし問題が残った。制度としての弾左衛門が消えて被差別者は特権を失い、かといって西洋の革靴製造にはこれまでの革仕事は使えず、灯芯もまた電気登場で不要になり、仕事を失い、極貧にあえぐようになった。にもかかわらず市民による差別意識は昔以上に続く。これが明治以降、今日まで続いている差別問題につながっている。

第 13 代目浅草弾左衛門小太郎（「東京の被差別部落の歴史と現状」から借用）

（2013 年 5 月 16 日）

19　浄閑寺

日比谷線三ノ輪駅のそばに浄閑寺がある。江戸切絵図「今戸箕輪浅草絵図」（嘉永 6 年）をみると、今戸橋から日本堤通りを来ると中ほどの田んぼの真ん中に吉原遊郭があり、それも通り過ぎるとやがて日光街道に合流する。その合流地点が三ノ輪（当時は箕輪と書いた）で、そこに浄閑寺がある。古い寺である。

新吉原総霊塔

この寺に昔からあった供養塔を S4 年に作り替えて「新吉原供養塔」と名付けた。もとの塚は安政の大地震でなくなった遊女 5 百人を供養したものだった。この石の銘板に花魁を弔って「生まれては苦界、死しては浄閑寺」の句が書かれている。

「投げ込み寺」と説明があった。安政大地震（安政 2 年、1855 年）で、大勢の遊女が亡くなり、その遺体が夜のうちにそっと門前に棄てられたことによる。「生まれれては苦界、死しては浄閑寺（花酔）」という句が境内の新吉原総霊塔に書かれている。境内にはそのほかに、山谷のドヤ街で亡くなった労働者を祀る「ひまわり地蔵尊」、落語家の「三遊亭歌笑塚」、客に殺された花魁の「若紫墓」がある。

遊女の悲しい生涯に思いをはせて、永井荷風はしばしばここを訪れた。彼の「断腸亭日乗」のＳ12 年 6 月 22 日に「若紫塚記」が出てくる。それによれば、

大阪で生まれ育った勝田信子は美貌と知性に恵まれた女性だった。10 歳で吉原の大店の角海老に預けられて、17 歳で若紫の名前でデビュー。その後若紫は吉原を代表する花魁の一人になり、5 年間の年季明けには結婚も決まっていた。その年期明けを 5 日後に控えたある日、たまたま女にふられて自暴自棄になった男が角海老へ来て暴れ、若紫が刺し殺される。
信子は花魁のまま死んでしまった。死んでは恋人に戻れない、信子は行くあてがなくなってしまった。遊女は浄閑寺に投げ込まれるのが習いとはいえ、花の盛りの突然の凶事は、あまりに哀れでいたましい。信子のなじみが集まってせめて墓を建てようということになった。墓の名が「若紫塚」である。

落語の中にも吉原遊郭の世界の一端を見ることが出来る。「品川心中」「居残り左平次」「三枚起証」は品川宿の所で取り上げるので、ここでは「お見立て」をみる。

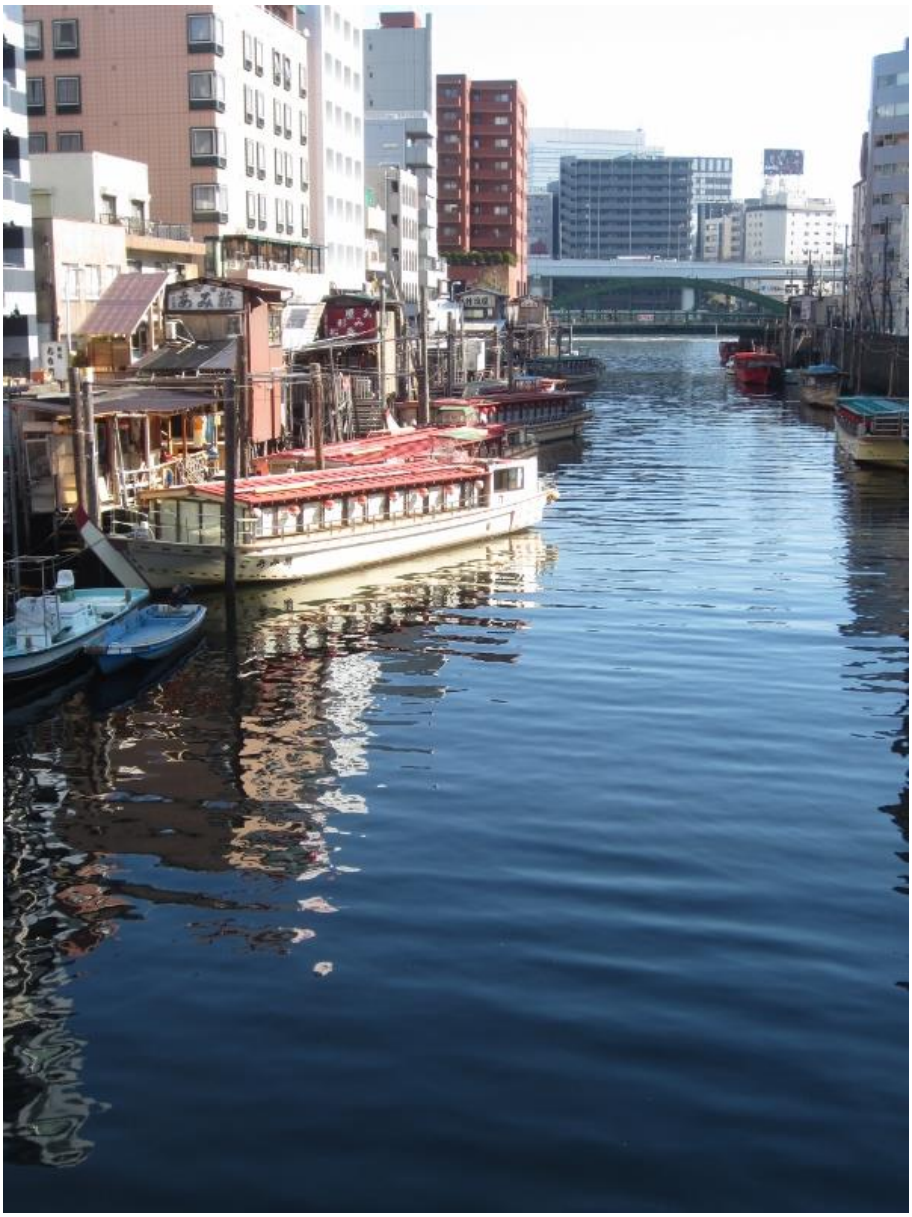
吉原の遊女、喜瀬川（きせがわ）花魁は、野田の木兵衛（もくべい）大尽が嫌いだが、以前おカネを融通してもらった時に夫婦約束をしたため、通ってくる。間に立った喜助（きすけ）は困り、初めは喜瀬川は入院して来られないという。それでも帰らないので次に、死んだという。すると墓参りすることになり、山谷のお寺へ行く。適当な墓を見立てて花と線香で飾るが、子どもの墓、軍人の墓などと次々にバレてしまう。業を煮やした杢兵衛が最後に、一体全体喜瀬川の墓はどこだと一喝すると、喜助がお墓はご覧の通り沢山ございますのでどうぞお見立てください、という話である。

この「お見立て」は、あの「品川心中」とよく似た話である。しかし「お見立て」のキーワードは表題通りの「お見立て」である。可笑しいのは、普通は客が女郎屋へ入って好みの女を指名するのが「お見立て」で、女郎屋へ行った時にこの場面が一番ワクワクするところだと言われている。しかしこの落語では逆に、遊女が客を選ぶことを言っている。遊女側にもお客に対する好き嫌いがあっただろうが、実際にはほとんど客の選り好みなど許されない世界だった。だから憂さ晴らしのように落語の中で客の選り好みをしているのだ。

（2013 年 5 月 16 日）

20　柳橋　～　元禄の庶民の暮らしが匂う街

柳橋は神田川が隅田川へ流れ込むところにある街である。昔は料亭が軒を並べて柳橋芸者が一世を風靡した街でもある。そして長い間、吉原へ通う旦那方がここから舟に乗って出発した街でもあった。今の柳橋の街はごくありふれた東京のビジネス街の一つになっている。何か他の街と違う点を探す、橋のたもとの神田川に屋形船や釣船が係留されていることか。もう一つあった。柳橋の手すりに芸者さんがつけた「かんざし」の模様が刻まれていることも他にはないものだった。



柳　橋　　神田川にかかる浅草橋から下流を見ると、柳橋があって、その向こうに隅田川の左岸を走る首都高向島線の高架橋が見える。屋形船や釣船が係留されている両岸は、昔は柳の木が植えられた「柳河岸」と呼ばれた。

山本周五郎の「柳橋物語」は、柳橋が架けられた元禄頃の話である。
主人公のおせんは茅町で研ぎ屋の祖父と二人暮らし。近所に幼馴染の大工の庄吉と幸太が住んでいる。ある日幸太が棟梁の養子に決まると、庄吉はおせんに神田川の柳河岸の柳の下で求婚する。「（庄吉が出稼ぎから戻るまで）ええ待っているわ」と答える。その一言が彼女の一生の半分を決めた。

庄吉が大阪へ行った後、江戸が大地震に襲われる。さらに大火事にも襲われる。火事は本郷、湯島、上野一帯を焼き尽くす大火で、おせんは幸太にかばわれながら逃げまどうが、祖父が死亡する。途中で捨て子の赤ん坊を拾う。幸太も大川に流されて死んでしまう。大火後、おせんは赤ん坊（後に幸太郎と命名）を育てる。その後も大水、飢饉に襲われるが、その都度、近所の人に助けられて生き延びる。
ある日江戸へ戻った庄吉に会う。しかし庄吉は幸太郎を幸太の子供と誤解する。おせんはいずれ真実は分かるはずと念じるが、やがて庄吉の結婚を耳にする。それを確かめに行って事実だったと知る。おせんは気も狂うほどに悩むが、次第に自分を真に愛してくれた人は庄吉ではなく幸太でなかったかと気付く。庄吉に対する「ええ待っているわ」の一言に縛られて、真に愛してくれた幸太を拒んできた自分に気付くのである。その後、柳橋の渡り初めの日に庄吉がおせんと幸太の関係を誤解していたと謝るが、その時にはおせんは幸太郎を幸太の子供と毅然と宣言する。そして幸太の位牌を作り自分の名も並べて書く。

山本周五郎氏が得意とした江戸の庶民の暮らしの描写とそこで生きた人々の人情話が心を打つ。弱い者がみんなで助け合って生きた江戸の庶民の生活が描かれているからである。

それだけでなく、この話にはあの「明暦の大火」（1657 年）を思わせる大火事が扱われており、二方向から迫る大火事の中で浅草橋門が閉められて大勢の人が逃げ場を失って死んだことも書かれている。「柳橋物語」の終末で、その大火の後、地元陳情で架けられた「柳橋」の渡り初めが登場する。柳橋が完成したのは元禄 11 年（1697 年）で、明暦の大火は明暦 3 年（1657 年）である。だから、実際には大火が原因では柳橋が作られたわけではなく、間接的な影響を及ぼしたに過ぎないのだが、それで小説のだいご味は変わらない。

明暦の大火（振袖火事）は次のようなものだった。
明暦 3 年（1657 年）1 月 18 日から 1 月 20 日にかけて、本郷、小石川、麹町の 3 か所から出火した。当日は北西の風が強く、本郷・本妙寺から出火した火は浅草橋、神田、京橋方面、隅田川を超えて深川へ及んだ。小石川から出火した火は、飯田橋、九段から江戸城天守閣、本丸を焼いた。麹町から出火した火は南部方面を焼いた。この火事は未曽有の規模となり、死者が 3〜10 万人、市街地の 6 割を焼いた。この火事で小伝馬町の牢では囚人の

「解き放し」が行われたが、これを役人が囚人の脱走があったと誤解して浅草橋御門を閉めた。そのために浅草方向から隅田川沿いに南へ逃げた人々の多くが逃げ場を失って火に巻き込まれた。門を乗り越えようとし人もいたがその多くが堀へ落ちて死んだという。

この大火の後、幕府は江戸の市街地改造をすすめた。

① 大火犠牲者を弔うために両国に回向院を建立し、供養と資金確保のために相撲興行を行った。

② 両国橋を架橋し、その両端に橋詰広場を整備するなど、各所で道路の拡幅や広場を作り火除け地を整備した。

③ 西本願寺を横山町→築地、東本願寺を神田明神下→浅草、日枝神社（山王権現社）を三宅坂（城内）→溜池上、霊厳寺を霊厳島→深川へ移転するなど町屋や寺社を延焼防止のため外堀の外側や新開地へ移転した。

④ 町屋や寺社移転のために、本所、深川の埋め立てと開発。

⑤ 江戸城内にあった紀伊、尾張、水戸の御三家の屋敷が麹町、小石川へ移転し、その跡地を吹上の庭とし、延焼防止隊を整備した。また諸大名には火災時の避難場所として下屋敷を与えた。

大火 2 年後の万治元年（1659 年）には両国橋が架橋された。江戸大改造によりこれまで江戸防衛上の理由から隅田川を超える橋は奥州街道の千住大橋だけだったが、下総国を結ぶ両国橋が架橋された（寛永元年 1661 年説もある）。

これにより本所、深川方面の開発が進み、急速な人口移動が生じた。深川には、寺社や武家屋敷が多く移転した。水運がよく、火事も少なかったからだ。そこでこれは想定だが、両国橋の架橋で、交通量が増えて浅草方面を結ぶ上で従来の浅草橋だけでは混雑対策が出来なくなって、神田川の最下流にもう一本柳橋を架橋することになったのだろうと推定される。だから柳橋は、「柳橋物語」の小説にあるように大火後の都市改造で作られたものではないが、それでよい。小説の趣旨が、橋の歴史に大火による人々の犠牲があり、大火があっても女性たちが助け合って街を作ってきたことにあって、橋の歴史を述べるものだはないからだ。

その後、柳橋は神田川の第一橋として隅田川に最も近い利点を生かして、浅草や吉原へ向かう客はこの柳橋から船に乗るようになる。柳橋は水運の要地になって、浅草や吉原へ行く人とそこから帰る人が船宿や料亭で遊ぶようになる。さらにずっと後になるが、1840 年頃江戸中の岡場所（27 か所）の取締まり強化で、それまで勢いがあった辰巳芸者も衰退に向かった。すると辰巳芸者も柳橋へ移りはじめ、日本橋界隈の老舗の旦那方を中心に柳橋芸者が勢いを増してくることになる。 （2013 年 5 月 17 日）

21　松尾芭蕉

深川には松尾芭蕉の史跡が多い。芭蕉記念館（常盤一丁目）、芭蕉稲荷神社、芭蕉庵史跡・展望庭園（ともに常盤二丁目）、芭蕉句碑（清澄庭園）、採茶庵跡、芭蕉像（深川一丁目）、深川江戸資料館（白河一丁目）などである。
あちこちに史跡があるのは、彼があちこちに移り住んだためだろう。延宝 8 年（1680 年）に始めて深川へ移り住んだ所は小名木川にかかる万年橋のそばだった。2 年後の冬、「八百屋お七の火事」で類焼して一旦甲斐谷村（山梨県都留市）へ避難するが、半年後に再び深川へ戻る。そこへ約 6 年住んだのち元禄 2 年（1689 年）に「奥の細道」旅行へ出かける。2 年後に帰京して、元禄 5 年（1692 年）から再々度深川へ住む。翌年「奥の細道」を書き上げると故郷の伊賀上野への旅へ出かけて、元禄 7 年（1694 年）10 月 12 日、大阪で死去する。
このように、江戸における芭蕉の本拠は深川だったが、旅で過ごす日々が続いた。そして旅に出かけるたびに住んでいた庵を処分したので、あちこちに住むことになった。この芭蕉の住まい方や旅に生きた人生は、「方丈記」の鴨長明の思想とかなり近い。そういえば元禄 5 年（1692 年）5 月、「奥の細道」の旅を終えて三度目の深川暮らしをした時に、芭蕉が書いた「芭蕉を移す詞」は、その文体、その書き方が「方丈記」にとてもよく似ていると思っている。

＊　　＊　　＊

芭蕉が深川へ移住したのは、延宝 8 年（1680 年）、37 歳の時だった。当時の深川はまだ埋立途中の辺鄙なところである。29 歳で江戸へ来てからの芭蕉の暮らしは順風満帆だったと前に「関口芭蕉庵」の項で述べた。実際にも彼は、その間に神田川浚渫事業を請負い、俳壇の世界でも万句興行を成功させていた。しかしその年の暮れ、突然、やっと築いた安定した生活をすべて投げ捨てるかのようにして深川へ移住したのである。

オーソドックスな解釈をする学者は、この引越しについてあまり注目していない。例えば久富哲雄氏は、延宝 8 年初夏に「独吟 20 歌仙」を刊行して江戸俳壇に一大勢力を形成するようになったが、「感ずるところあって宗匠生活を廃し、同年冬住まいを深川の草庵へ移した」と他人事のような書き方である（「奥の細道の旅ハンドブック」三省堂、2002 年）。

採茶庵の松尾芭蕉像

「さて、それでは行って来るか」という声が聞こえそうだ。芭蕉庵を人に譲り、杉風の別荘・採茶庵に仮住まいをしていた芭蕉は、元禄 2 年 1689 年弥生七日の早朝、「奥の細道」旅行へ出発した。すぐ横の小名木川で舟に乗り、隅田川へ出て千住大橋で上陸した。千住で大勢の人に見送られた。

しかし、この引越しは唐突だし、それにより芭蕉が失うものはあまりにも多かったのではないかと疑問を呈した人がいた。
何故か？
引っ越しの理由を田中善信氏はこう言う（「芭蕉二つの顔」講談社学術文庫、2008 年）。

① ４年前伊賀上野から連れてきて、芭蕉の仕事を手伝っていた甥の桃印が、芭蕉の内縁の妻・寿貞（妾だったという人もいる）と密通し、駆け落ちした。当時密通は死罪だった。
② 桃印は故郷を出てから５年目で、一旦帰国して藤堂家へ近況報告する義務があったが、行方不明で連絡が取れなかった。帰国しないと故郷の親類に累が及ぶ恐れがあった。
③ そこで芭蕉は、桃印を死亡したことにして藤堂藩にも届け出た。同時に、近所付き合いする住民の目があって、日本橋には住めなくなり、深川へ移住した。

同居していた甥の桃印と内縁の妻・寿貞の不義密通・駆落ちが、深川隠棲の原因だったというのだ。
藤堂藩は、藩民が他藩で仕事をする場合は５年に１度は帰郷して近況を報告するように義務づけていた。それに反すると一族にも厳しい塁が及ぶという決まりがあり、それに対応する必要があった。そのため、芭蕉は苦しんだあげく、桃印を死んだことにし、自らも誰も知らない深川の田舎に隠遁したと田中氏は推測する。
甥の桃印と内縁の妻の駆落ち話しはずいぶん現実的で生々しい話だが、このほうが人間的現実として納得しやすい。芭蕉はこれにより、名声と富を手放すことになるのだが、厳しい修行のような深川隠棲を生き抜くことで、後世の「俳聖」といわれるまでの「芭蕉」が誕生したとみることもできる。

寿貞は、桃印が労咳=結核で病死した後、なぜか再び深川の芭蕉庵で生活することになるが、1 年後に寿貞もまた結核で逝くことになる。その時、芭蕉は次のような句を詠んでいる。

数ならぬ身となおもいそ玉祭り

寿貞は、我が身を「数ならぬ身」と思うような境遇だったということだが、芭蕉は「そんな風に思ってくれるな」と慈しんでいる。玉祭りは魂祭りで、盂蘭盆(うらぼん)の行事のこと。芭蕉と寿貞との間に何があったかわからないが、芭蕉の寿貞への並々でない切ない思いが伝わってくる。寿貞の不義密通・駆落ち説は面白いが、神格化した芭蕉像に合わない。芭蕉ほどの大物がそんな外因的なことで人生を変えるかと久富氏らは不安に思っているに違いない。

深川に来た芭蕉はここで仏頂和尚に出会い、禅を学んでいる。仏頂和尚というのは鹿島根本寺の住職で、当時深川の臨川庵に滞在していた。彼は自分の寺社地が鹿島神宮に奪われたので返してほしいという訴訟のために滞在していた。長い間続いた訴訟も天和 2 年に仏頂和尚側が勝訴するが、和尚の禅僧として行脚の旅に生きる考え方が芭蕉に強い影響を与えたと推測することもできる。

この年の暮れの「八百屋お七の火事」で芭蕉庵も類焼し、芭蕉は甲斐・谷村（山梨県都留市）へ引越した。約半年後（天和 3 年、1683 年、40 歳）、再び深川へ戻り、旧庵のそばに作った庵に住む。ここから漂泊の旅を続ける芭蕉の晩年が始まる。

さて「芭蕉を移す詞」についてである。
この文章は元禄 5 年 8 月、前年の「奥の細道」旅行を無事に終えてゆっくり伊賀上野や京都などで旅の疲れを癒した後、帰京して新しく住む家へ入った時に書かれたものである。約 1,100 字足らずの短文である。

「はじめて深川へ来たとき庵に芭蕉の木を植えた。うまく繁茂し家の軒を隠すほどに成長した。この木の名前から住まいを「芭蕉庵」にした。人に株分けもした。「奥の細道」旅行の時には隣近所へ全部木を移した。旅の途中でもこの木が心配だった。旅行後またここへ戻ってきたら前と同じように元気に育っていた。旧庵の近くに建てられた新しい草庵は柱も美しく、竹で編んだ枝折戸、葦の垣根もいい。南に池があり、富士山もよく見える。そこへ、早速あの芭蕉の木を移した。木は 7 尺余りで葉が折れて痛ましかったが、太い茎は切られていない。荘子が言うように、山中の木は天寿を全うするので尊い。修業で葉に文字を書いたり、新しい葉をとる人もいるが、私はそんなことはしない。芭蕉の葉陰で遊び、風雨で壊れやすいのを愛するだけだ。」

ここには自然と一体化しようとする芭蕉の姿が見える。人が己を捨てて自然と一体化しようとするには、鴨長明のように山中で隠遁生活をするか、旅に暮らすしか方法がないのだろう。旅はそれが終わればまた自宅へ戻るので長続きできない。しかし、芭蕉は旅の心で日々生活することは出来る、と言っているように思われる。

（2013 年 5 月 17 日）

22 「幕末太陽伝」の品川宿

品川宿は東海道第一番目の宿場。そのエリアは細長い。北の八ツ山口から目黒川を経て南の青物横丁まで 3.8ｋｍにわたって、幅 3 間（4.5m）の東海道が残されている。今なお市民の生活道路としてそのまま使われている。
品川はもともと海に面した漁師町で、東海道から左右に入る横丁がたくさんあり、どの路地も左へ入ると海へ出た。今ではほとんど周囲は埋め立てられているが、北品川にある土蔵相模跡の石碑の先の路地を左に入ると、すぐ品川浦の船溜まりに出る。その水路の突き当りに洲崎弁天（利田　（かがた）神社）がある。漁師の守護神である。神社に接する細長い公園には、昔ここの漁師が獲ったという鯨を記念する鯨塚もある。
さらに神社の海側の台場小学校の脇には灯台のレプリカが立つ品川台場跡がある。ペリーが江戸沖へ来たとき、伊豆の韮山の代官・江川太郎左衛門の提案で黒船を迎え撃つために作った人口島の砲台である。このお台場は桜の名所だった御殿山を崩した土砂で作られた。

＊　　＊　　＊

川島雄三監督の映画「幕末太陽伝」を見た。S32 年制作だが、日活百周年記念で 2011 年にデジタル修復版ができて、見ることができた。昔から江戸落語ワールドの傑作と言われてきた映画だが、実際に見てみると落語にとどまらず映画作品としても傑作である。幕末の文久 2 年の品川宿の大店の女郎屋「土蔵相模」を舞台に、そこにたむろした高杉晋作ら長州藩士が起こした建設中のイギリス公使館焼打ち事件の顛末を描いている。ユニークなことは、落語の「居残り佐平次」「品川心中」「三枚起請」「お見立て」などで語られる世界が次々と展開されることである。

女郎屋「相模屋」の主人（金子信雄）と女将（山岡久乃）は「居残り」を決め込んだ佐平次（フランキ―堺）が「働いて返しやす」というと、しぶしぶ承諾。飲み食いのツケを働いて返すことになった佐平次は、あんま、部屋番、時計の修繕と八面六臂の活躍をする。しかし部屋へ帰ると、佐平次は煎じ薬を飲んでいる。胸を患っているのだ。

女郎屋の売れっ子こはる（南田洋子）、おその（左幸子）はお互いに相手を罵り合っていた。ある日、おそのは出入りの本屋金造（小沢昭一）となりゆきから心中することになった。だが川へ飛び込んだ金造を後に残し、おそのは宿へ帰ってしまう。たまたま川は膝までしか水が無く、金蔵は命拾いする。しばらくたってから、おそのは金造が客で来たと知らされて半信半疑で部屋へ行くと、金造が幽霊のような顔で座っていた。しかし　よく見ると金造はいなかった。その直後玄関先に棺桶が届く。中に目を剥いた金造が入っていた。おそ

のは失神する。そこへ佐平次がやかんの熱湯を棺桶にぶちまけた。「アッチッチ！」死体の筈の金造がホウホウの体で逃げ去った。これは佐平次が仕組んだ芝居だった。

品川宿。品川宿は東海道一番目の宿場町だが、ただの宿場ではなかった。ここは昔から　漁師町で江戸前の魚貝類がとれた。潮干狩りや舟遊び、釣りもできた。料理屋も多いグルメの街だった。もう一つは北の吉原に対して南の品川と呼ばれたほどきれいどころが揃い貸座敷が並ぶ大人の街だった。さらに御殿山や土佐山は花見、月見、紅葉狩りの名所で庶民の行楽の名所でもあった。だから遊びには事欠かない江戸の一大レジャーランドだったともいえる。

また別の日、こはるの客がかち合った。こはるはそれぞれに夫婦の約束をしていたのだが、それが何と親父と息子だったから始末が悪い。ダブルブッキングに気付いた二人は、こはるを前にかんかんに怒り出す。そこへ「お待ちなせえ！」と入ってきた佐平次が、「やい、こはる！おめえ、おいらとの夫婦の約束を反故にしやがったな！ぶっ殺す！」といいながら出刃包丁を出してこはるに飛びかかる。見ていた親父と息子は仰天した。「あっ、あっ、危ない、危ない」と二人で佐平次を押さえる。泣いて悔しがる佐平次に二人は同情し、小遣いまで与える始末。佐平次は機転のきく男だ。

相模屋には長州藩士、高杉晋作（石原裕次郎）ら、勤皇の志士が出入りしていた。彼らは御殿山の公使館焼き討ちを計画していた。しかしその図面が手に入らない。そんな時、奉公人

のおひさ（芦川いづみ）は大工をしている父親の借金が返せないので、廓に出されそうになった。そこで、「可哀相ダは惚れたってことよ」とばかりに相模屋の放蕩息子徳三郎とおひさは駆け落ちを企てる。そこへ佐平次が図面を餌にして高杉晋作を間に入れて、遊び人の若旦那と駆け落ちの段取りをする。

佐平次を幕府のスパイかと疑う志士たちが、図面欲しさに佐平次に焼き打ち計画を打ち明けて出方を見る場面がある。その時の佐平次の態度が凄い。舟の上で怯えもせず、媚びもせず、「へへえ、それが二本差しの理屈でござんすかい」と高杉に挑む。「ちょいと都合が悪けりゃ『こりゃ町人、命は貰った』と来る。どうせ旦那方は百姓町人から絞り上げたおかみの金で、やれ攘夷の勤皇のと騒ぎ廻っていりゃ済むだろうが、こちとら町人はそうはいかねえ」「何ッ...？」「手前一人の才覚で世渡りするからにゃア、へへ、首が飛んでも、動いてみせまさア！」。佐平次の大啖呵が庶民の元気を代弁している。

放蕩息子の駆け落ちと高杉の御殿山焼き討ちで、「幕末太陽伝」も終末を迎える。今や相模屋では佐平次は重宝な男として尊重され始めるが、宿に戻るとこはるの客の杢兵衛に絡まれる。「お見立て」のとおり、こはるは杢兵衛に会いたくない、こはるは病気と言っても帰らない、死んだと言うと墓へ連れて行けという。近くの墓場に連れて行き、適当に誤魔化そうとするがこれも不発。すると、杢兵衛が「おめさっきから妙に悪い咳コイてるでねェか」と言い、逃げ出す佐平次に「地獄サ落ちっど〜！」という。佐平次は、全力疾走で「俺はまだまだ生きるんでぇ！」と叫びながら南へ走り去る。

この映画の良さは次の点にある。
第一に 4 本の古典落語が一つの大きなストーリーの中できっちり納まっているという意味で、シナリオがいい。スピード感あふれるストーリーで、映像にも無駄がない。
第二に俳優陣がいい。佐平次（フランキー堺）の粋で軽妙な演技は、まさに江戸落語の世界を髣髴とさせるし、いがみ合う２人の女郎はドキリとするほど美しく、またしたたかさ、女の怖さを秘めたその演技が火花を散らしているようだ。それに引き換え、石原裕次郎や小林明、岡田真澄らがいかにも大根役者風で笑える。
第三に見事に再現された「相模屋」のセットがいい。
第四に笑える場面が多い映画だが、肺病病みの佐平次が時々みせる暗い表情が映画全体に張りつめられた緊張感を漂わせて笑いっぱなしでないのがいい。「何でげしょう」とおどける佐平次が、行灯部屋に戻り独りになった瞬間に見せる鬼気せまる表情に思わず息を呑むのだ。川島と今村昌平（脚本・助監督）が力を入れた演出なのだそうだ。しかしひとたび廊下から声が掛かると「へ〜い」を景気のいい声を上げて飛び出して行く。元の表情に戻る。その冷めた視線が作品の低音になっている。

（2013 年 5 月 21 日）

23　鈴ヶ森刑場跡

前にここへ来たのは「東海道ウオーク」の時だった。8 月のお盆の頃で、刑場跡だがずいぶん明るいところだった印象が残っている。今回再度行ってみても明るい所という印象は変わらなかった。気候のせいだけでなく、海が近いという理由もあるのだろう。

220 年にわたって使われた江戸時代の処刑場である。もともとは高輪にあったが、慶安 4 年（1651 年）にここへ移転してきた。東海道に面する海岸の松並木沿いだったが、刑場ばかりは野犬が群がる昼なお暗い陰惨な場所だったようで、多くの旅人がここを迂回して歩いたという。

品川の鈴ヶ森は千住の小塚原とよく比較される。（　）内は小塚原

開設時期・・・慶安 4 年～明治 3 年	（慶安 4 年～明治 14 年）
規模・・・・・40 間×9 間	（ 60 間×30 間）
処刑者数・・・約 10～20 万人	（約 20 万人）
寺・・・・・・大経寺	（千住回向院）
主な処刑者・・由比正雪、八百屋お七等	（橋本佐内、吉田松陰等）

江戸時代の刑では、武士の死刑は切腹、斬罪のいずれか。庶民の死刑は磔（はりつけ）、火罪、獄門、死罪（斬首刑で、財産没収や死体の試し切りなどの付加刑が伴った）、下手人（斬首刑で、付加刑なし）のいずれかだった。庶民の刑罰のうち死罪、下手人の執行は牢内の切場で、磔、火罪、獄門は刑場で通常執行された。獄門は牢内で切った首を刑場に運んで３日２夜晒し、罪状を記した捨札（すてふだ）を 30 日間立てた。小塚原と鈴が森が刑場に選ばれた理由は、江戸に入る南北の主要な入口で人の往来が頻繁だったからで、幕府の警告・威嚇を優先させようという考えから、人目につく場所として選ばれた。処刑人の捨札はこのほかに、両国、板橋、新宿という江戸に入る街道の入口にも立てられた。

鈴ヶ森には磔用の柱を立てた台石や火あぶり用の台石があるので、その恐ろしさを垣間見ることができるが、小塚原に比べて全体的にここは明るい。敷地は第一京浜道路で敷地を削られてわずかにその後を残すに過ぎないが、小塚原のような暗さはない。

火炙り台。「八百屋お七をはじめ火炙りの処刑者は皆この石上で生きたまま焼き殺された。真ん中の穴に鉄柱を立てて、足下に薪を積み縛りつけて処刑された」と説明版に書かれている。

（2013 年 5 月 22 日）

24　芥川の「本所両国」を歩く

本所というと長谷川平蔵が活躍した町で、侍と町民が混然一体になった所という印象が強い。しかし、芥川龍之介が育ったところと聞いたので、彼の著作「本所両国」を読んでみた。私が故郷の湖西市（静岡県）を懐かしく思う気持ちと同じように、龍之介には本所が懐かしい故郷だという紀行記が書かれていた。

芥川龍之介は、M25 年に日本橋入船町（明石町）で生まれたが、母フクが精神異常をきたし、生後 7 か月で母の実家の本所小泉町へ預けられて 18 歳まで育った。学校へ通うために M43 年内藤新宿で 4 年間過ごし、T3 年田端へ引越す。新宿へ引越して間もない T1 年（20 歳）に随筆「大川の水」を書き、S2 年（35 歳）の服毒自殺する直前に書かれたのが、紀行記「本所両国」である。

隅田川と東京水辺ライン両国発着場

隅田川にはかって多くの渡し舟があったが、橋梁建設で廃止された。龍之介は領国と柳橋を結ぶ「富士見の渡し」によく乗った。その記憶が大川の水、匂いとなって龍之介の故郷を形作っている。渡し船がなくなって、M18 年には吾妻橋と永代橋を結ぶ一銭蒸気が生まれた。初めのうちは渡し船の役割もかねていて、「本所両国」では水に浮かぶ待合所があり、やっと来た一銭蒸気に乗ると、お土産にどうぞと言って絵本売りがやってきたと書いている。今日の日の出桟橋と吾妻橋を結ぶ「水上バス」の原型だろう。

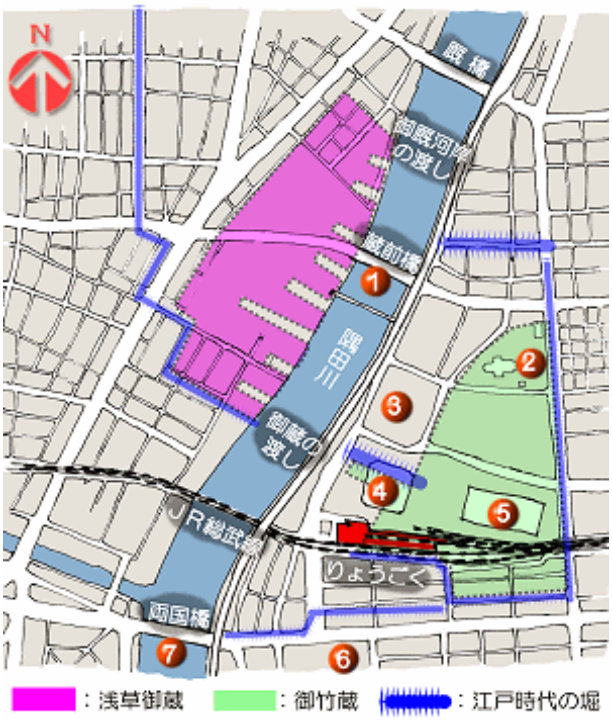
龍之介の「本所両国」は、東京日日新聞の「大東京繁盛記」に S2 年 5 月 6 日から 5 月 22 日まで掲載された見聞録である。龍之介は「本所両国」を紹介するに当たり、次の 13 か所を取り上げている。その中からいくつかを取り上げる。

1 大溝（おおどぶ）	2 両国	3 富士見の渡し
4 お竹蔵	5 大川端	6 一銭蒸気
7 乗り継ぎ一銭蒸気	8 柳島	9 萩寺あたり
10 天神様	11 緑町、亀沢町	12 相生町
13 回向院	14 方丈記	

富士見の渡し

自分は何かにつけて隅田川を思いだし、懐かしく思う。それは何故か。自分が今住んでいる世界から遠く離れた懐かしい思慕と追憶との国のようなところだからである。懐かしいふるさとを代表するものが大川（隅田川）の水で、その水の音を懐かしく聞けるのが「渡し舟」だという（「大川の水」T1 年 1 月）。

昔から大川には多くの渡し舟があり、最も多いときは 22 か所あった。隅田川に橋が少なかったからである。吾妻橋～新大橋間にも 5 つの渡しがあり、「大川の水」を書いた。



①蔵前橋②東京都慰霊堂③旧安田庭園④国技館
⑤江戸東京博物館⑥回向院⑦両国橋

大正 1 年頃になると、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しが廃止されて、一の橋の渡しと御蔵橋の渡しが残るだけになった。その後、一の橋の渡しも廃止されたと聞いたので、御蔵橋の渡しが廃れるのもそう先の事ではないだろうとも述べている。

明治 18 年吾妻橋と永代橋の間に蒸気船が運航した。当初は渡し船の役割も兼ねていて、1 区 1 銭で乗ることができたので「一銭蒸気」或いは「川蒸気」とも呼ばれた。龍之介は「本所両国」で、水に浮かぶ待合所があって、やっと来た一銭蒸気に乗ると、絵本売りが乗っていてお土産にどうぞと言って売り込んでくる、と書いている（「一銭蒸気」、「乗り継ぎ一銭蒸気」）。早い話が今の日の出桟橋と吾妻橋を結ぶ「水上バス」の原型である。

龍之介がよく乗ったのは「富士見の渡し」だった。両国と柳橋を結ぶ渡しで、今の総武線のあたりにあったようで、早い時期に廃止された。老人の船頭が漕いで、水の動きにつれて揺りかごのように軽く体をゆすられるのが心地よかった。もし東京に固有な臭いは何かと聞かれたら、隅田川の水の匂いと答える。匂いだけでなく、隅田川の水の色、水の音の響きも東京の色、声である。大川があるが故に東京を愛し、東京あるが故に生活を愛する、と述べている。

御竹蔵、大溝（おおどぶ）

隅田川を挟んで蔵前橋あたりの右岸に「浅草御蔵」、左岸に「御竹蔵」がある。浅草御蔵にはお米の倉庫があり、御竹蔵はそのお米蔵のバックヤードか資材置き場だったのだろうと推定されるが、よく判らない。

小泉町に住んでいた龍之介が子供の頃には、御竹蔵が遊び場だった。御竹蔵は中学時代（M38～M43）には一部が両国駅や陸軍被服廠に変わったが、小学校時代（M31～M37）には大溝に囲まれた雑木林や竹やぶだった。1 間半位の大溝（おおどぶ）が御竹蔵を囲っていた。すでに鉄道会社が買って立入りが制限されていたが、中は野原で橋がかかった掘割もあった。周囲を囲んでいた大溝（おおどぶ）は、潮入の堀で江戸時代末期までは魚釣りができた。龍之介の叔父はよくここで釣りをしていたと言っている。

また後年、その時芥川は駒形に住んでいたが、T12 年の関東大震災では御竹蔵へ大勢の人々が避難してきたが、直後から起きた大火事の炎や熱で焼死や窒息死する人々が 4 万人にも及んだ。これが芥川の生きていた時代の出来事だった。

芥川が亡くなった後の S5 年に、再び惨禍を繰り返さないよう願いを込めて横網町公園（よこあみちょう）に「震災記念堂」（現東京慰霊堂）が建てられた。S20 年頃になると、御竹蔵

跡はすっかり様子が変わり、南半分が両国駅と総武線線路となり、北側が陸軍被服廠になった。S20 年 3 月 10 日の東京大空襲では、人口密集地のこの周辺では多くの人々が横網町公園へ逃げてきたが、強風で多数の死傷者を出した。死者約 10 万人と言われている。

今では、線路跡が両国国技館と江戸東京博物館、被服廠跡がホテルにある再開発ビルや学校になっている。そして横網町公園には復興記念館と東京都慰霊堂が建ち、「震災と戦災の聖地」となっている。隣接の旧安田庭園は大川の水を引き入れた潮入庭園である。M22 年に旧大名屋敷を安田財閥が買い入れてその後東京都へ寄付されたものだが、大溝が潮入の堀だった光景を髣髴とさせる。

回向院

回向院は、明暦 3 年（1657 年）の明暦の大火で亡くなった約 10 万余の被災者を祀るために建立された。ここは開山当初から、宗派にかかわらずあらゆる無縁仏を受け入れ、又犬猫などの動物も受け入れるというユニークな寺である。

寺の運営資金を生み出すためと推定されるが、天保 4 年（18331 年）以降、それまで深川富岡八幡宮で行われていた勧進相撲が回向院境内で定期的に開催されるようになった。大相撲と縁が深く、M42 年（1909 年）には境内に初代両国国技館が建設。しかし、火事、震災、空襲、そして戦後には GHQ による接収があった。その後蔵前国技館へ大相撲が移転したために日大講堂になり、S57 年（1982 年）に解体された。今では再開発ビルのシテイコアが建設されている（H3 年 3 月）。

私には大相撲よりもこのブログの別箇所にも登場する「小塚原回向院」（「千住回向院を指す。」との関係が面白い。小塚原回向院は言うまでもなく刑死した人の慰霊の寺である。そこで話を伺うと、両国回向院の分院だという。小塚原回向院は、処刑場に隣接してどうしてもなくてはならないお寺であるが、お布施などもほとんど期待できないから、決して財政豊かなはずがないだろう。そこで幕府が特別に勧進相撲を許可した経緯もあって、比較的財政的に恵まれた両国回向院にその面倒を見なさいということになったのではないか、と勝手に推定している。ただこれでは鈴ヶ森の場合と違うことになるので、もっと検討すべきかもしれない。

鴨長明「方丈記」

「本所両国」の最後の 15 話目が「方丈記」である。芥川がこの連載記事を書くために本所へ行ってきたと両親と会話する場面があり、昔を思い出しながらあれもこれも皆変わった、驚いた、驚いたという話をする。最後に龍之介は驚いたという以外に何も書けない、昔の人が書き尽くしている、と言って「方丈記」冒頭部分を抜粋する。

「玉しきのみやこのなかにむねをならべいらかをあらそえる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或いはこぞ破れてことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかわらず、人も多かれど、いにしえ見し人は、二三十人が中に、わずかに一人二人なり。明日に死し、ゆうべに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いずかたより来りて、いずかたへか去る」（鴨長明「方丈記」PP9-10、岩波文庫 1989 年）

確かに「方丈記」は、室町末期の京都を襲った数々の天災や人災を体験して、鴨長明が抱いた「無常観」をあちこちで述べている。しかし、彼は現世の無常観を嘆いているだけの人ではなかった。彼は「人の住いと生き方」に焦点を当てて、人々の住まい方の中にその人の生き方が凝縮されていると見た。人は妻子、家族、主君、師匠、牛馬のために家を建てる。しかし天災や人災があればそれらはひとたまりもなく、全く当てにならないことに気付くだろう。だから自分は出家して、一丈四方の庵に住んで隠遁生活をする。無情な現世を捨てて隠遁生活に入れば、何もないがのどかな生活となって心は平穏に過ごせる。
「方丈記」は、単に現世の無常観を嘆くだけでなく、身を捨てて生きる遁世者としての生活と思想に注目して、遁世者が自己洞察によりどこまで率直に自己追求できたかを示すものである。

芥川は意識的にその方面に対する省察を避けている。龍之介が「方丈記」を冒頭部分を紹介した後に、母が言う「なんだえ、それは？「お文様」のようじゃないか？」。この母の「お文様」は、浄土真宗の法語を指す。

「人間の浮生なる相をつらつら観ずるに凡そはかなきものはこの世の始中終幻の如くなる一期なり。・・・されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。・・・されば人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば誰の人もはやく後生の一大事を心にかけて阿弥陀仏を深くたのみまいらせて念仏申すべきものなり。」（同上）

母の言う法語は「方丈記」の結語と妙に近くて、人の世は無常だから往生するには阿弥陀仏を念仏する必要があると言っている。だから、無常、無常というだけでは全然不十分で、それに対する救いをどうするかまで考察することが重要である。このように、浄土真宗では念仏を唱えて仏様に救いを求めよと言い、鴨長明は隠棲せよと言っている。芥川が「本所両国」を母の指摘を無視して鴨長明を挙げただけで終わっているのは、彼自身が未だに「生き方」に関して精神の整理がついていなかった事例と思われる。

（2013 年 6 月 2 日）

25　玉の井

春になった。今年の桜見物をどこにしようかと考えているうちに、先月来読んでいた永井荷風の「墨東奇譚」を思い出した。向島の桜を見に行くと決めたのだが、その前にあの荷風先生が通い詰めた「玉の井」が今どうなっているかも知りたくなった。
そこで、横浜から京急電車で曳舟まで出て、東武電車へ乗り換えて東向島駅まで行った。

交番の裏手にある日蓮宗啓雲閣教会というお寺がある。寺の入口に「満願稲荷社」と書かれた鳥居があり、小さな稲荷神社と永井荷風の「墨東奇譚」の一節が地図とともに書かれている。

永井荷風の「墨東綺譚」（S11年）は、老年（58歳）の小説家大江匡（ただす）が玉の井へ通い、娼婦お雪との出会いと別れを描いた中編小説である。荷風はその日記「断腸亭日乗」のS11年5月～10月にしばしば玉の井へ行ったことを書いていること、「作家贅言（ぜいげん）」（S11年）に向島寺島町の遊里の見聞記を書いて「?東綺譚」と命名したとあることから、大江が荷風の分身だろうと推測されている。

そのあらすじは次の通りである。

小説家大江匡は「失踪」という小説を構想している。その小説は、51 歳の英語教員が退職し、その退職金をもって失踪し、向島辺りに住むカフェー勤めの女のところへ身を寄せるという筋書きである。小説家大江は 6 月末のある日玉の井付近を散歩する。急に雨が降り出して、大江が広げた傘へ浴衣姿の女（お雪）が入ってきた。お雪に誘われるまま部屋へ上がる。それ以降しばしばお雪の元へ通うようになる。ある日お雪が借金がなくなったらおかみさんにしてほしいと言い出す。お雪を普通の家庭で幸せに暮らせるようにするのは自分ではない、と大江は考える。9 月末お雪が入院したと聞く。10 月になると大江も玉の井通いをしなくなった。

永井荷風は、1959 年に 79 歳で亡くなった時、市川のアパートはゴミダメのような部屋で万年床に倒れていたという。その前日まで京成八幡駅前にある料理屋大黒屋でいつものように口癖にもなっていた「カツレツ丼とお新香と銚子 1 本」を頼んでそれを完食し、浅草通いを続けていた「変人」である。その変人ぶりは生き方にも出ていて、家柄がよく、欧米留学経験がありフランス語に堪能で一時は慶応大学文学部教授だったが、退職して文筆業に入った。作家としては、東京に住んで江戸の香りを探し求める作風で、自らの美学に耽溺し日常生活自体を文学作品にしようとした作家である。73 歳で文化勲章をもらうが、その年も浅草でストリップ嬢に囲まれていた。彼はその変人ぶりを最後まで貫き、死ぬまで浅草通いをやめず、養子とケンカし続けて孤独に死んでいった。

さて、永井荷風の小説づくりの特徴の一つに作品の舞台、場所へのこだわりがある。「?東綺譚」でも、小説を書くときに自分が最も興を催すのは人物の生活や事件が開展する場所の選択とその描写といっている。確かに彼に場所に関する描写は微に入り細にいったもので、この小説は今は亡き旧玉の井を我々の眼前に晒してくれる。

まず、小説に登場する「玉の井」は戦前の私娼窟で、S20 年 3 月 10 日の東京大空襲で跡形もなく焼けた街を指す。だからこれを「旧玉の井」と呼ぶ。これに対して、戦後に作られた赤線としての「新玉の井」は、戦災で焼けずに残ったいろは通り北側で焼け出された業者の一部が新しく私娼窟の商売を始めたものである。同様に他の業者の一部が南の「鳩の街」でも私娼窟の商売を始めて、「鳩の街」が生まれた。

その私娼窟というのは、遊郭で働いた公娼と区別する言葉で、公に認められた場所でなくて飲み屋が集まって違法に売春をさせる場所を指す。その店は「銘酒店」といい、街中によくある飲み屋だが、実際に酒などは置いていなかった。この銘酒店で働く女性が「娼婦」で、遊郭では「公娼」だったものがここでは「私娼」と呼ばれた。「旧玉の井」のピークは荷風が歩いた昭和 10 年前後といわれており、私娼数も 2,000～3,000 人もいた。当然日本最大級の私娼窟だった。だから「玉の井」は私娼窟の代名詞にもなった。

実際に今日歩いてみると、すでに往年の建物はほとんどなくなり、どこにもある安造りの民家が雑然と建て込み、ドブは暗渠化されて狭い迷路だけが過去を偲ぶよすがになっている。そういえば、荷風は小説で、この街を「ラビラント」（迷宮）と呼び、また他の文では「陋巷迷路」と言っている。実際にも、道は狭く曲がりくねっていて、一旦中へ入ると東西南北の方向を見失うほどである。　　（2014 年 3 月 20 日）

東向島駅を降りて東武線沿いに 300m位歩くと「いろは通り」へ出る。右折すると変形 5 差路があって、すぐ先に交番がある。このいろは通りの南側が戦前の私娼窟だが戦災で焼けてしまった。北側が焼け残り、戦後に赤線地帯になった。

26　向島百花園

向島と言えば昔から百花園が有名である。江戸時代中期から骨董商人の別荘としてつくられ、当初は亀戸にあった梅屋敷に倣って、たくさんの梅を植えて「新梅屋敷・「花やしき」と呼ばれた。やがて文人墨客がしばしば訪れるようになって、いつのまにか「百花園」と呼ばれた。早いころからそこに出入りした人に大田南畝（蜀山人）らがいて、秋の七草などの野草や池や石碑が順次整備されて、有名な花どころになった。しかし明治以降は手入れも不行き届きになり、洪水で園内も荒廃した。その後 1939 年に東京市へ譲渡され、再整備されていまの姿になったという。

向島百花園は、文化文政時代に骨董業をしていた佐藤某が作った庭園。江戸の庭園は大名庭園が主流だが、ここは交友があった文人墨客の協力で作られたので、庶民的で文人趣味に富んだ庭園である。中央にある池の右側に萩のトンネルがある。池の先にスカイツリーが大きく顔を出しているのに驚いた。

永井荷風はその著「百花園」で、明治 43 年の洪水で百花園が荒廃した様を悲しい目で叙述している。昔から江戸に住む文人は、遠来の友があればまず向島の百花園で遊ぶのが常だった。老人には新聞に様々な事件が並んでいてもほとんど痛痒を感じない、老人には新規なものより、新聞の下に書かれている赤穂義士伝の方が心安く思い、ついつい行を追って読んでしまうものである。そのストーリーはとっくに熟知しているが、それでもなお赤穂義士伝の方が老人にはいい。それと同じように、向島へ来れば百花園で休むのが一般の習わしだった、といって百花園を懐かしんでいる。

江戸時代にこの百花園でしっかり遊び、世に名前を知らしめた一人が大田南畝である。彼は江戸中期の人で、本業は勘定所の支配勘定まで出世した幕府の役人だが、天明狂歌を代表する狂歌師でもあった。狂歌は和歌の一種で、和歌が長い伝統をもち優雅さを特徴にするのに対して、狂歌は、滑稽、可笑しさ、洒落を特徴とする。狂歌は当意即妙に発する滑稽なジョークのような言葉遊びの一種である。磊落にふるまって、気が利いた言葉で冗談をいって周りの空気を解きほぐすような歌を指している。

狂歌が社会全体を巻き込む大きな潮流になったのは天明時代で、1783 年（天明 3 年）に唐衣橘州が「狂言和歌集」、大田南畝が「万歳狂歌集」を出版したのがきっかけだった。狂歌は日本語による言葉遊びだったので、漢詩などの素養もなしに大勢でワイワイいやる方が楽しく遊べた。だから大田南畝（通称は直次郎、号は蜀山人、杏花園、四方山人、狂詩名は四方赤良、寝惚先生と名乗った）の下には町人だけでなく小大名まで集まった。

狂歌の事例

① **ひとつとりふたつとりては焼いて食ふ　鶉なくなる深草の里**　　四方赤良

一羽とり二羽とりして、焼き鳥にして食べていると、いつの間にか深草の里から鶉（うずら）が一羽もいなくなってしまったことだよ、という狂歌である。この歌の本歌は次のものである。

「夕されば野辺の秋風身にしみて　うずらなくなり深草の里」（藤原俊成）

こちらは物寂しげな秋の風情が、読むものを感傷的な気分にさせてくれるが、これをパロディー化したのが、四方赤良の狂歌である。下の句は、同じであるが、上の句をデフォルメすることで、読むものの意表をつく滑稽な歌に変換している。

② **雪ならばいくら酒手をねだられん　花の吹雪の志賀の山駕**　　馬場金埒

吹雪のように花の散る志賀の山道を山駕籠で越えながら思う。「この花がもし雪だったなら、一体どれくらいチップをねだられることか。花吹雪でよかった」この狂歌の本歌は、

「雪ならばいくたび袖を払はまし花の吹雪の志賀の山越」

美しい見事なまでの桜吹雪が浮かんでくる作品であるが、金埒はたった 12 文字かえただけで、その内容を風雅の世界から懐勘定の俗世間へと急転させてしまっている。そのもじり方がなんとも

巧みで、内容もおかしく、さらには風流人への皮肉や、金でまわっている世俗のありさまをもそこに含有し、よみとらせている。狂歌師の言葉遊びを体現したような作品であり、何度読んでもイメージが膨らむ、あきのこない一首である。

③　**世の中はいつも月夜に米のめし　さてまた申し金のほしさよ　　四方赤良**

世の中は、いつも月夜を楽しむことができるし、米の飯も毎日食べる事ができて、格別不足はないのだが、あえて言うなら、やっぱりお金が欲しいなあ。お天道様と米の飯はついて廻る、食って通れば御の字だという楽観的な主義に、いま現在と共通するものが感じられる。また、庶民的な主張に加えて、お金があればそれにこしたことはない、という凡人の情も反映されている。これは男女間、世代間でも共通の情で、ユーモラスに詠んでいる。

南畝の人生のハイライトは天明期がピークで、この時期に南畝は向島百花園で何度も遊んだ。彼らの遊び方はすさまじく贅沢なもので、ここに連泊して、朝から夜中まで酒と芸者遊びを交えながら狂歌づくりをした。その時のスポンサーは後に巨額の公金横領で死罪になった土山宗次郎だった。狂歌が流行った時期は田沼時代で、松平定信も時代へ変わってから南畝はピタリと狂歌を止めた。その後も、南畝には何度も興言利口（きょうげんりこう。即興の巧みな言葉のこと）の役割が求められたが、二度と狂歌師に戻らなかった。
田沼時代が終わり松平定信の寛政の時代へ変わった時に、次のような狂歌が流行った。

○　まごの手がかゆいところに届きかね　足の裏までかきさがすなり
○　白川の清き流れに魚住まず　濁れる田沼いまは恋しき
○　世の中にかほどうるさきものはなし　ぶんぶぶんぶといひて夜も寝られず

特に最後の句はよくできた句だったので、大田南畝以外にできる人はいないといって幕府側から強く疑われたが、謹慎して身の保全を図っていた南畝は強く否定した。幸いにも南畝は無事に言い逃れてこれ以上の追及を受けなかった。その後、狂歌づくりを止めた南畝は、「学問吟味」という幕府内の昇任試験に応募し、2回目で合格して遅まきながら出世の階段を上り始めた。

大田南畝は、田沼時代というバブリーな時代に生きて百花園を舞台に狂歌という新しい表現方式を生み出した男である。その彼が、田沼が失脚して松平による寛政の時代になると、いち早くそれまでの仮面を脱ぎ捨てて、新しい仮面に取り換えて、幕府官僚として後半生を過ごしたという話になるのだが、とても多くの教訓を含んでいるように思われる。

（2014年3月20日）

27 向島の桜

最近永井荷風にはまっている。「断腸亭日乗」という日記が面白い。波乱万丈の生涯である。若いころは日本郵船に勤務した父の力で欧米で遊び、フランスから帰国後、「あめりか物語」「ふらんす物語」などで新進作家となった。1911 年に慶大文学部教授に就任し、6 年間務める。その間に 2 度結婚し、いずれも失敗し、以降独身生活を送る。1926 年（47 歳）ころから銀座のカフェー、浅草の芸人、玉の井の私娼街へ出かけるようになる。戦後は特別な活躍はなかったが、1952 年（73 歳）で文化勲章を受章し、1959 年（80 歳）で死去。

この人は早くから老成し、37 歳の時には、余命いくばくもなきを知り死後について心を弄すること少なからずと言って、身辺整理、墓碑準備などの老人計画を進めた。また彼はエリートだった父に相当な劣等感を持っていたようで、1913 年（34 歳）の時に父が死ぬと、余丁町の家を整理し、大量の書画骨董も何もかも売り払う。その時荷風は、「ああ幾たびかこの旧宅をわが終焉の地と思い定めしが、ついに長くとどまることあたわず、悲しむべきことなり」と言いいながら、麻布市兵衛町の偏奇館へ引越した。

「日乗」を読んでいると、荷風はこの時もそうなのだが、生涯にわたって、自分が帰属する場所が見つからないでうろうろしている「根無し草」のような荷風があちこちに見える。

＊　　＊　　＊

永井荷風の随筆に「向島」という小論がある（S2 年）

「江戸時代から向島の桜はつとに有名で、人々の人気を得てきたが、関東大震災後はすっかり荒れ果てて、「雅遊の地」ではなくなった。そういえば、アサヒビールの庭園も浅草花川戸もことごとく西洋式公園に改造されて、昔の風雅はすっかりなくなった。

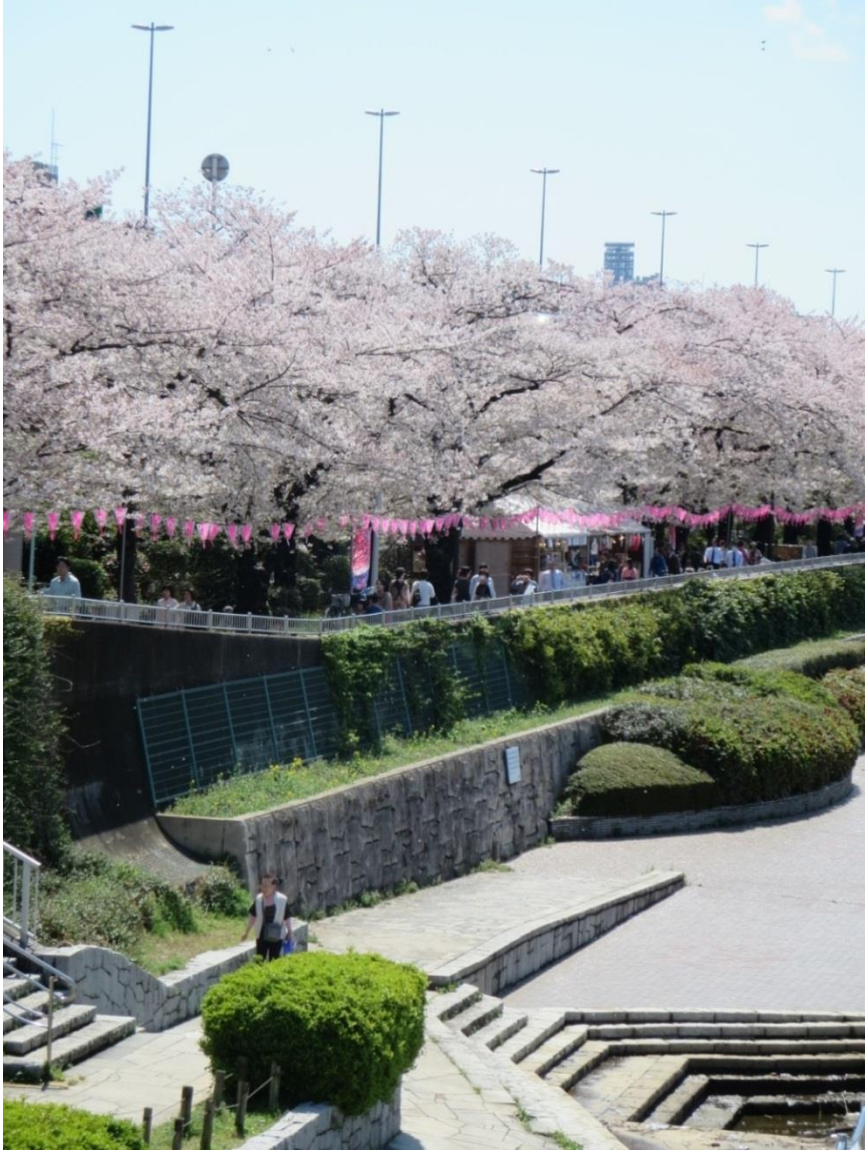
向島にはM31～32 年ころまでは枕橋から梅若塚辺りまで隙間なく桜があって花時の盛観さは江戸時代以上だった。そこに立っている石碑の文字は中国のそれにひけを取らないほど立派である。それに対して公園に立つ西洋彫刻がいかにも貧困である。

それにつけても我が国の文化に今も昔も外国文化の真似が多い。昔は中国、今は西洋である。それでも昔と今では文化の咀嚼と模倣の精神において違いがある。昔の中国文化の吸収は真率で中国文化を咀嚼玩味して自己薬籠中のものにしたが、今の西洋文化の吸

収は軽薄で徒らに奇をてらうだけで、ゆっくり咀嚼し味わう余裕もないように見える。」

この評論は、江戸文化における中国模倣が今の西洋模倣に比べて優劣なしと言える人がどこにいるだろうか、と問いかけて終わる。

荷風は日常生活でも「墓歩き」という展墓趣味があった。この遊びは江戸時代からあっただが、実利主義の英米にはない遊びである。関東大震災で古い江戸の情緒を失った東京で、意識的に墓歩きをすることで、自らを江戸の文人になぞらえてみて、失われた江戸とつながろうとしていたのかもしれない。



向島の桜。今でも花の時には、向島芸者衆が花の下で接待をする光景が見られる。

（2014 年 4 月 4 日）

28 伝研

日比谷通りの御成門交差点のパナソニック本館ビルの一角に「伝染病研究所発祥の地」碑があった。今は家電不況のせいでパナソニック社も資産整理をしていて、この本館ビルも、とうとう住友不動産に売却されて大規模な再開発が進んでいる。このあたりはこれまで松下東京村と呼ばれたほどパナソニンクとその関連会社があちこちのビルを独占してきたが、いまは様変わりしている。このため「碑」も仮移転中かどうかわからないが、今はない。

ここは、M25 年（1892 年）11 月 19 日、破傷風菌を発見してドイツ留学から帰国した北里柴三郎を所長にして、日本における伝染病研究の拠点になった研究所（「伝研」という。）が開設された場所である。

伝研はその後港区愛宕町へ移転するが、この研究所で、北里はペスト菌発見、破傷風菌の純粋培養、ジフテリアの血清開発を行うなど多くの学術的功績を生んだ。その後も伝研は期待通りの発展を遂げ、M32 年に施設を国へ寄付して、内務省所管の施設になった。M39 年港区白金台へ再度移転。

T3 年伝研が内務省から文部省へ所管替えされると、これに怒った北里は所長を辞任し、私立の北里研究所を新設した。所員の大半が北里と行動を共にした。T6 年慶応大学が医学部新設を計画すると、北里は伝研を挙げて協力すると申し出た。実際に新宿区品濃町に慶應医学部が発足するのはそれから 3 年後のT9 年だが、協力を申し出た北里はかっての

恩人福沢に報いようとする態度で、その後も新設の医学部の初代医学部長に就任して協力をし続けた。

こうした北里の伝記は「北里柴三郎」（山崎光男、中公文庫）で詳しいが、ここでは、北里の伝研設立とそれに対する福沢諭吉の支援ぶりを見ることにする。

北里は、帝大医学部を卒業し内務省勤務の後、M18 年（1885 年）～M25 年（1892 年）までドイツへ留学し、ベルリン大学で細菌学の最高権威だったローベルト・コッホに師事した。その間に彼は破傷風菌の純粋培養に成功、免疫体を発見して血清療法を確立した。当時医学界は、病原菌発見レースの最盛期で、北里の発見は今風にいうとノーベル賞ものの大発見だった。

M25 年（1892 年）帰国すると、当時の日本の医学界は彼をみんなでイジメた。その原因は、北里が帝大の先輩の緒方正規の「脚気菌発見」説を国際的な学会誌で批判したことによる。その後の研究で脚気は伝染病でなく、ビタミンＢ１不足によることが明らかになり、北里の指摘が正しかったことが証明された。しかし、日本の医学界では、北里が権威ある学会誌で公然と先輩の研究を批判したこと、その緒方が北里をコッホ研究室へ紹介してくれた人で恩義ある人を批判したのがその理由だった。そのイジメ方もひどかった。帝大学長の加藤弘之が北里を子弟の道を解さざる者といい、森林太郎（森鴎外）も情を忘れた人といい、帝大一派が北里イジメを行った。帰国後のポスト外し、ノーベル医学賞の推薦外し、ペスト菌発見祝賀パーテイへのメンバー外し、伝染病研究所への非協力などである。

孤立した北里に手を差し伸べたのが慶應義塾の福沢諭吉だった。M25 年、福沢は芝公園に所有していた土地を無償で提供し、建設費用の資金援助のために森村市左衛門を紹介して、北里の私立の伝染病研究所設立を支援した。翌年には福沢がもっていた広尾の土地に結核専門病院「土筆ケ丘養生園」（つくしがおかようじょうえん）を開設した。**（この養生園の代替え地として取得した土地が、後に伝研が文部省へ所管替えされたことに反対して辞職し、白金に作った「北里研究所」（のちの北里大学）の場所である。）**

現代のイジメは、マスコミによれば子供たちが学校の教室で受けるものが注目されているが、実際には会社でもサークルでも公園デビューでも、要するに何人かの人が集まれば必ずといっていいほど発生しており、イジメは形を変えながら蔓延している。北里柴三郎の例を見ると、明治時代には学閥のレベルでイジメがあったことが判る。当時のことだから、帝大と文部省が一緒になって、私立の研究所や学校をバカにして潰そうとしたとみる方が正しいかもしれない。　（2014 年 4 月 4 日）

29 忠臣蔵

今年の初めから忠臣蔵論に取り組んでいる。「仮名手本忠臣蔵」という文楽をＤＶＤでみて、私がこれまで知っていた赤穂事件の物語と全く違う世界が展開されていたこと、特に単に忠臣義士による討ち入りというよりもお軽勘平の男女愛や加古川本蔵の家族愛の物語が中心になっていて感動したのだ。しかし今回は、男女や家族の愛憎話はヨコに置いて、「吉良の首」の話を紹介する。

赤穂事件は、1701 年 3 月浅野内匠頭という赤穂城の殿様が江戸城でにん傷に及び、その 1 年半後の 1702 年 12 月に赤穂浪士が吉良の殿様の屋敷へ討ち入りし、翌 1703 年 2 月に 46 名の浪士たちが切腹するまでの一連の事件である。これは 2 年間の間に起承転結が整った日本の史上最大の仇討事件だったが、事件の直後はあまり評判にならなかった。

ところが、事件がおわって 45 年後に浄瑠璃や歌舞伎で演じられるようになると、大評判になった。江戸時代のことで御政道批判は許されないから、芝居は南北朝時代に鎌倉で起きた事件として脚色された。大きなストーリーは忠臣義士による仇討話だが、観客を感動させるための数々の仕掛けがあって面白い。そんな事情もあって、芝居と史実の間に大きな距離が生まれて、史実がだんだん不確かなものになってきた。

泉岳寺の赤穂浪士のお墓はいつ行っても線香が絶えず、人気の高さを感じる。

赤穂事件が文楽や歌舞伎の「忠臣蔵」でよく知られるようになると、赤穂事件そのものが様々に脚色されて、史実がだんだん薄れて不確かなものになっていった。
たとえば、今尾哲也氏（玉川大学）は、①首の数②遺体の状況③首なし死体の状況④凱旋時の状況⑤墓前の行動⑥首は侮辱されたか⑦瑤泉院の行動⑧首の行方などについて興味深い言及をしている。この論文から事件がどう変容していったかを窺うことができる。

浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の元になったとされる「碁盤太平記」（近松門左衛門）では本首と偽首の 2 級あったと書かれている。また忠臣蔵のイメージを固めたとされる「忠臣金短冊」（並木宗輔）では横山郡司のほかに小栗判官を抱きとめた土川兵庫も首をはねられて、2 級あったとされている。さらに浪士たちの凱旋行列を見たという人々からは白小袖に包まれた首が 3 級あったというのもある。史実では浪士たちは確かに吉良本人の首を討ち取った。しかし後に書かれた戯曲や風説では、吉良本人だけでなくほかにも撃ち落した首
があった、その首数も 2 級だった、3 級だったと話が違っている。ここから果して浪士が撃ち落した首はいくつだったか、という面白い疑問が生じてくる。

大石が「打込」（討入のこと）を目前にして滞在していた川崎の平間村から同志に次のような書付を送った。

「1　志之相手ハ、卜一、佐之助ニ候得者、同志何れも右両人ニ目を付、外を構不レ申候はゝ、本人紛、討ちもらし候事も可レ有レ候間、打込み候はゝ、男女之無レ差別一人も不洩様ニ、何も心掛け専要ニ存候
1　敵之印揚候者、首尾次第、その骸之上着をはき、包候而、持参可申事
1　御検分之方有之候節、挨拶之事、此印は亡主之墓前へ持参仕度存念ニ御座候・・・」

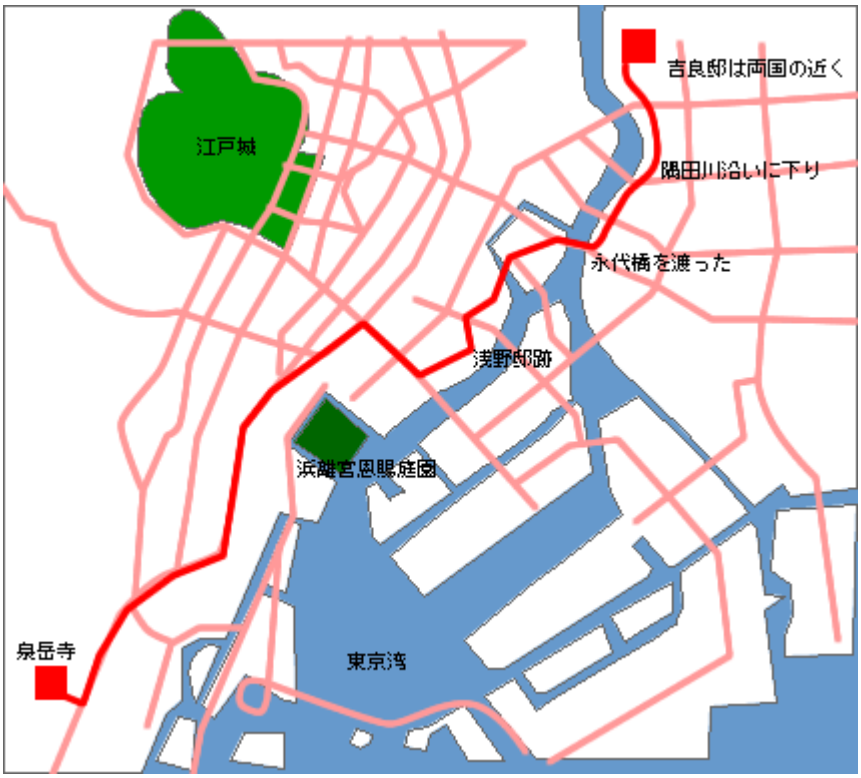
「卜一は上野介の「上」を分解した符号で、吉良義央を指す。「佐之助」とは吉良の養子佐平衛義周を指す。この書付は吉良父子を討って首級を上げた時は、吉良義央の首のみ着衣に包んで泉岳寺へ運び、浅野内匠頭長矩の墓前に供える、という指示をしている。実際の討入もほぼこの通りに進んだ。討入の目標は吉良上野介（義央）ただ一人である。義周は義央を討ち漏らした時の代替え目標だった。ところが風説では、その「義央オア義周」がいつの間にか「義央アンド義周」に代わっている。史実上は、吉良屋敷の惨状の報告で、次の通り、首なし死体は一体だけだったことが判っている。実際に義周は首取りどころか、殺されもしなかった。義周は、やがて遠流の判決を受けて領地を召しあげられて信州高遠へ流され、3 年後に死去した。

上野介の遺体についても史実と違う風説が生まれた。遺体の検視記録がある。

1　首なし、躰斗有之、
1　両之手之内に１所宛、
1　膝頭右之方に２ヶ所、
1　左之股に１ヶ所、こむらに１ヶ所、右之通有之、
1　上野介刀、無銘、

脇差は見へ不申候由、吉良家来斉藤宮内岩瀬舎人左右田孫平衛、実検之衆中申達す。

義央の体には５か所の傷があった。喉に加えた止め（とどめ）の一太刀は首を掻き落としたために遺体に残らなかったといわれる。風説では内蔵助が一太刀浴びせたとか、46 人一人一人が交代で一太刀浴びせたなどの話が加えられている。浪士が凱旋して引き上げる様子を見た人々の目撃談も首の数を増やす要因になった。



上図は、討入後の浪士たちの凱旋ルート図である。12 月 14 日午前３時半頃に討入り、戦いは２時間ほどで終わった。午前５時半頃、浪士たちは回向院への立入りを拒まれる。そこで回向院の門前で、吉良家や吉良の親戚である上杉家の追手を待ちうけるうちに夜明け

を迎えた。しかし追手の気配がないので、彼らは通行人が多い両国橋を避けて船で泉岳寺まで行こうとした。しかし、船が借りられず、朝日に照らされた雪道を歩いた。泉岳寺に到着したのは午前7時〜8時頃だった。

浪士たちは返り血を浴びた着物で、手には袖印の布で包んだ槍や刀をもって行進した。その間、追手が来て戦いになるかもしれないし、義央の首を取り戻しに来るかもしれない、その時は偽首も必要ではないか、と浪士たちは強く警戒していた。またその行進を見た人々は、それが赤穂浪士とは分からず、武器を手にした凶悪者集団のように見えたのだろう。人々は恐怖して逃げ出した。目撃者たちの冷静さを欠いた精神状態の下で、白い布包みが幾つあったかの判断は当然のことながら分かれている。首2，3級という目撃譚は、単に数の問題でなく、次いで首の内訳や浪士たちが首を取った理由を知りその意図を踏まえた尾ひれが付けられて広まったと思われる。

義士たちにとってみれば、亡君の敵は吉良上野介ただ一人だった。その吉良を討ち損じた場合の代替目標に吉良の養子・義(よし)周(ちか)の首も計画していたかもしれないが、実際には、義周は討入の際に怪我はしたが殺されていないので、多分首は一つだったのだろう。ただ、義周は討入では命は助かったものの、不幸な運命になる。その後、「仕方不届き」により諏訪屋敷へ預けられて信州高遠へ遠流になる。3年後病死し、死後も遺体は塩漬けにされて見聞の上埋められた、という。

また、討ち取られた上野介の首の行方について、義士たちは何はともあれ泉岳寺へ持参して浅野家の御墓所へ備えることが使命だった。泉岳寺の門前に到着すると義士たちは真直ぐ墓所へ向かった。義士たちが先に入り、見物人も次第に集まり出したので、寺側では門を閉めて義士たちが礼拝する間、読経した。墓前での手向けが終わった後、庫裡から重箱の外箱を取寄せてその首を納めて、終日衆寮に置いた、と言う（「白明話録」）。

この時の墓前の行動もまた様々に潤色されている。首を三方の上に置いて備えた、大石が祭文を上げて浅野の遺品の匕首を首に三度当てて首を掻く仕草をした、首を墓前に備えた後、取り出して踏み散し小刀などで突き散らした、さらに浅野の奥方瑤泉院が首検分のために寺へ駆けつけたという話まで作られた。その後吉良の首は、吉良屋敷へ送り返され、遺体に次ぎ合わされて、18日夜、吉良の菩提所の万昌院に葬られた。

（2014年4月5日）

30　板橋宿～近藤勇の終焉の地

天気が良かったので板橋宿へ行った。横浜から板橋へ行くのは遠いと思っていたが、実際には結構早く行けたし、近かった。京急電車に直結する浅草線の三田駅で「三田線」へ乗り換えれば、一直線で「板橋区役所前」へ到着する。所要時間は約 60 分だった。

江戸四宿の一つで、中山道第一番目の宿場。細長い宿場で、南から、平尾宿、中宿、上宿の三宿で構成されていた。川越街道は今ではその位置も形も違うが、昔は平尾追分で分岐していた。中山道は上越、信越、北陸方面の玄関だったことに加えて、京都へつながる道だったので、川止めを嫌う女性や荷物の多い旅人がよく利用した。

板橋宿へ入る手前の平尾一里塚のそばに「板橋刑場」があったという。今はその場所がはっきり明示されているわけではないが、そこに近藤勇が処刑された場所を顕彰する碑があるので、おおよそこのあたりだったろうという推定はできる。それにしても調布出身で、京都で活躍した幕末の大物だった近藤勇がどうしてここにいるのだろうか？と不審だった。

蛇足ながら、区役所の説明書きから話題を一つ。明治になって、東海道本線と東北本線を結ぶために、品川～赤羽間の連絡線ができて板橋駅が設置された。その後、山手線や池袋～田端間の連絡線ができたために、この線路は一気にローカル線になって、路線名も赤羽線、埼京線と名前を変えたと言う。

幕末に結成された「新撰組」は、幕府の京都守護職の別働隊で、勤王派の志士たちを震え上がらせた。新撰組は、文久 3 年（1863 年）清河八郎が主導して、自ら属していた近藤道場の門弟を中心に結成したものだ。その中には同門の近藤勇や芹沢鴨らがいた。

新撰組の歴史は、まず創設者の清河八郎から始まる。彼は山形県庄内町の郷士・斉藤豪寿の子で、北辰一刀流の免許皆伝で、かつ昌平黌にも学んだ文武両道の人。早い頃から不平等条約を締結した幕府の政治に反対し、自ら「回天の先駆け」（回天とは天地をひっくり返すこと。植民地化を目指す外国勢を追い払い、幕府を倒して朝廷をトップにおくことを意味した。）となると言って全国を遊説して歩いた勤王の志士である。万延元年（1860 年）の桜田門外の変を機に、清河塾の有志で横浜居留地焼き討ちや薩摩藩に倒幕の勅令を出すよう画策するが失敗する。次いで、「急務三策」（攘夷実行、大赦発令、英才教育）を幕府に提案し、併せて京都の治安回復と徳川家茂の身辺警護のため「浪士組」の派遣を建策した。この建策が採用されて、文久 3 年（1863 年）2 月 23 日、徳川家茂の上洛に合わせて、清河が盟主になって浪士組も京都へ出発した。これが新撰組創設の日である。

上洛直後、清河が真の目的は尊王攘夷だと方針転換する。そこで浪士組は分裂した。芹沢、近藤、土方らは攘夷反対、佐幕派に徹して京都へ残るとして「新撰組」を結成した。新選組も間もなく内部分裂し、近藤派が芹沢派を粛清して、近藤勇局長、土方歳三副局長とする新体制になった。これが今も残る新撰組で、池田屋騒動などで以降約 5 年間活躍した。

5 年後の慶応 4 年（1868 年）1 月 3 日、鳥羽伏見の戦いが起きると、新撰組も幕府軍として参戦。しかし幕府軍が敗北したため大阪へ敗走し、その後徳川慶喜とともに海路で江戸へ落ち延びた。江戸へ戻ると、新撰組は「甲陽鎮撫隊」と改称、近藤勇も大久保剛と改名して、東山道（とうさんどう）を東進する官軍から甲府城を防衛する任務に従事する。出発するとすでに甲府城は官軍に平定されていて、3 月 6 日に手前の勝沼で交戦となるが、敗退。近藤は江戸へ戻るが、再度大久保大和と改名して、奥州へ行く予定で下総流山へ行く。流山へ駐屯して間もなくの 4 月 2 日、駐屯地が官軍に包囲されて、逮捕された。

流山で逮捕された近藤勇は、官軍東山道軍の総督府がおかれていた「板橋」へ移送された。土佐藩では坂本竜馬や中岡慎太郎暗殺の犯人は新撰組の近藤勇と考えていた。4 月 25 日近藤勇は板橋刑場で斬首された。その後首は京都へ送られて三条河原でさらし首になった。

近藤勇という人は今でも多くの日本人から慕われている。調布の農民出身だが、剣道に優れ、近藤道場の養子になって侍身分を得て、さらに新撰組の活躍で幕府直参の旗本になっ

た人である。この農民の立身出世話が好まれるのだろうか。それとも、池田屋騒動などの幕末の京都で活躍した傍若無人ぶりが好かれるのだろうか。そうではない。鳥羽伏見の戦い以降も落ち目の幕府に連れ添った。朝廷に恭順することを決めた幕府にとって、やがて勤王の志士を大勢倒してきた新撰組が邪魔な存在と化し、新撰組は体よく江戸を追い払われたのだが、近藤勇たちはそのことに反発もせず粛々と従った姿に、人々は深く感動しているように思われる。

明治維新は多くの志士たちによって達成された革命だった。「勝てば官軍、負ければ賊軍」の風潮が強い時代だったから、志士は勤王の人々を指すのに使われてきた。しかしこの板橋宿で処刑された近藤勇の墓にたってみると、これまで私たちは国のために使命感を持って身を捧げた人を志士と呼んできたのだから、反革命側だったが、近藤勇もまた幕末の志士の一人だったと改めて思う。

（2014 年 4 月 5 日）

横 1『天国と地獄』の舞台

横浜を取り上げるに当たってどこから初めようか考えたところ、国際都市横浜を象徴する街ということになれば、横浜港か「天国と地獄」の舞台になった街をおいて他にはないと思った。

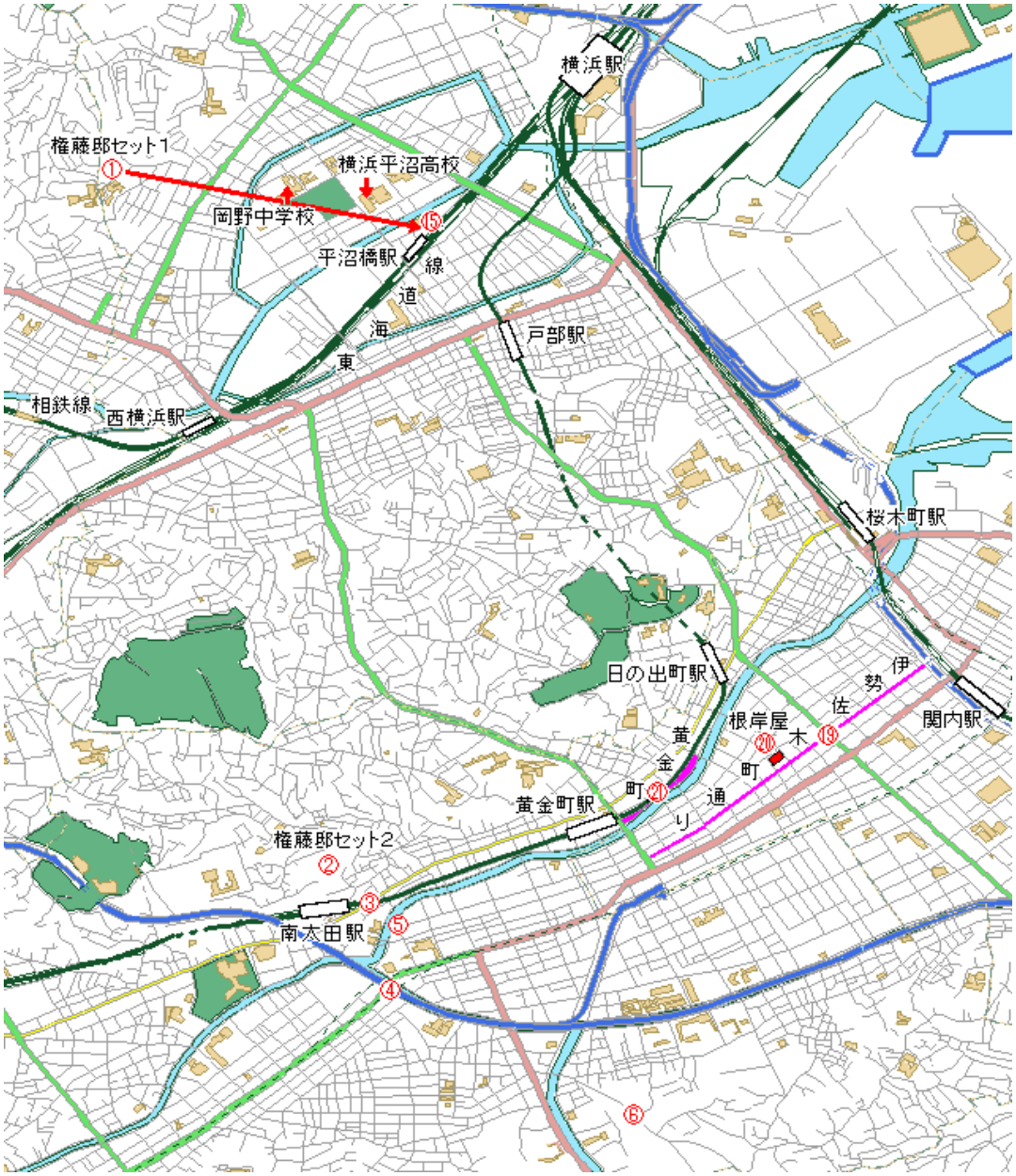
「天国と地獄」の舞台はＳ30 年代初めの横浜である。30 年代初めというと、日本が敗戦の荒廃から朝鮮戦争で米軍の膨大な戦争特需で奇跡的な経済復興を遂げた時期だ。しかし、終戦直後からＳ27 年をピークに、横浜では港湾施設の 90%、中心にある中区では区域の 35%が米軍に接収されており、サンフランシスコ条約締結でその年から接収地返還が始まったばかりだった。だから、30 年代初頭、大阪や神戸ではいち早く戦災復興が本格化したが、横浜では至る所に駐留軍がいて復興には手が付けられず、伊勢佐木町界隈の歓楽街が繁栄する一方で、戦災後のバラック住宅が並んだ町だった。

黒沢は映画を作る前に場所をどこにするかで各地を回ったという。黒沢映画では、舞台選びは重要な要素で、都築政昭氏の「黒沢明と『天国と地獄』」によれば、函館、長崎、神戸、横浜を見て歩いた。その中から、国際都市で黄金町という麻薬街もある。しかも横浜駅の西にある浅間台の丘からは市街が一望でき、その先に外国船が浮かぶ港も見える陰のある国際都市ということから、横浜に決まったという。

よく横浜は日本でも有数なハイカラな街だといわれる。それは 150 年前の日本の開国がこの街から始まり、長い間日本近代化の窓口だったことによると考える人が多い。しかしそれだけでなく、横浜が、港を中心にして長い間米軍による接収が続いた街だったことも大きく影響しているだろう。米軍の中枢機能が横浜にあって、大規模に接収された横浜が米軍基地の一部だったのだ。長期かつ大規模だった米軍による接収は、横浜の都市づくりを大幅に遅らせたが、他方で、長い間多くの外国人が住み、外国の流行や風俗がいち早く登場する街になり、米軍がらみの歓楽街が繁栄して麻薬の流行も長引いた。
少なくとも「天国と地獄」では、横浜が他の街と違って、敗戦とそれに続いた米軍の駐留により戦後の荒廃が遅くまで色濃く残された街として描かれたのである。

三か所に作られた権藤邸

「黒沢明夢のあしあと」（黒沢明研究会、共同通信社）によれば、映画の権藤邸は 3 つセットがあった。①高台から街を見下ろす権藤邸で、横浜の西区浅間台の丘の上に作られた。②貧民街から見上げる権藤邸で、横浜の南区南太田の常照時の裏山に作られた。③権藤邸内の応接室で、撮影所のセット内に作られた。ここではセットは別にして、①と②をみてみる。



（東京紅団「天国と地獄」の横浜を歩く」から借用）

① 街を見下ろす権藤邸は、横浜市西区浅間台の丘の上に建てられた。

旧東海道を保土ヶ谷へ向けて歩き、並行する環状一号線の霜下橋入口の次の信号を右に曲がるとＳ字型の坂になって丘の上へ行く。その丘の白い建物が浅間台小学校で、権藤邸はその右隣に建てられた。横浜駅から西へ直線で約 1.5ｋｍ離れ、旧東海道に面した崖の上になる。垂直な崖で落差は 20m位ありそうだ。

今ここから見る今の景色は、映画とはすっかり変わっている。目印は横浜駅西口の高島屋デパートの広告塔だ。位置は同じだが、広告塔は変わっている。映画ではその奥に横浜港が見えたが、今は見えない。写真ではその広告塔の右後ろにベイブリッジの主塔がみえる。そこが港の一部なのだが、港本体はビルの陰に隠れてしまった。このように景色は変わったが、街を見下ろすロケーションは変わっていない。

街を見下ろす権藤邸は、横浜市西区浅間台の丘の上に建てられた。

② 見上げる権藤邸は、南区南太田の丘の上に建てられた。

ここは京急南太田駅北側の常照寺の裏山である。その山頂に見上げられる権藤邸があったが、今では鐘撞堂と仏塔が立っている。下の写真は大岡川から山頂を見たもの。真ん中の高架橋は京急電車で、左へ行くと南太田駅である。手前の大岡川は護岸が整備されて昔の面影はもうないが、豪華な権藤邸を貧民街から見上げた雰囲気は伝わると思う。確かに浅間台から市街が一望できるが、夜には車のライトや街の灯は届かない。そこで

実際のロケではミニカーや無数の豆電球を使って撮影したという（都築政昭「黒沢明と「天国と地獄」」。街の音も同様で、電話が終わったのち権藤が窓を開けると、横浜の風が雑踏音と一緒に室内に入ってきてみんなをホッとさせる。その時に港で船が出す甲高い音が混ざって心地よかった。

見上げる権藤邸は、南区南太田の丘の上に建てられた。

麻薬街の黄金町

犯人のインターン生がヘロインを入手するために行ったのが、京急黄金町駅から横浜方向へ戻った京急ガード下の青線だ。大岡川と平戸桜木道路で挟まれたそのエリアは、正体不明な飲み屋や宿が所狭しと並んでいた。

もともと横浜には、南区真金町と永楽町を併せた「永真遊郭街」があり、Ｓ33 年の売春禁止法施行時までは横浜を代表する赤線地帯だった。大通公園に隣接し、中央にグリーンベルトをもつ広い道路に囲まれた碁盤の目のエリアで大鷲神社（おおとりじんじゃ）を擁している。赤線廃止後は、以前からの青線地帯だった黄金町や福富町が主役となって、今日では 4，5 軒のラブホがある程度で、すっかり下町の住宅街と化している。

その黄金町は初音町と一体となって、単に非公認の売春地帯に止まらず、戦後は、港町横浜で流行ったヒロポンや麻薬の密売の巣窟だった。Ｓ20 年代には麻薬の密売組織の縄張り争いが頻発し、危険なために警察官の巡回もできなかったといわれている。この無法地帯は売春禁止法施行後も事実上放置され続けた。

しかし、2005 年 4 月、神奈川県警は、横浜市や地元商店会と連携して 4 年後に迫った横浜開港 150 周年までに一掃するということで重い腰を上げた。それまで麻薬と一体になった青線が放置されていたことが不思議なことなのだが、いずれにせよその結果、黄金町の青線は消えた。それよりも 10 年も前にはその京急線に接する大岡川もどぶ川だったが、水はすっかり浄化されて、護岸は大岡川プロムナードという桜並木に変貌している。

神奈川県警が「バイバイ作戦」と名付けた強烈な環境浄化事業で、黄金町から フーゾクも「ちょんの間」も消えて、そして誰もいなくなった。

（2013 年 1 月 5 日）

横 2　鶴見騒擾事件（そうじょうじけん）

今から 100 年前の大正 14 年（1925 年）の暮れ、鶴見の埋立地でやくざ同士の派手なけんかがあった。やくざと言ってもチンピラ同士のケンカでなく、土建業者と建築業者のいわば業界同士のケンカで、大砲まで持ち出したので騒擾罪（そうじょうざい、今の騒乱罪）が適用された大事件になった。

面白いことに、455 名が逮捕されて 212 名が起訴されたが、裁判の結果全員無罪になった。さらに面白いことは、この事件はほとんど世に知られないように操作され、この事件を取り上げたドキュメンタリー風の青山光二氏の「戦いの構図」（新潮社、1979 年）という本も出版直後から本屋に出回ることもなかった。

鶴見火力発電跡の碑。この発電所は、名古屋系の東邦電力の子会社東力（東京電力（とうきょうでんりき）。今の東京電力とは別の会社）が建設した。当初は東京火力発電所と呼んだが、S4 年鶴見火力発電所に改称。その後老朽化が進んで、S59 年廃止された。その跡地は大川町産業団地に再整備され、隣接する公園に石碑が残されている。

T14 年（1925 年）12 月 21 日、今の横浜鶴見白石町の東力・鶴見火力発電所の建設をめぐり建設業者が縄張り争いで総勢 1,400 名のヤクザが激突して 15 時から 21 時半ころまで市街戦を繰り広げた。死傷者 114 名。これに騒擾罪（後の騒乱罪）が適用されて、逮捕者 455 名にのぼった。

この争いは、東京電力（とうきょうでんりき）（今の東京電力とは別、通商「東力（とうりき）」。今の東京電力は当時東京電燈と呼ばれており、東力は名古屋を基盤にしていたが京浜工業地帯への電力供給を計画した）が火力発電所建設にあたり、土木工事（間組が受注）と建築工事（清水組が受注、のちの清水建設）を分離発注した。しかし、両者の出会い帳場が未調整だったことが争いのきっかけになった。間組は下請けに地元で隠然たる勢力を持つ土木業者の三谷秀組（みやひでくみ）を使い、清水組は東京池袋のとび業者の青山組を使うことにした。

さて、土木工事が完成して現場を清水組へ譲る段になって、三谷秀組は工事を独り占めしようとして公然と建設工事着手を妨害しだした。何度かの話し合いで三谷秀組の中田峰四郎は青山組の青山芳蔵と共同工事にするまで合意したが、なおも全部を請け負いたくて破格に高額な見積書を提出して、清水組と青山へ物別れの最後通告をした。ここに至って、劣勢だった青山芳蔵は地元の松尾嘉右衛門の協力を求めた。松尾は以前から横暴な三谷秀組へ反発があったので、要請を受諾し「青山・松尾連合」を結成した。

こうして、中田峯四郎率いる三谷秀組 VS 青山美代吉の青山組・松尾嘉右衛門の松尾連合の対決となった。三谷秀組は赤布、青山・松尾組は白布をつけてそれぞれの目印にし、その白組に大阪組と称する宇和島清蔵が率いる約 200 人の博徒が助っ人として参加した、他方の赤組に神奈川の博徒、横浜の土木、運送、港湾荷役の親分衆が助っ人になった。だからこの争いは、地元業者と東京業者のケンカであるとともに東西のやくざのケンカでもあった。また、このケンカでは様々な武器が使用された。その市街戦の様子は青山光二「戦いの構図」（1979 年、新潮社）に詳しいが、日本刀、仕込刀、短刀、ピストルのほか猟銃、自動小銃、ダイナマイト、大砲（鴨撃ち砲で旧式のアームストロング砲）まで持ち出された。ケンカの勝負は、当初には人数、ケンカ経験共に不利とみられていた青山松尾連合が、大砲をぶっ放して相手がひるんだすきに三谷秀事務所まで攻め込んで事務所を壊して看板を奪い取って終結した。

ケンカの原因になった東力・鶴見火力発電所は橘樹郡（たちばなぐん）田島大川町（現川崎区大川町）にあったが、騒擾事件の現場はそこから 2ｋｍ離れた鶴見町潮田で発生した。潮田は当事者の三谷秀組と松尾連合の事務所があったところである。

T14 年 12 月 21 日午後 3 時ころ、青山組応援のため横浜の工事現場から東京の中村組組長らが 3 台のタクシーで、本町通りへ入り、うち 1 台がそのまま三谷秀組事務所付近まで乗り付けた。三谷秀方ではスパイが来たと思い、日本刀で切り付けて暴力を加えた。2 人を捕虜にし、他の 3 人を戸板に乗せて青山組事務所へ届けた。

海岸電気鉄道路線図

この鉄道は、路面電車で、鶴見総持寺と川崎大師の間 9.7kmを結び（17 駅）、臨港地区の工場へ労働者を運ぶために建設された。T14 年（1925 年）に京浜電気鉄道（現・京浜急行の子会社）の全線開通。しかし、翌年 T15 年貨物専用線として営業を始めた鶴見臨港鉄道（現・JR 鶴見線）が S5 年（1930 年）も旅客営業を始めて、競合路線となった。後発の鶴見臨港線が専用軌道でスピードも速く輸送力が大きかったため徐々に客を奪われた。S12 年に産業道路拡幅により廃止された。それに代わってあとは川崎臨港バスが就航し、今日まで続いている。鶴見騒擾事件時には、まだ開通して間もない時期だったが、当日の夕方 5 時以降には戒厳令に準じる警察規制がかけられ、鉄道は停止した。

これを皮切りにして、青山松尾組と大坂連合軍が出動した。戦線は海岸電気軌道の線路に沿って芝浦製作所前停留所から旭硝子工場前までに形成された。線路の海側は浅野造船所敷地だが、造船所はずっと先の方にあってここは松がまだらに生えた原っぱで、ここから三谷秀方は銃を撃ちまくった。三谷秀には、当時陸軍が使用していたドイツ製モーゼル自動拳銃があって威力を発揮した。その援軍が鶴見川から船で駆けつける予定だったが、警

察の非常線に止められていた。しばらくこう着状態が続いたのち、突然、青山松尾組から大砲（旧式のアームストロング砲）が撃たれた。2 発目で三谷秀方は総崩れになった。青山松尾組は本町通りの産業道路交差点から三谷秀組事務所までの 30m区間が最後の小競り合いになった。

三谷秀方は本町通りの組の入口で畳や布団を盾にして戦ったが、青山松尾の突撃が始まると霧散飛翔した。三谷秀の事務所へ乱入した時には誰もいなかった。事務所を打ち壊して、看板を外して戦いは終わった。戦いは約 5 時間で終わった。

この事件には、次のような特徴がある。

（1）大正の電力戦争が生み出した事件

日本資本主義の急速な発展で、国内の電力産業も急成長した。明治期後半は産業需要が多くて電気は作れば売れた時代だったが、送電技術も未熟だったので電気は地産地消状態で、全国で 690 社が乱立した。それでも大正時代には 5 大電力会社が地域ブロックを支配するようになった。東京電燈（東京電力の前身）、東邦電力、大同電力、日本電力、宇治川電気である。発電能力が向上し送電技術が発展してくると、今度はこの 5 社がシェア争奪をめぐり「電力戦争」が起こった。近畿、中部をエリアにしていた東邦電力が関東の東京電燈にエリアに乱入する。対抗して東京電燈が名古屋へ進出すると、大阪の大同電力も東京進出した。進出すると、顧客の奪い合いが起こって電気料金のダンピング競争が始まったのである。当時の電力事業が政府の認可事業だったため、この市場争奪競争は単に電力会社の事情だけでなく、当時の政権も関与していたと言われている。たとえば S4 年の浜口雄幸内閣誕生で彼を支持していた日本電力は東京進出を決めたと言われている。なお、その後この電力戦争は戦時体制で国家統制に組み込まれてあっけなく終了した。電力管理法（S13 年 1938 年）、国家総動員法と配電統制令（S17 年 1942 年）によって 1 発電 9 配電体制がつくられて、今日へ至っている。だからこの事件は電力戦争の中で、名古屋の東邦電力が東京の東京電力に仕掛けた争いだった。

（2）国策による事業だったので事後の裁判で全員無罪を得るなど軽微な処分

事件のきっかけは鶴見白石町の火力発電所建設である。これは名古屋の東邦電力が東京に「東京電力（とうきょうでんりき）」（略称「東力（とうりき）」で、今の東京電力とは違う）という子会社を作って建設しようとしたものである。2 年前の関東大震災（T12 年）で大きな被害を受けた東京電燈の千住火力発電所（M37 年）に対抗して東邦電力の東京のシェア拡大を担う施設で、震災復興もあってその建設が急がれた。事件後行われた裁判で、2 年後の S2 年 5 月の第一審判決で、被告 212 名に対し首謀者 5 名に懲役 4 年のほかは無罪又は執行猶予とした。控訴審の S5 年 5 月判決では全員無罪となった。この判決は寛大で、軽微な処分の背景には当時の田中義一首相や頭山満らの影響があったと噂された。このように安定した電力供給を確保し

ようとする国策のもとで起きた電力会社同士の内紛だったとして決着がつけられたように見える。

（3）時代遅れの建設会社の仕事ぶり

土木工事と建築工事の二つに分離発注された火力発電所工事は、今日ならJV方式（ジョイントベンチャー）でごく普通に処理される工事方法である。しかし当時では、先にとった現場に他者が乗り込んでくるには、しかるべき手続きなしには認め難かった。乗り込んでくるなら、相応の念達（お金のやり取りによる挨拶のこと）があって当然という慣習が強かった。しかし、工事を受託した東京の大手元受は、間組が地元を縄張りにした業者へ下請させ、清水組が東京から派遣された業者へ下請けさせたままにして、そうした業界の慣習を軽視した。そこへ関西博徒や横浜港湾荷役業界が大挙して応援に来て大事件へ発展したものである。ここには、建設業界の元受と下請、業界へ博徒の介入、当時の業界の慣習が色濃く表れている。

（4）今日も地元で活躍する人物が続々登場

青山松尾連合の当事者の一人、松尾嘉右衛門は、この事件を機に、神奈川県の土木業界の重鎮に君臨した。松尾工務店（鶴見区）を創業し、花月園観光社長で花月園競輪を導入し、戦後直後には貴族院議員にもなった。彼以外にも横浜の土木、運送、港湾荷役業者など多くの人が登場する。

小説の「戦いの構図」から抜き出してみると、

笹田照一（港湾荷役、現在は笹田組））、酒井信太郎（港湾荷役）、藤木幸太郎（港湾荷役、現在は藤木企業）、鶴岡政次郎、楠原三之助（回漕業、現在は楠原輸送）、などである。紅組の中田峯四郎が横浜港で船舶への水供給の会社を経営していた関係もあり、港湾荷役関係は紅組へ参加した。彼らの多くがその後の事業で成功しており、現在でもこの事件に関与した人や会社が横浜には大勢残っている。

（2013年4月10日）

横３ 花月園遊園地

鶴見の「花月園」というと「花月園競輪場」のことと思う人が多い。しかし、それは戦後の昭和 25 年（1950 年）、花月園競輪場に変わったためで（平成 22 年 2010 年廃止）、もともとはずっと前の大正 3 年（1914 年）～昭和 25 年（1950 年）にあった「花月園遊園地」の遊園地を指す。

今はその競輪場も廃止されたので、遊園地時代の花月園は本の中に見るほかない。しかし、新橋の料亭の若旦那が日露戦争の好景気で経営も好調になった時、突如パリ旅行へ出かけ、ブーロニュの森にあった児童遊園地を見て日本にも作ってみたいと夢を見て、実際に鶴見に作り上げた。遊園地の名前も京急電車の駅名も、料亭の「花月楼」からとって「花月園」とした。

花月園鳥瞰図 （T14 年、横浜開港資料館蔵）

昔、鶴見に巨大なアミューズメントパークがあった。大正 3 年、鶴見東福寺の敷地を借りて開園した「花月園遊園地」がそれである。
動物園、噴水、花壇、メリーゴーラウンド、お化け屋敷、観覧車、登山電車、弁天池、プール、アイススケート場などの子供向け遊具はもちろんのこと、そのほか、テニスコー

ト、野外劇場、茶店、貸席、料亭、ダンスホール、五重塔、ホテルなど大人も楽しめる施設も整備されていた。花月園遊園地の特徴は、当時の子供用遊具がほぼ揃っていたことに加えて、動物園、植物園が併設されたこと、少女歌劇場やダンスホール、料亭もあって大人たちもまた楽しめた施設だった。入場者は平均 3,000 人/日、後の S2 年のピーク時には 7.3 万人/日が入場したという。

この遊園地を作ったのは新橋の料亭花月楼の主人（社長）の平岡廣高である。明治 18 年に父から新橋の料亭「花月楼」を引き継いで経営にあたるが、自らの放蕩生活と事業拡張して失敗。一時は巨額の借金を抱えるが、日露戦争後の好景気で花月楼の借金を完済する。M45 年社長を引退してヨーロッパ旅行へ出かけて、パリ郊外のブローニュの森の児童遊園地を見て、こんなものを日本にも作りたいと考える。大正 2 年、鶴見東福寺から 2.5 万坪の土地を借りて整備に着手し、大正 3 年 5 月 31 日「花月園遊園地」が開業した。予算は 5 万円だった。

この施設の詳細は斉藤美枝著「鶴見花月園秘話」に詳しいが、著者の斉藤氏がプロローグで言うのだが、鶴見花月園は東京デイズニーランドのようなテーマパークで、平岡廣高氏がウオルト・デズニーの日本版のような男だったという。しかしその実際は少し違う。

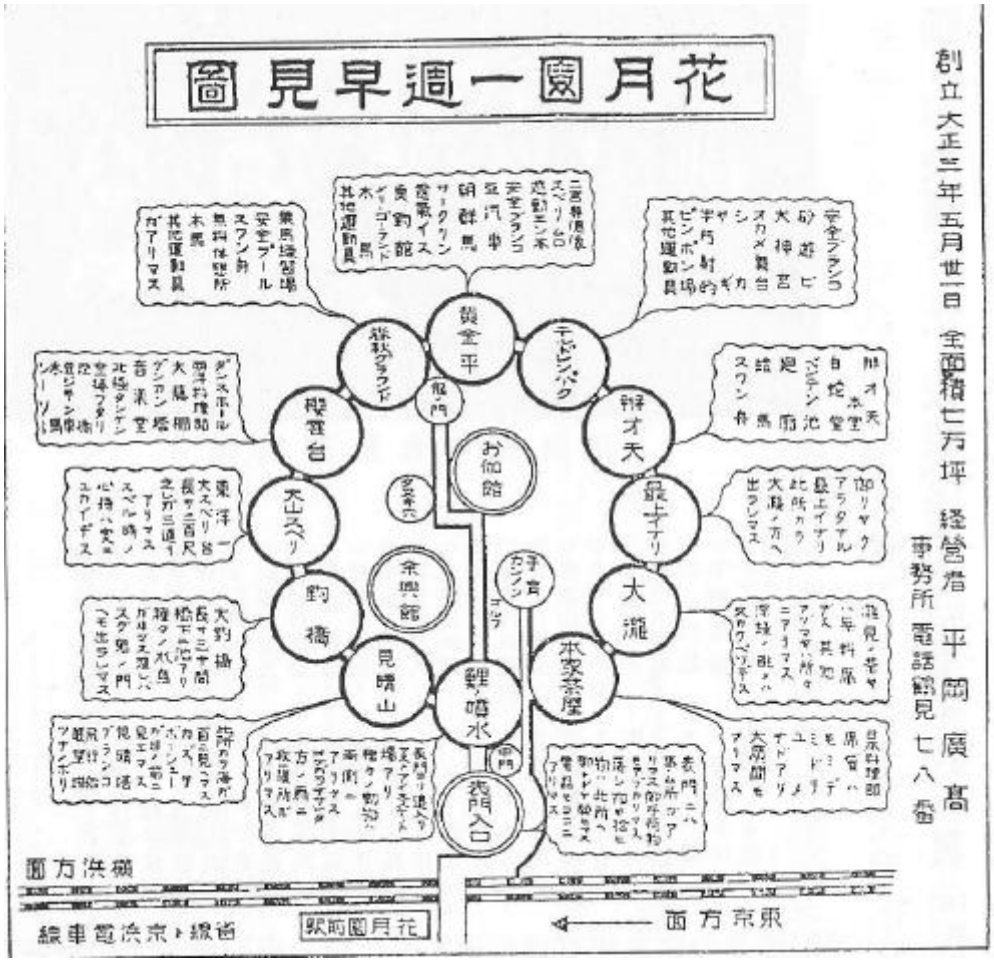
平岡氏は、明治 45 年に 6 か月間のヨーロッパ旅行の帰国後に、東京と横浜の中間の交通至便な鶴見生麦に、江戸時代からの自然が残された丘陵地があり、東京湾を眼下に見下ろせる風光明媚なところがあることを知った。彼がその時考えたのは、料亭の事業拡張計画で、ここに新橋の料亭花月楼の離れ座敷を作りたいというものだった。その計画が他の計画と少し変わっていたことは、楽しい遊具を置いて子供たちも健康に遊べる施設も併設すれば家族中で楽しめる場所になるだろうとも考えたことだった。

そのために必要な資金は 5 万円で、目黒の別荘を売って調達した。花月楼は大正 3 年 5 月 31 日に開園した。その直前の 4 月 4 日に「都新聞」に開園をお知らせする次のような広告が出された。

・交通至便で天然の地形を生かして眺望絶景、空気清浄の地に立地し、
・園内で栽培した花卉、盆栽の販売、貸別荘や休憩所がある
・東洋一の大滝、野外劇場、その他動物園、噴水、花壇、ブランコもある
・園内には飲食店、土産物店もある
・園遊会もできる

ここでは、豊かな自然の中に料亭花月楼の離れ座敷と別荘を作ったこと、そして付随的に遊園地も作って、ファミリーで楽しめる施設として広告されている。だから、花月園は都市の有産階級に向けたレジャー施設として計画されたのである。まだ、ここには子供本位の遊園地の姿はない。

開業は当初 4 月 15 日予定だったが、皇后死去があって 5 月 31 日に延期された。その開園式では新橋花月楼の客を中心にした政財界人や文士らが招待されて、約 600 人の新橋・柳橋芸者衆が座を盛り上げたという。ここには子供の姿はなく、新橋花月楼の離れ座敷が鶴見に開業したお祝いだったことを意味している。



平岡の花月園遊園地は、最初は料亭花月楼の離れ座敷の小さな付属施設で、初めから大遊園地だったわけではないが、人気度と経費を勘定しながら年々拡張されていった。初めは総面積 2.5 万坪で、本家の茶屋を中心において東福寺境内を改造して林を生かして散策路

や花壇、噴水、大滝、動物園などがあった。この事業は好調で、客が増えてくると施設も年々拡充された。大正 6 年に敷地を 1 万坪拡張して、花月ホテル、野外劇場、運動場、釣り堀を作って動物園も拡充した。大正 9 年にはダンスホール、大正 10 年にはヒルウエーター（エレベーター）、活動写真、展望塔なども次々とオープンした。

大正 10 年 6 月、平岡はアメリカ旅行へ出かけた。前のヨーロッパ旅行と違って、アメリカの遊園地視察が目的だった。この米国旅行の後、平岡の花月園構想ははっきりと児童遊園地に特化した形を帯びだした。翌年の大正 11 年になると、ホテルが 4 軒増設、メリーゴーランド、チルドレンパーク、少女歌劇団など大型施設整備が進んだ。12 年には野外グランドも開場し、敷地はさらに 5 千坪拡張した。大正 12 年 9 月 1 日関東大震災に襲われて、花月園の施設も相当規模の損害を被ったが、平岡の設備投資熱は衰えなかった。大正 14 年になると敷地は 7 万坪になり、最新遊具導入に必要な費用も莫大なものになってきた。

その年の 9 月、平岡は「本園創業以来の由来書」を書いて来園を市民に訴えた。自分が昔パリですべての施設が児童本位に作られた児童遊園地をみた。それだけでなく、万一に備えて医者が常駐し、掃除も行き届き紙屑一つ落ちていない清潔な施設でもあった。これをまねて児童の体育、徳育、知育を向上するために花月園を作った、と言う。大正 15 年 10 月には、入園料値上げに際して平岡が「花月園の根本主義」を述べている。そこには土日祝日の学校が休みの時に子供の遊び場所がない、子供を家庭で遊ばせると同じように、花月園なら子供たちを終日安心安全に遊ばせることができる、と言っている。

昭和 2 年に花月園の入場者数はピークを迎えた。しかし、ピークは後退の始まりでもあった。その年の 11 月には、児童の体質向上に今後も努めるので、遊具の大型化高額化で遊園地の個人経営が次第に行き詰まりを考慮して県市に助成金を依頼する旨の要望も出された。昭和 8 年、京浜電鉄、大日本麦酒が共同経営する新会社が設立されて、園は新会社による経営に変わった。平岡は花月園経営から引退した。その後、世の中は次第に軍国主義の時代になり、子供の教育やレジャーにお金を使えない時代になってきた。そのため、戦時中は京浜工業会にわたって会社の福祉施設になった。遊園地は事実上休眠状態になり、昭和 18 年には動物園の猛獣も他園へ引き取られたり殺処分された。戦後になって遊園地が再開されて、SL.メリーゴーランド、電気自動車、木馬などが設置されたが、集客もできず、昭和 25 年 1 月に廃止された。

花月園は最初、料亭の離れ座敷としてスタートした。だから大人の遊園地としてスタートしたと言ってもよい。しかし、開業して間もなく、その付帯施設だった遊園地に大勢の注目が集まり、経営主もまた子供の遊園地には強い関心を持っていた人だったので、欧米の

先進施設を視察して、本物志向の遊園地に整備し直した。だから、大人の遊園地がある日、子供の遊園地へ転換したようなものだった。花月園遊園地の特徴は、当時の子供用遊具がほぼ揃っていたことに加えて、動物園、植物園が併設されたこと、少女歌劇場やダンスホール、料亭もあって大人たちもまた楽しめた施設だった。

さて、斉藤氏はこの花月園を東京デイズニーランド（TDL）のようなアミューズメントパークと評している。
TDL は大型遊園地、大型レジャーランドであるが、明治以降鉄道会社が乗客の拡大を目的に作った古い遊園地スタイルを一新させたものである。建物も展示物もアトラクションも音楽もここは日本でなくアメリカと言わんばかりに作られていて、入場者は日本にいる現実を忘れて夢と魔法の国を彷徨うことになる。あふれかえるモノに飽きた日本人が本場そのままの大仕掛けなアトラクションや海外旅行を連想させる贅沢な雰囲気を味わって楽しむ世界がデイズニーランドである。

これに対して古い型の遊園地は、囲い込んだ観客に様々な遊具、展示、遊びやスポーツのメニューを全部取り揃えて遊ばせようとする。だから人々はものに取りつかれたようにせわしなく動き回っている。TDL の観客とは違って、人々にとってレジャーはぼんやり過ごして休息する時間ではなくなっている。提供する施設側も観客が興味を示してくれそうなものを何でも次から次へとエンドレスで提供した。ここでは多様な各施設を揃えるが、いずれもその賞味期限は短くて、お金を十分かけられない。そうした遊園地の原型を示しているのが花月園遊園地である。だから、花月園はレジャーランドとしては TDL と共通だが、TDL が否定した古い型の遊園地とみることができる。

（参考資料）

斉藤美枝著「鶴見花月園秘話～東洋一の遊園地を作った平岡広高」
（鶴見区文化協会、2007 年）
栗田房穂、高成田享「デイズニーランドの経済学」（朝日文庫、1989 年）
横浜市立図書館報第 8 号「横浜遊園地特集」（平成 2 年 3 月 10 日発行）

（2013 年 5 月 5 日）

横 4 海芝浦駅

電車のドアが開くと、潮の香りが押し寄せてくる。プラットホームの先は一面真っ青な海で、銀色に輝く水面は手を伸ばせば届きそうだ。運河の先が扇島で首都高のつばさ橋がよく見える。 鉄道ファンには「日本で一番海に近い駅」として知られる。東芝京浜事業所の敷地内にあり、一般客は改札口を出られない。それでも週末には、ホームはカップルや親子連れでにぎわうというので、駅に集まるファンのために東芝の事業所は 15 年前に隣に公園を整備した。

この駅は、鶴見臨港鉄道の駅として 1940 年開業。東芝の前身「芝浦製作所」と場所が海に接していることが駅名の由来。 1 日の平均乗降客数は 6,550 人で、大半が東芝や関連会社の社員。平日の夕方は、家路を急ぐ東芝社員らでホームはあふれかえる。一方、日中や土日で工場が休みのときは 1～2 時間に一本になる。

海芝浦駅。海の上にあるようなホーム。先端にある改札の看板に、この先は東芝だから会社に用事がある人以外は出られないと書かれている。

この駅が芥川賞小説の舞台になった。笙野頼子「タイムスリップ・コンビナート」であ

る。難解な小説だが、そのストーリーは単純で、去年の夏のある日、突然電話があって、電車に乗って海芝浦へ行った記録である。

概略は次のようになる。
まずその電話のやり取り。熟睡中に、どこの誰ともわからない人から電話で、どこでもよいから好きなところへ出かけて　珍しい素人写真を撮ってきてくれと言う依頼を受ける。あれこれのやり取りがあって、結局、高度経済成長の名残が残っている路線で、景色が近未来のような海芝浦へ行くことになる。その記述が長い。全体 84 ページ中 37 ページがそのあれこれのやり取りに費やされる。

次いでアパートがある都立家政から、高田馬場～新宿～東京～鶴見へ行く。その電車の窓から見る景色描写が延々と続く。13 ページ分。
そこから鶴見線に乗って、鶴見～武蔵白石～安善～浅野～海芝浦へ行く。ここが作品のハイライト部分で、32 ページを占める。

鶴見線に乗ると、景色もコンビナートが林立するようになり、まるで自分の故郷の四日市のようだと思う。2 時間に 1 本と間隔があいたダイヤだが、その電車に乗って武蔵白石駅へ行く。無人駅である。5 歳と 3 歳くらいの男の子が無人駅から無人駅へ乗り継いで遊んでいる。安善駅を経て浅野駅へ来ると今度は沖縄会館がある。まるで電車がワープ電車で、タイムトンネルに入ったような気分に陥る。

浅野駅からいよいよ海芝浦駅へ行く。海芝浦駅は鶴見線のいくつかある支線の一つの終点である。その駅の光景は小説冒頭にある通り、ホームの片方は海に面し、反対側は東芝工場である。ホーム先端に出口があるが、それは東芝の工場入口で社員や関係者以外は通れない。だから普通の人がホームに立っても折り返し電車が出るまでホームに立ち尽くすしかないところである。電車の中で 40 年前に母が、この海芝浦へ出向していた話を思い出す。ホームでは雑誌で見てここへ来るのが楽しみだったというおばさんもいた。主人公は、ホームには立ったが何をするのでもなく折り返し電車で帰る。タイムトンネルを出たら高度成長期の残骸のような駅と工場があったというわけだ。

電話のやり取り中に出てくる言葉に、「人造マグロ、レプリカント、ブレードランナー」がある。最初読んだ時には何かわからなかったが、別の日友人の話しから SF 映画「ブレードランナー（Blade Runner）」（米映画、1982 年）の登場者ではないかと教えられた。

その映画は、ロスアンゼルスのある街を舞台にして、植民惑星から脱走して地球へ潜入した 4 人の人造人間（レプリカント）を捕らえるために、ブレードランナー（レプリカント

を見分ける訓練を受けた専門捜査官）が追いつめる話である。最後にはブレードランナーのデッカート自身もレプリカントだったと判る。

浅野駅。海芝浦へ行くにはＪＲ鶴見線の浅野駅で乗り換える。本線は川崎の扇町駅へ行く。本線と支線が分岐するホームの間に浅野駅があり、ホーム間は踏切で渡る。駅は無人だから、出入りは自由である。

小説の主人公沢は、実際にあったかどうかは不明だが過去の記憶や歴史を植え込まれ、それを信じて行動するブレードランナー症候群のような女性である。アパートを出て延々と電車を乗り継いで海芝浦へ行くために鶴見のコンビナートへ来る。その私を待っていたのはマグロの人のレプリカント（人造人間）でもなければ浦島太郎でもない、珍しい駅へ来て喜ぶ普通のおばさんさった。時間をワープしてたどり着いた先は、生まれ育った四日市の街にも似ているし、沖縄の一角のようでもある。要するに時間と空間がどうしようもなく歪み崩れていく。言葉がさらに言葉を生んで現実と妄想の境目も失っていく。

この小説は真理や真実、良心とか信仰を人に訴えるものではない。ある街の景色、田舎の光景なども見方を変えると違って見えると言いたいのだろうか。昔の作家は見慣れないものを見慣れたものに変えたが、今日の小説家は見慣れたものを見慣れないものに変えるのが仕事になったと言えるかもしれない。この作家は、鶴見のコンビナートを実際とは異なるがもう一つの別の現実のものに変えようとしているようだ。高度経済成長の遺物のようなコンビナートを近未来の景色に変えていくのだろうか。

（2013 年 4 月 19 日）

横５　神奈川台場

昔、横浜にお台場があった。開港場になった横浜港に隣接して作られたものだ。
しかし、その役割が終わると、横浜港の拡張と工業用地造成のための埋立事業が進められて、、もともと海に面していたお台場も陸地の中に取り込まれた。次いで、東京と横浜を結ぶ貨物線が造られて、その線路が拡張するとお台場のほとんどが線路敷きの下になった。さすがに昔の人たちも配慮があったようで、お台場の石垣などは壊さず上から砂をかぶせる仕方で造成したので、お台場の原型はかろうじて残された。
後世、横浜の歴史遺産を大事にしようという一部の人たちが、これを復元しようと長い間努力されてきたが、今もなお鉄道は活用中なので、全体復元は今もってできていない。それでも、掘り出された部分だけでも横浜台場の概要はうかがい知ることができる。

星野町公園の柵と貨物線の間に、お台場の石垣が露出している。その露出した石垣がお台場の先端で、ここから港へ向けて大砲が何門か据えられていた。

お台場全体図（神奈川台場公園）

神奈川台場は万延元年（1860 年）に現在の神奈川区神奈川 1 丁目に築造された砲台である。
安政五年（1858 年）に 5 か国と修好条約を締結して横浜、函館、長崎、新潟、神戸を開港することが決定された。そこで江戸湾内を航行する船舶の監視役として神奈川台場が築造された。そのため当初は 25 門の大砲設置が計画されたが、実際には 14 門が置かれた。

もともと台場は、伊豆韮山の江川太郎左衛門英竜の進言で嘉永 6 年（1853 年）から全国で整備を始めたもので、外国船による侵略に対する防衛のための砲台場である。当初は海岸や河岸に築かれたが、戊辰戦争や函館戦争では野戦にも使われるようになり、高台、峠などの交通の要衝にも築造された。

しかし、神奈川台場は、当初から少し役割が違っていた。ここでは国交のある国の外交官の赴任・離任時の礼砲、大統領や国王の誕生日の祝砲が主要な任務だった。戊辰戦争の時には、東上してきた官軍は幕府の出先機関だった神奈川奉行所を慶応 4 年（1868 年）4 月 20 日に接収すると、間をおかず 4 月 24 日には神奈川台場も接収した。当時幕府側では古河藩がここを担当していたがトラブルもなく官軍へ受け渡しが行われて、4 月 29 日からは

大砲の実射訓練も行われている。その目的はイギリスとの祝砲交換だった。だから、神奈川台場は建設された江戸時代から明治新政権へ変わった後までも、軍事施設というよりも外交施設の役割を果たしていた。

神奈川台場は、明治 32 年（1899 年）に廃止された。外交上の役割だった祝砲は、必要が生じるたびに、横須賀軍港から横浜港へ軍艦を曳航してきて礼砲発射をすることになったからである。任務を終えた後の神奈川台場はしばらく放置されたが、大正初期から工場地帯造成のための神奈川町海岸地先埋立に取り込まれた。大正 6 年に鶴見～高島町を結ぶ貨物線路が敷設されると、一部の護岸を残してほとんどが鉄道下へ埋設されて、現在に至っている。（2013 年 4 月 12 日）

（未来航路「街道を行く 13」から借用）

横 6　コットンハーバー

赤レンガ前からみなとみらい地区の先端を通って瑞穂埠頭へ出る港湾道路がある。港に面して走るきれいな道路である。その道はみなとみらいでは地下道路だが、中央市場へ渡る橋の手前で地上へ出て、次いで高架道路になって左のコットンハーバー地区の高層ビル群を過ぎると瑞穂埠頭へ出て終点になる。そのコットンハーバーが旧日本鋼管浅野ドック跡、通称「浅野ドック」跡である。

山内ふ頭周辺地区が再開発されて、マンション群と結婚式場が整備された。ホテルや事業所ビルの計画もあったが、取りやめになった。なおコットンハーバーの名勝は、再開発地区にあった棉花町に由来する。

浅野ドック跡地に作られた町が「コットンハーバー」である。この地区（7.1ha）は、横浜市の「都心臨海部再生マスタープラン」で指定された 5 地区の中の一つの「東神奈川臨海部周辺地区」にあり、この地区の北西で計画が進んでいる「東高島駅北地区」と連動している。この開発は、三菱地所、野村不動産、JFE 都市開発の三社による民間ベースの JV で進められ、5 棟の超高層マンションと結婚式場やスーパーマーケット、ホテルが計画された。2004 年に着工し、2006 年～2008 年の間に完成した。

建物概要

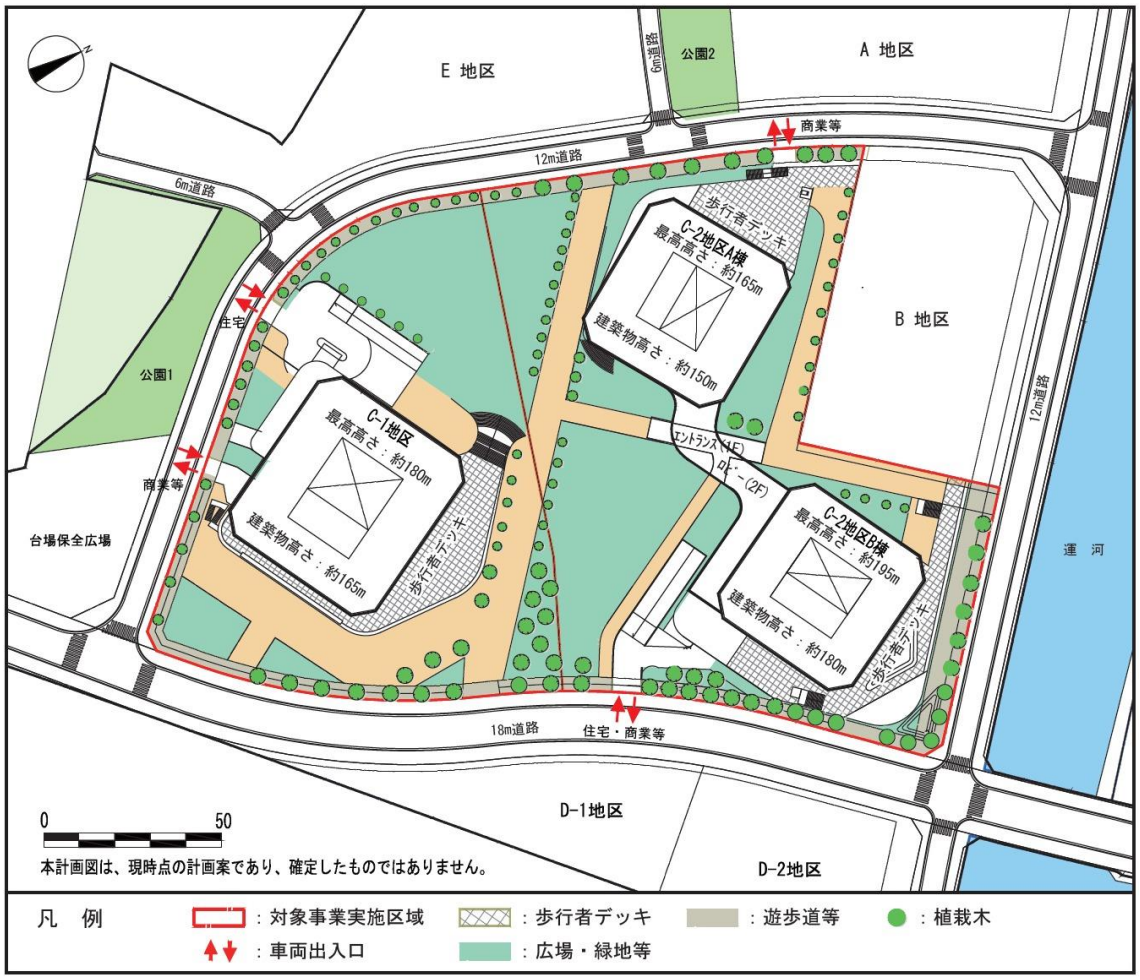
棟名称	ベイウエスト棟	ベイイースト棟	シーウエスト棟	シーイースト棟
(1)構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造			
(2)規模	地下 1 階地上38階建	地上23階建	地下 1 階地上32階建	地上23階建
(3)計画戸数（全 926 戸）	360戸	132戸	308戸	126戸
(4)竣工時期（予定）	平成 20 年 2 月	平成 19 年 2 月	平成 19 年 1 月	平成 18 年 9 月
(5)間 取 り	1LDK＋DEN～4LDK			

5 棟の超高層マンションに 924 戸が住むが、建設途中からいくつかの計画変更が発生した。まず、まず、ホテル計画が建設途中に中断し、オフィスビル計画も未着工のまま中止された。天然温泉リゾート＆フィットネスクラブの INSPA も開業 3 年後の 2010 年閉鎖された（た

だし、2013 年にリニューアルオープンされた。)。

貨物線の反対側に計画中の「東高島駅北地区」の再開発でもすでに超高層マンション 3 棟の計画が決定されているので（2021 年～2025 年)、この地区の景観は今後大きく変化しそうである。

(仮称)東高島駅北地区 C 地区棟計画」は日本貨物鉄道及び三井不動産レジデンシャルによる。



（浅野総一郎氏の活躍）

浅野ドックは、一代で浅野財閥を作り上げた実業家浅野総一郎氏が設立した会社である。浅野は当初は事業を起こしては挫折を繰り返す「九転十起の男」と呼ばれたが、渋沢栄一と知り合ったのち、浅野セメントで財を成した。1896 年東洋汽船を起こして海運業へ乗り出し、第一次世界大戦特需に沸く海運好況で大成功した。次いで海運のためには造船所が不可欠と考えて、東京横浜間の浅海を埋め立てて造船所を含む工業地帯建設を企画した。1914 年鶴見埋築株式会社（現・東亜建設工業）を設立して、本格的に埋立工事に着手。15

年後の 1928 年に埋立工事が概成し、以降浅野セメント、日本鋼管、浅野製鉄所、旭硝子、日清製粉などが進出し、今の京浜工業地帯を形成した。その埋立工事開始してすぐの 1916 年に横浜造船所（直後に浅野造船所に改称）建設に着手し、翌年には第一号船建造に着工するほどの勢いだった。

浅野総一郎氏と横浜の縁は深く、第一に横浜港のふ頭整備への貢献。汽船を建造して太平洋横断航路に乗り出すために欧米へ交渉に出かけた時、欧米の港湾視察を行って、横浜港では大型船を沖に停泊してはしけで荷役をする「沖懸かり（ おきかかり）」が一般的だったのに対して欧米の港では桟橋へ横付けして荷役する様子に驚いて、大型船が直接着岸できるふ頭整備の緊急性を提言した。
第二には横浜港の貿易港としての発展への貢献。神戸港の場合と違い、産業が少なかった横浜港だったが、浅野は隣接して京浜工業地帯を整備した。これにより原材料も製品も横浜港を経由してモノが移動する仕組みを作り出したので、その後横浜港は押しも押されもしない日本一の貿易港として戦後の高度経済成長を支えた重要港湾になった。

（南極観測船・宗谷号の突貫改修）

今浅野ドック跡へ行くと、地図と銘板が埋め込まれていて、その銘板にこのドックで南極観測船「宗谷」の改修をしたと書かれている。1955 年政府の南極地域観測統合本部が、海上保安庁がもっていた灯台保安船「宗谷」を南極観測のための砕氷船にすると決めた。翌 1956 年 2 月に海上保安庁が、宗谷の改修工事入札をしたところ応札者がなく、設計変更後の再入札も金額が安すぎて落札者が出なかった。そこで、最低価格を出した浅野ドックに頼み込んで入札条件を変更したうえで随意契約した。宗谷は国際地球観測年事業の一環で南極に派遣される船で、改修工事前から 1956 年 11 月に出発が決まっていたので、改修工事が急がれた。浅野ドックでは 1956 年 3 月から改修工事に入り、突貫工事の連続で 7 か月後の同年 10 月に完了した。宗谷は、10 月 10 日に改修が終わると、すぐ 11 月 8 日には晴海ふ頭から出港することになった。

この国家的事業に一企業が全面協力して間に合わせたという話は、その後多くの人々により賞賛をもって語りつながれている。しかし、そのドックも機能が鶴見へ移転した後は役割を終えて、再開発されることになった。2004 年に都市再生特別地区の都市計画に基づいて住宅と商業施設で構成有れる複合市街地の整備が始まった。その結果、2008 年に超高層マンション 4 棟が完成し、順次入居も始まった。ただし不況の影響を受けて、商業施設整備はストップしたままである。

横浜人にとって、明治、大正、昭和にかけて活躍し、「セメント王」「京浜工業地帯開発の父」と呼ばれて、横浜に限らず日本の経済発展に大きな貢献をした浅野総一郎氏の功績

は計り知れないものがある。にもかかわらず、今の横浜人はその偉大な先輩のことを忘れがちである。かれの生涯は日本の発展と自身の夢の実現に生きた人だったと東亜建設工業のパンフレットで紹介されているが、私は「九転十起」の男が昔横浜を舞台にして活躍したと伝えたいと考えている。

（注）「九転十起」について
浅野総一郎は、1920 年浅野学園を子安に設立した。その校庭に今も総一郎の銅像があって、その像は子安の海、京浜工業地帯の方向をじっと見ているのが印象的である。学園校歌に総一郎が登場し、「我らの仰ぐは寿像の姿　強健の身体　力行の態度　九転十起に我世を経んと　額に示す自立の心・・・」（浅野学園校歌）と歌われている。「九転十起」は浅野総一郎の座右の銘だったと言われている。

浅野総一郎像（浅野学園）

横 7　横浜ゲーテ座

横浜には開港直後から外国人居留地が設けられて、外国貿易を行っただけでなく学校、教会、劇場、競馬場などが揃った西洋の街が出現した。それらのほとんどは関東大震災で灰燼に帰したが、そのいくつかは今でも偲ぶことができる。その一つがゲーテ座である。

劇場の歴史は、イギリス近代演劇が専門の升本匡彦氏の「横浜ゲーテ座―明治大正の西洋劇場」（横浜市教育委員会、1978 年）に詳しく紹介されているので、その研究にそって横浜ゲーテ座の歴史をたどってみる。

また、この劇場は通称「ゲーテ座」（The Goethe Theatre)と呼ばれているが、正しくは本町 6 丁目にあって居留民が楽しんだ施設は「The Gaiety Theatre」(ゲイエテイと発音)である。当時ロンドンにあった人気劇場の「ゲイエテイ座」「エンパイア座」「アルハンブラ座」などから、ロンドンを懐かしんで命名したと思われる。英語の Gaiety は「楽しみ、陽気、華美」といった意味で、横浜でも当時ロンドンで流行していたオペラコミックがよく上演された。

4 代目のゲーテ座。2 代目のパブリックホールがあった山手の後に岩崎氏が復元した。

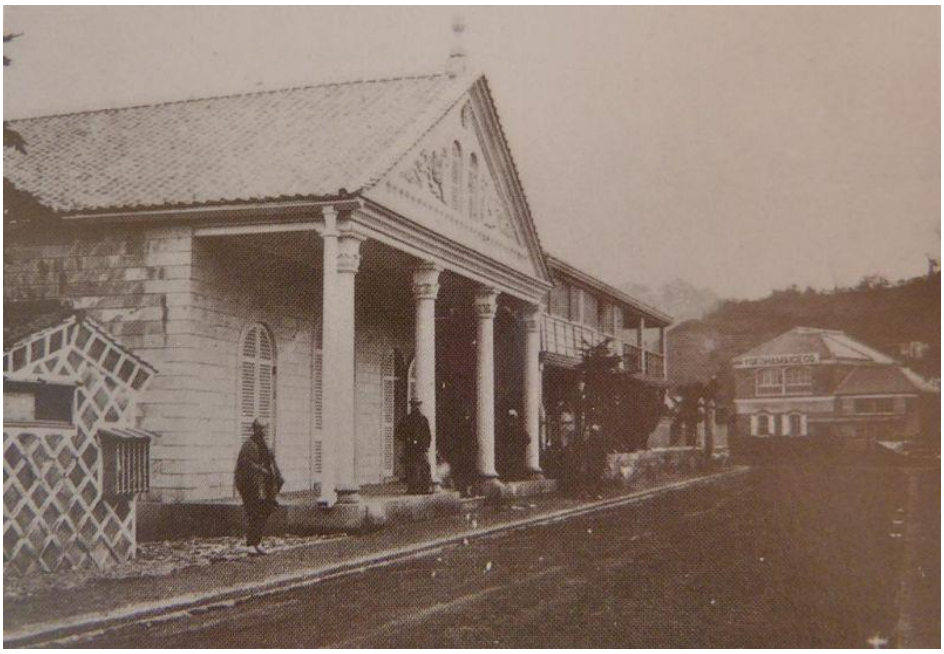
開港地横浜の居留地に居住する西洋人たちは、早くから音楽や演劇を楽しみたいと考えていた。旅の途中に日本へ立ち寄った音楽家もいたし、横浜に留まって音楽や演劇活動をした人もいた。明治期に横浜へ来た音楽家たちが立ち寄った劇場が横浜ゲーテ座である。

横浜ゲーテ座は四つの時期に区分される。

① 本町通りゲーテ座（本町）1870 年（M3）12 月～1885 年（M18）7 月
財政難のためＭ５年からパブリックホールに衣替えした
② パブリックホール（山手）1885 年（M18）4 月～1908 年（M41）7 月
本町通ゲーテ座の運営主体が山手へ新ホールを建設。
③ 山手ゲーテ座（山手）1908 年（M41）～1923 年（T12）9 月
M32 年に居留地が廃止されて、商業劇場に衣替えし名称も
「山手ゲーテ座」と改めた。T12 年関東大震災で崩壊した。
④ 岩崎ミュージアム（山手）1980 年（S55 年）～現在
岩崎学園が同じ場所に復元し、服飾の博物館として活用。

＊　　＊　　＊

① 初代ゲーテ座
本町通りゲーテ座は、M3 年にオランダ人ノールトフーク・ヘフト氏がアマチュア・ドラマテイック・クラブ（ADC）のために建てた。彼はヘフト商会を経営して成功した人だが、1866 年に本町通 68 番地にあった自分の事務所の裏に建てたという。多目的集会場であり、建坪 125 坪、石造り、客席数 200、照明のガス灯とピアノを備えていた。しかし、2 年後に ADC が家賃を払えず解散したため、居留民たちが相談してゲーテ座を居留民用のパブリックホールとして使用することで解決した。
② 二代目ゲーテ座（パブリックホール）
パブリックホールは、最初のゲーテ座が小劇場だったのに対して、M18 年山手に、建坪 270 坪、レンガ造り地下 1 階、地上 2 階、客席数 500 人、広い舞台とオーケストラピットを備えていた。この建物は初代ゲーテ座をＡＤＣから引き継いで運営していたパブリックホール・アソシエーションによって建設されたので、初めから劇場名もパブリックホール（横浜公堂）と名付けられた。
三代目ゲーテ座（山手ゲーテ座）
横浜の外国人居留地はM32 年（1899 年）に廃止されたため、このパブリックホールもM41 年に「ゲイエイテイ座」と名称を変えて商業劇場に衣替えした。演劇・音楽会・講演会な



開業直後の初代ゲーテ座。本町通の最奥、元町の近くで、創設者のヘクトの事務所の隣だった。（升本匡彦｛横浜ゲーテ座」岩崎博物館出版局）

2 代目ゲーテ座。居留民はこれを「パブリックホール」（横浜公堂）と呼んだ。M32 年居留地制度が配　されて、M41 年から商業劇場になり、3 代目「ゲーテ座」と名称も変更された。そのため坪内逍遥や大佛次郎らの日本人も出入りするようになった。しかしT12 年の関東大震災で崩壊した。（升本匡彦「横浜ゲーテ座」から借用）

ど多様な目的に利用されたが、居留民専用ではなくなったけれど、観客はやはり外国人が主体であり、日本人は少なかった。 しかし、その少ない日本人観客の中には、坪内逍遥、北村透谷、芥川龍之介、大仏次郎など、後の日本文化に大きな影響を与える人物が通い詰めた。

③ 四代目ゲーテ座（岩崎ミュージアム）

1980（昭和 55）年、山手ゲーテ座の跡地に岩崎ミュージアムが新設された。1930（昭和 5）年創立の服飾専門学校、岩崎学園が、50 周年記念事業として企画した。基礎工事が始まると、関東大震災で埋もれてしまった建物の一部と思われるレンガが、地中から次々に出土した。それが山手で生産されたジェラールレンガと判明し、現在、ミュージアム内に展示されている。イタリア系イギリス人ベアトが写したゲーテ座の写真から、それらがゲーテ座の外壁に使われていたものと同じと判明した。なお、岩崎ミュージアムには服飾関係の展示室とゲーテ座ホールがある。

このゲーテ座で開かれた音楽会や演劇会の内容については、升本匡彦氏の「横浜ゲーテ座」（岩崎博物館出版局、1986 年）と同氏の「横浜ゲーテ座」（横浜市教育委員会、1978 年）に詳しい解説があるが、その概要は斉藤龍氏の「横浜・大正・洋楽ロマン」（丸善ライブラリー、H3 年）で見ることができる。

（2014 年 2 月 1 日）

横８ 横浜公園 ～「ふるあめりかに袖はぬらさじ」

横浜公園は横浜で２番目に整備された公園である。１番目は山手公園で、1870 年（M3 年）5 月に初めての洋式公園になった。それから 6 年後の 1876 年（M9 年）、彼我公園（今の横浜公園）が完成した。日本に公園制度が作られた年でもあった。横浜公園ができる前のこの土地は当初沼地だったが、開港後すぐ 1859 年（安政 6 年）11 月、ここに「港崎遊郭」（みよさきゆうかく）が開業した。しかし、1866 年 11 月に起きた豚屋火事で遊郭も類焼して移転し、その跡地に 10 年後に彼我公園が整備されたのである。
港崎遊郭は、江戸品川の岩槻屋佐吉らに命じて作らせた。その中の代表的な妓楼が岩亀楼で、1862 年（文久 2 年）、岩亀楼の遊女・喜遊が外国人に身をゆだねるのを拒んで遺書を残して自害した事件があった。この話については、喜遊実在説、異説、偽作説があって、本当のところは定まっていない。

横浜公園の中の日本庭園に港崎遊郭跡の碑がある。石柱には「岩亀楼」の名前が彫られている。

作家の有吉佐和子氏は、1970 年（S45 年）に、岩亀楼の喜遊を題材にして「ふるあめりかに袖はぬらさじ」という戯曲を書いた。有吉氏は、文学座の看板女優・杉村春子のために書いたと当時述べていたが、戯曲が登場すると、喜遊の話は一気に世に広まった。S47 年初演からお園は杉村の当たり役になり、何度も文学座で公演された。S63 年以降は坂東玉三郎がお園役を演じることが多くなった。

有吉氏のこの戯曲は、喜遊は亀遊として実在し自害したが、遺書や歌は実は大橋訥庵が作ったものが喜遊の死後に牽強附会されたという説によって書かれている。

喜遊事件は、幕末の横浜にあった外国人が出入りする遊郭の岩亀楼で起きた話。当時の遊郭では、外国人相手の遊女と日本人相手の遊女に分けられていた。喜遊は日本人相手の遊女だったが、米人ウイルスに見染められて大金を積まれて逃げられなくなってしまう。このやりとりを通訳したのが恋仲の籐吉だったが、このための藤吉との間柄も壊れてしまう。絶望した喜遊はかみそりで自害する。
仲間の芸者・お園と籐吉が死んだ喜遊を忍んでいると、それを聞いた記者が「瓦版」で、「露をだに厭う大和の女郎花　ふるあめりかに袖はぬらさじ」という辞世の句を読んで自害した「攘夷女郎」だったという話に作り変えて掲載した。これにより喜遊は異人を嫌って自害したあっぱれな烈婦に仕立てられた。その後この話はお園と岩亀楼の主人が語る話として広がった。しかし、ある時、攘夷派の侍たちによりこの作り話がばれて、お園も脅かされて、とうとう、喜遊は絶望して寂しく自害していったと告白する。

この戯曲で、喜遊事件は瓦版で誇大に宣伝され、喜遊の履歴も武家の娘で懐剣に備前長船をもつ小太刀の名手、書道はお家流の文武に通じた女性として描かれる。喜遊が尊王攘夷のヒロイン「攘夷女郎」に仕立てられていく過程を描いているのだが、その中心は「瓦版」の誇大な宣伝である。よく出来た辞世の句を枕言葉風にかざしてつくられたあっぱれな烈婦像は、メデイアにとって世間が望む筋書きを先取りして作ったものである。「瓦版」が皆が望む筋書きに沿った話をつくり報道して行く姿は、今日もマスコミと同じようである。怖いのは、後からメデイアが作った筋書きが真実になっていくことである。しかもそういうメデイアが、皆がそれで酔いたがっていて望まれていることといって何らの反省もなく繰り返す点である。

もう一つは、開港の地横浜にもかかわらず、攘夷派による開国派狩りのひどさを知ることが出来る。攘夷派の乱暴狼藉ぶりから、当時の英公使オールコックも幕府がこれを放任し再度鎖国状態へ戻そうとしている、といってしばしば幕府へ抗議しているほどだった。また、時期は少しあとになるが福沢諭吉も絶えず暗殺の危険に脅かされたと言っているが、この戯曲を読むとその怖さを実感できる。

横 9　富貴楼お倉

ずいぶん前の話だが、鶴見花月園の資料を読んでいて、開設者の平岡廣高が経営していた新橋の料亭「花月楼」の女将お蝶は富貴楼のお倉が育てた女将だったことを知った。その後鳥居民氏の「横浜富貴楼お倉」を読んだ。鳥居氏によるち密な資料収集とその分析に思わず舌を巻いたが、横浜が開港期の日本外交の玄関だった時代に、政治家や財界人が横浜富貴楼へ集まって密議を繰り返したことが描かれていた。

これを知った当時、横浜はまもなく開港 150 周年を迎えるというので、記念になるイベントをやろうと考えて、港の人たちと何度か会議をしていた。そんな折、横浜夢座の五大路子氏と話をする機会があって、お倉の話をして鳥居氏の本もプレゼントしたことがあった。

私はその時、「横浜の女たち」というくくりで横浜にゆかりのある女性たちの烈伝を書いてみたいと考えていた。ちょうど 150 年という区切りがいい時だったので、横浜で生まれたか、育ったか、あるいは風を起こして去っていった女性たちのことを振り返ってみたかったのである。この時期を外すと本当に忘れられてしまうかもしれないと思ったのだ。その女性烈伝は 10 名の女性たちを取り上げて構想したのだが、その第一番目がフェリス女学院を作ったメアリー・キダー氏で、二番目が富貴楼のお倉さんだった。そんな話を横浜の女性を掘り起こして芝居の舞台で演じ続けている五大氏に話したように記憶している。その五大氏が、2009 年横浜開港 150 年の時に横浜大桟橋ホールで「富貴楼お倉」の公演を見せてていただき、とてもうれしかった事を覚えている。

お倉と夫亀次郎の墓は東福寺（西区赤門町）にある。墓石の表面には、宝積院心覚富亀道照居士」「宝善院心色貴倉妙照大姉」、裏面には「明治 28 年 4 月 13 日斉藤亀次郎、明治 43 年 9 月 11 日斉藤くら」と刻まれている。

昔、横浜尾上町に「富貴楼」という高級料亭があった。明治前期から明治中期頃の話である。天保 8 年江戸の谷中で生まれて、浅草や新宿で芸者修業をし、明治 6 年、横浜尾上町に「富貴楼」を開業した。「糸平」の異名をとった相場師・田中平八の援助とその花柳界人脈を使って、店は大繁盛した。裏で伊藤博文も支援していた。

富貴楼に出入りした人は、岩崎弥太郎、伊藤博文、井上馨、大久保利通、大隈重信、陸奥宗光、大江卓、星享、川田小一郎などである。そこでは当時の日本の政治経済に直接影響する話が交わされた。M14 年の政変で井上馨と伊藤博文が大隈を失脚させるが、その謀議も富貴楼でなされた。代って松方正義が大蔵卿に就任するとインフレの原因が紙幣増発にあるとして緊縮財政に転換して「松方デフレ」を引き起こすが、この政策変更も富貴楼で計画が練られていたという。さらに、少し後になるが、一旦追放された大隈が後年外務大臣に復帰する時も富貴楼が裏の舞台だった。経済界では、ライバル同士だった三菱の川田小一郎と共同運輸の品川弥三郎が手を結んで日本郵船を作った話も富貴楼だった。

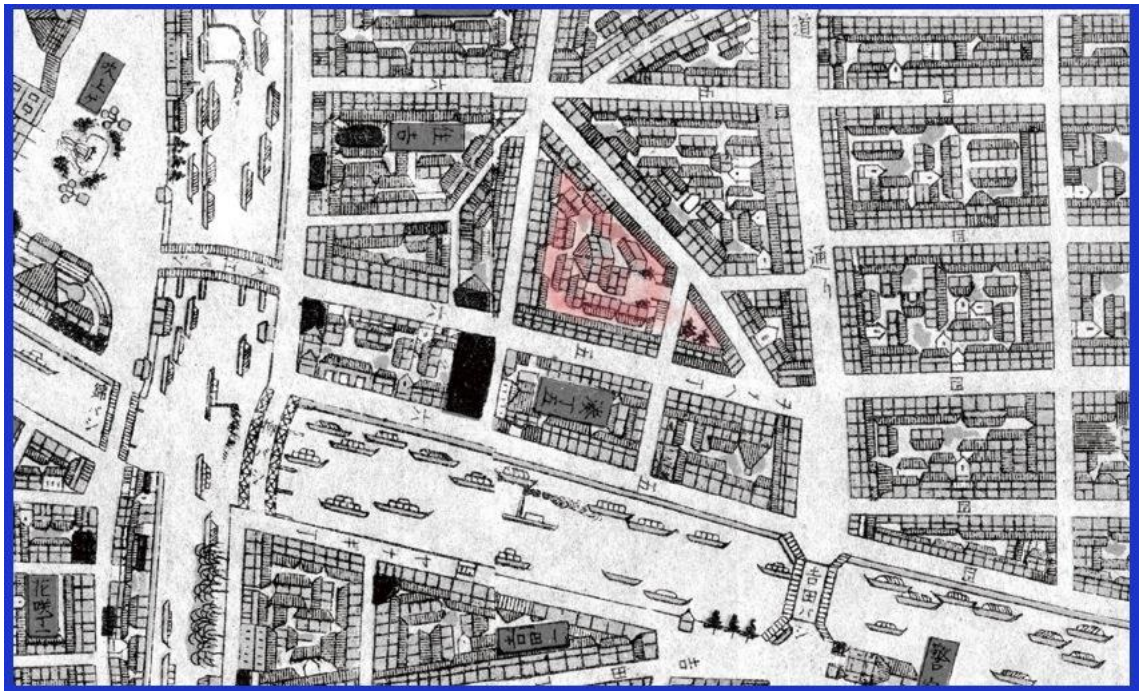
鳥居民「横浜富貴楼お倉」は面白い。第一に明治初期から中期までの間、横浜が日本の中心であったかのように生き生きしていた時代が描かれている。第二にその繁栄する横浜を舞台に一世を風靡した女傑の活躍話である。どうして横浜がそのような舞台になったか。鳥居氏は、お倉の言葉を紹介する。

> 「幕末に京都の志士たちが街中を避けて伏見に集まったように、明治には東京から離れた横浜の富貴楼に集まった。大久保、伊藤など後に明治の元勲と言われた人々も当時ははじめて政権をとったばかりで、新しい日本を建設するためにこれまでしたこともなかったことをしなければならず、本当にこれをやると国の利益に沿うのかどうか、判断できないことばかりだった。何をしても当然反対者も多かった。元勲たちは一見すると自信家で自信ありげだったが、実は自信などなかった。彼らは新橋駅へ向かい汽車へ乗って葉巻をくゆらせ、窓の外の景色を眺めて、鉄道を建設したのは正しかった、学校を建てる、橋を架ける、道路を作る、港を作る、工場を建てる、こうしたことは間違っていなかった、と自信を回復して横浜に着いた。多少情緒的な言い方だが、確かに明治前期の東京は街の 6 割を占めた武家屋敷がもぬけの空になり、客がいなくなった商人も商売ができず、街全体が荒廃していた。それに対して横浜は、外国貿易でお金もモノも情報も集まった。人もまた、外国へ出かける人も来日する人もみんなここに集まった。横浜だけが活気にあふれていたのが実情で、関税収入に依存した財政を扱う大蔵省も外交の外務省も横浜が仕事場のようだった。」

ここで明治初期の頃の花柳界の変遷についてみてみる。明治維新まで江戸の花柳界の中心は柳橋だった。しかし、明治 5 年 9 月新橋横浜間に鉄道が開通すると、政治家も実業家も軍人も新橋周辺に集まるようになった。東京遷都以降花柳界は「新柳二橋」と呼ばれるようになり、日比谷や霞が関に近い新橋、赤坂は公共事業受注や官営工場払い下げを目論む

実業家や政治家の情報交換や談合の場となり、「待合政治」という言葉が生まれるほど発展した。その新橋は横浜と鉄道で結ばれていて、政治や経済面では横浜は東京の窓口になってほぼ一体的な運用がされていた。その舞台になったのが新橋では、「花月楼」（銀座7丁目）、「湖月楼」（新橋）、「瓢や」（ひさごや、新橋）で、横浜では「「富貴楼」だった。

料亭経営は女将の才覚次第というが、花月＝お蝶、湖月＝フミ、瓢や＝おとり、「富貴楼」＝お倉、というように優れた女傑がそろっていた。この女傑たちもお倉と近い関係を持つ人たちだった。花月は、明治元年に唐津藩江戸家老（多賀長兵衛）の二男・多賀右金治が開き、その息子の平岡廣高（後に鶴見花月園遊園地を経営）の店である。右金治が明治5年に「花月楼」の支店として「湖月楼」を開店した。「花月楼」のお蝶は平岡の最初の女房だが、「富貴楼」のお倉が仕込んで送り込んだ女将である。「湖月」のフミは多賀右金治が再婚した女房で、お蝶から女将業の訓練を受けていた。「瓢や」のおとりもお倉が送り出した女将だった。世にいう「待合政治」の一角を作った新橋の花柳界が横浜富貴楼お倉と密接だったことには改めて驚かされる。



富貴楼があった場所について、鳥居民氏は尾上町5丁目（今の神奈川県中小企業会館あたり）と推測されている。しかし、そこで尾上町でなく湊町（港町）になる。M24年の地図では、2,000坪を超す敷地は、反対側の馬車道十番館辺りになる。ここなら尾上町5丁目（現在は常磐町5丁目）になるだろう。

（この所在地調査と地図は、「謎多き尾上町の女将」（横浜わが街シリーズ））から借用した。）

横 10　山手公園

「山手大通り」を「港の見える丘公園」を背にして歩く。外国人墓地、元町公園の洋館を過ぎて右にフェリス中高部が出てくると、次いで左に山手教会が出てくる。その山手教会の角を左に曲がって坂を下るとフェリス女子大学があり、それを過ぎるとヒマラヤスギがうっそうと茂る「山手公園」に到着する。この公園は、山手本通りから奥に入った位置にあるため、人の目に触れにくい。だから、古い歴史を持っている割に、あまり多くの人に知られていない。

山手公園は、居留地に住んだ外国人専用の公園として整備されて、M3 年開園。以来、M32 年に居留地制度が廃止された後も長い間日本人が入れない「外国」として残されてきた歴史を持っている。私自身も、仕事の関係で 2004 年（H16 年）に山手公園が文化庁により文化財保護法に基づく「国の名勝」指定された時に、縁があって山手公園の歴史を知るようになった経緯がある。山手公園の歴史は港町横浜の歴史を象徴しているように見える。

山手公園は園内に広いテニスコートがある公園だが、ここは 2004 年に国の「名勝」に指定された公園でもある。「名勝」とは、景色が良いところで特に学術的価値が高いところを国が指定する。神奈川県では、鎌倉の円覚寺庭園、建長寺庭園、瑞泉寺庭園のほかに横浜の三溪園、山手公園の 5 か所が指定されている。

高く評価された学術的価値としては、①日本最初の洋式公園、②日本のテニス発祥の地、③日本で最初にヒマラヤスギが植えられたこと、にあると記録されている。横浜らしく何でも「もののはじめ」ということのようだ。しかし、私がこの公園で注目したいことはそれではない。注目点はこの公園がクラブによって運営される外国人専用のテニス公園として長い間存続してきたことである。

この公園の歴史には、開港当時の横浜居留地のあわただしい動きが強く反映している。1858 年(安政 5 年) 6 月に 日米修好通商条約締結し、1 年後に開港が決定した。各国から領事が到着して開港準備が始まったが、すぐに幕府の一方的な決定で開港地が条約で決まった神奈川でなく、横浜へ変更されるという「神奈川問題」が発生した。幕府はその抗議に対して、①神奈川沖は水深が浅く船の出入りに支障、②東海道筋で攘夷派連中とのトラブル多発する恐れ、③十分な用地確保ができない、などを変更理由に挙げたが、幕府の真意は外国人の隔離政策にあった。

抗議があったものの、幕府は約 3 か月半の突貫工事で居留地を造成すると、外国商人の取引相手になる日本商人を幕府で指名して横浜へ集める強硬策をとった。移転する日本商人には、地租税（固定資産税）免除、貿易取引許可など優遇したため、生糸や漆器を置いて外国貿易に従事する商店だけでなく、両替商三井、雑貨屋、食べ物屋、風呂屋まで営業を始めて早くから繁盛した。

その結果、来日した外国商人たちも次々と横浜で商売を始めるようになった。オランダ公使館の横浜移転をはじめ生麦事件などの後押しもあって、各国公使館も神奈川から横浜へ移転した。1862 年に英米仏の三か国の領事が「関内＝商工地区、山手=住宅地区」の街づくりを合意した時、彼らは外国人居留地の面積、地代、設備について幕府に次のような統一要求をした。

① 地代は長崎の山手同様に 100 坪当たり 12 ドルとすること
② 位置は本牧岬から掘割川の間とすること
③ 別に地代が課せられない公園を適当な場所に設けること
④ 用地は半エーカー（約 618 坪）以上とすること
⑤ 用地は柵で囲うか運河を作ること

③の一つが山手公園である。この外国人居留地には外国人だけが住んで、日曜の朝は礼拝、昼は山手公園でスポーツ、演奏会、夜はパーテイやゲーテ座の観劇をするような暮らしが始まった。実際には外交官、宣教師のほかに商社マンのほかに、本国で食い詰めたり香港で失敗した商人もいて、暴れたり、泥棒、喧嘩も絶えず、居留地委員会はそうした放浪外国人対策にも苦慮したが、英人を中心に、平穏な生活を望む人々は居留地内で射撃、ボート、競馬、テニス、サッカー、ヨットなどの余暇活動にも積極的に取り組んだ。これらの余暇活動は、同好者が集まってクラブを作って行うのが普通だった。

1870 年（M3 年）1 月、神奈川県は、居留民からの公園用地貸与要望を受けて、幕府の寺社領だった北方村の妙法寺から 2.2ha を取り上げて貸し出した。居留民たちは、1 株 20 円で資金を募集する会社を設立して、1870 年 6 月に洋式公園の横浜パブリック・ガーデン（山手公園）が整備された。しかし、公園の運営には資金が不足した。たまたま 1876 年（M9 年）になってイギリスから流入したローンテニスが女性向きのスポーツだったことから居留民の女性も参加するクラブが結成された。そこで県では、公園全体を「レデイース・ローンテニス・アンド・クロッケー・クラブ」（LLT&CC、婦女弄鞠社ろうきゅうしゃ。現在では横浜インターナショナル・テニスコミュニテイ YITC）に貸し出すことにした。借地料 150 ドル、テニスコートは　公園の 20%以内の 1500 坪以内、草木類の保護、公園の警備が条件だった。1876 年（M9 年）6 月に開園以降、山手公園はクラブによるテニス公園として運営されてきた。

山手公園は、居留地制度が廃止された後も（1899 年、M32 年）、5 年ごとの契約更新で神奈川県からクラブへ貸し付けられて、外国人専用の公園のままだった。しかし、1923 年（T 12 年）の関東大震災を機に、横浜市がテニスコート以外の敷地を市民公園にしようと働きかけた。その結果、1927 年になって公園の半分が国から横浜市へ無償貸付されて、市民公園になった。その後太平洋戦争で英米人が帰国したのち、1943 年（S 18 年）テニスコートを含む公園全体を国から横浜市が買収した。

しかし、戦後、再び山手公園は米軍によって接収されて、米軍将校専用のテニスコートになった。1952 年（S 27 年）対日講和条約で接収解除が始まると、もともとのクラブの外国人たちも戻り始めて、テニスコートも返還されたが同時に復活した LLT&CC（レデイース・ローンテニス・アンド・クロッケー・クラブ）へ再び貸与されることになった。　その時の貸付契約で、テニスコートは外国人専用でなく、日本人も会員に入れて利用することが条件づけられた。1964 年（S 39 年）、クラブは LLT&CC から YITC（横浜インターナショナルテニスクラブ）へ名称を変更し、日本人も正式会員として認めるようになった。これによって、横浜に最後まで残されていた居留地が約 100 年かかって撤廃されたことになり、横浜市民にもテニスクラブが解放されたのである。

なお、1982 年（Ｓ57 年）YITC は再度名称変更をして、横浜インターナショナルテニスコミュニテイになった。その際に、これまでの任意団体が公益活動を目的とする社団法人になり、会員以外の市民でもコート利用ができるように改められた。

（2014 年 5 月 21 日）